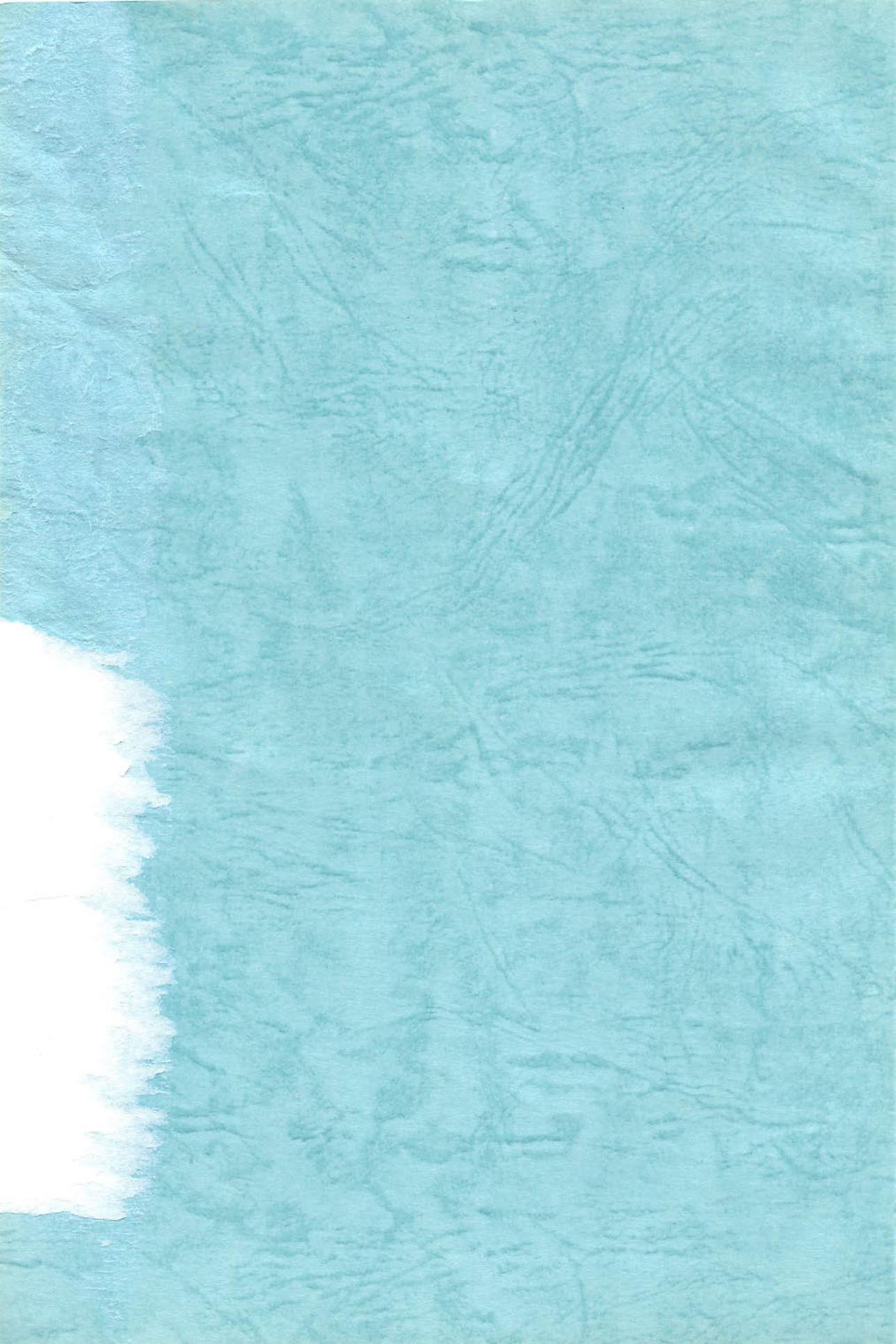


美しき谷の姉妹峰

四姑娘登山の記録

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



美しき谷の姉妹峰

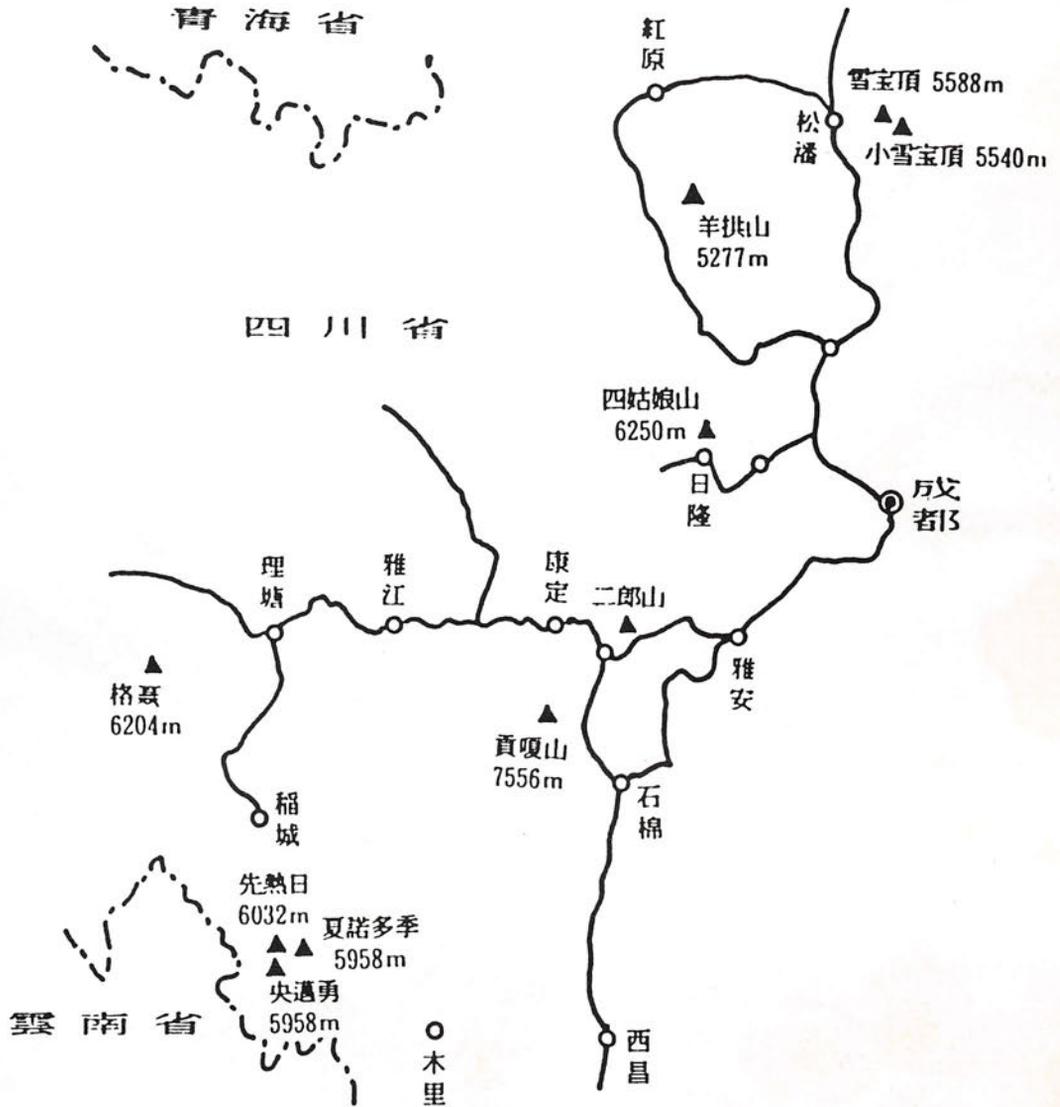
大姑娘登頂、二姑娘登攀

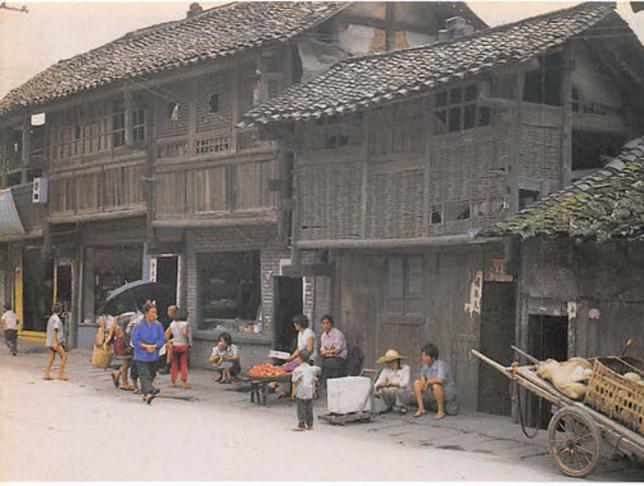


日本ヒマラヤ協会

1992年小雪宝頂登山隊

四川省H A J 関連山岳図





天全の古い街並み



日隆の子供たち



B・Cより大姑娘（頂上は奥）



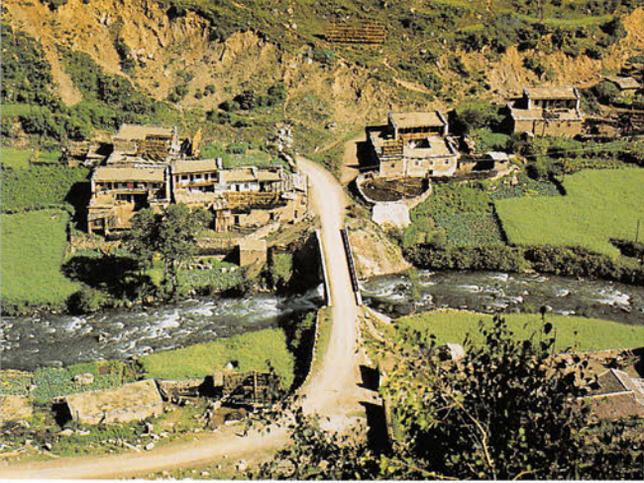
大姑娘

日隆の段々畑



巴朗山峠の夕景





沃日河と日隆の家



ヤク方と四姑娘連山



四姑娘



大姑娘より三姑娘(左)と二姑娘(右)

紡錘車を使う老婆



漩渡口の街風景

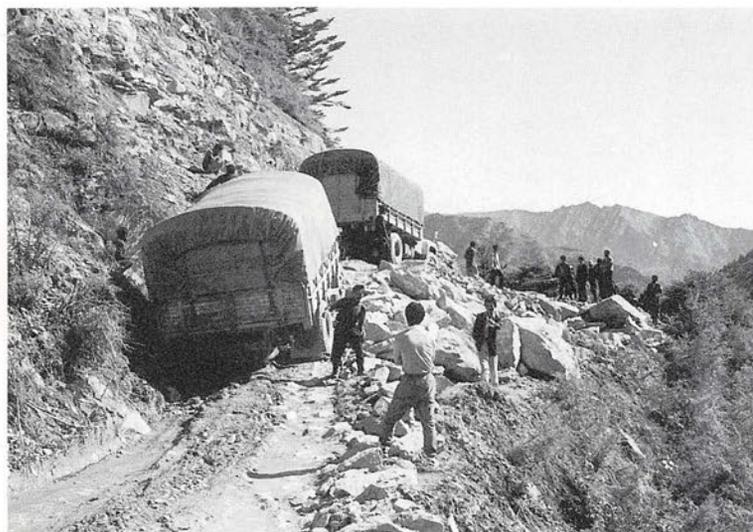




成都での出発準備



登山協会による歓迎会



巴郎山の登りにて大型トラックが立往生

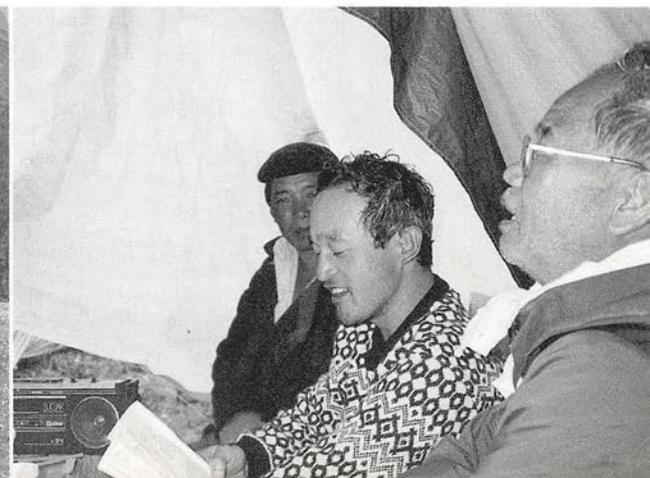


美しい巴

キャラバンにて娘達との語らい



B・Cでの歌合戦





天全にて増水で立往生



次郎山の登り口にてついにストップ



峠越え



ヤクによるキャラバンのスタート

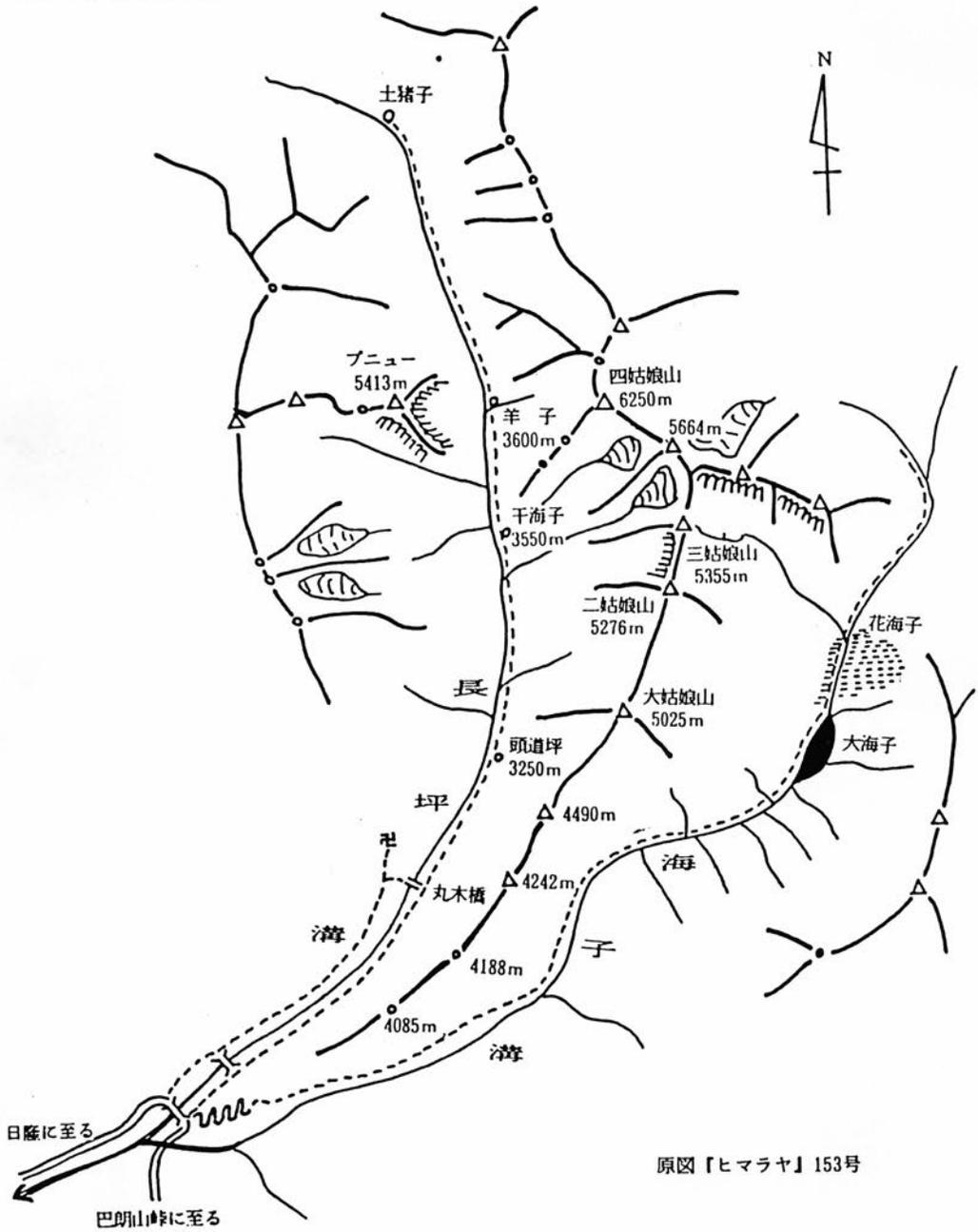
成都にて夜店をひやかす



毛主席の遺体公開に並ぶ人々



四姑娘山概念図



原図『ヒマラヤ』153号

目 次

隊長挨拶		医 療	岩田 達雄	52
	隊長 酒井 国光	体調チェック表		54
祝 辞		食 料	大久保 博	55
	連絡官 高 敏	環 境	天野 一郎	56
		記 録	谷田川 武	56
		*		
・第1部・登山報告		四姑娘周辺の概観	谷田川 武	57
登山隊の概要		四姑娘山域の概観・登山史	酒井 国光	59
行動概要		四姑娘の花々について	仕名野完治	73
天府を西南、そして西北へ	谷田川 武	四川省高峰位置図		74
花咲く牧場、湖を通過	仕名野完治			
滝上のガレ場へ	酒井 国光			
花咲き乱れる道のトラバース	谷田川 武	・第4部・資料		
ガレ場をコルへ、そして頂へ	岩田 達雄	通 信		77
鋭峰へのルートを求めて	大久保 博			
雨降る中を無念の荷下げに	小太刀 健	編集後記		98
霧の中の頂、何が満足か?	天野 一郎			
二度目の頂へ	仕名野完治			
日隆あれこれ	天野 一郎			
晴れ行く谷に思いを残して	大久保 博			
天府、そして悠久の都へ	谷田川 武			
・第2部・隊員の横顔・随想				
隊員の横顔				31
閑中忙有	酒井 国光			36
山旅雑感	岩田 達雄			39
随想あれこれ	仕名野完治			40
初めての中国、初めての登山隊	天野 一郎			41
しばしのメルヘン	小太刀 健			43
雨ばかりじゃないと思いつつ	大久保 博			44
風景への思い	谷田川 武			46
コラム				
オムマニペメフム・四姑娘の歌				48
・第3部・隊務報告・考察				
総 括	酒井 国光			51
装 備	小太刀 健			51
気 象	仕名野完治			52
天気概況				53



隊長あいさつ

隊長 酒井 国光

雪宝頂は、1986年8月、日本ヒマラヤ協会が四川登山協会と合同登山をし、初登頂をした山です。協会では、1991年8月、再度この雪宝頂に13名から成る登山隊を送り、8名の隊員が登頂を果しました。登山後の道々、隊長の私は、秘書長として参加してくれた山森欣一・協会専務理事と、来年の夏の計画について話し合いました。結論は、『来年も雪宝頂に来る』というものです。

帰国後の登山報告の『終わりに』に、次のように書きました。

「今回の登山を通して、雨期である8月とは言え、3週間あれば雪宝頂登山は可能であることがわかった。そして、比較的登山経験の少ない若い人、昔はけっこう登ったんだけどもという中高年の人、そして、海外登山は初めてで自分にも登れるのかと不安を抱いている人、等々でも、このようにすればより多くの人が雪宝頂の頂上が踏めるだろうという結論を得ることができた。

当ヒマラヤ協会では、来年以降もこの山域に登山隊を送りたいと企画している。今回得たノウハウを来年以降の隊に生かしたいと考えている」と。

計画の当初は、できたら隊を2つに分けて、雪宝頂と小雪宝頂の2つの峰をと考えていました。しかし、集まった隊員は7名ですし、いろいろな事を考え合わせ、目標の山を『小雪宝頂』に絞りました。

中国に渡った我々を迎えたのは、異常とも言える豪雨、それに伴う土砂崩れなどでした。『青天の霹靂』とは、青天に突然に起こる雷の意ですが、豪雨時に連続して起こる、天地を揺るがす雷を何と言えよいのでしょうか。そして、それがために右往左往する登山隊は何に警えればよいのでしょうか…。

当初の計画は、大幅に変更になり、全く予期せぬ大姑娘山の全員登頂という結末で終わりました。隊の目的から言いますれば、完全な失敗と言わなければなりません。しかし、たとえ目的の山は変わっても、よりポピュラーな山になっても、標高が500m程低くなっても、もう1つの山がもう一步のところまで登れなくても、我々隊員の心には何か満たされたものが残っているのです。

それは、あの状況下で、許された期間内で「自分の行動が精一杯であった」と、思えたこともあったでしょうし、また、海外登山に当たって、隊の目的以外に、「隊員一人ひとりが、個人的な楽しみ方を持ち合わせていた」と、いうこともあったらと思うます。

それらは、一口で言うと、平均年齢48歳強ということからくる『達観』とも言えるかと思っています。この面では、すばらしい隊員に恵まれたことを、隊長として感謝しています。

今再び、中国での日々を振り返るとき、于女士を初めとして、高敏連絡官、陳軍管理員、呉少泰通訳等四川省登山協会の皆様方のご助力に胸をうたれるものを感じます。遠来の我々に、何とか満足してもらおうとの心配りに、心から感謝いたします。また、国内で有形無形のご支援をいただきました皆様方に、厚くお礼申し上げます。有り難うございました。

今年の登山は終わりましたものの、我々は今後とも、登山活動を続けていく所存です。変わらぬご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます、ごあいさつと致します。

1993年1月

祝辞 — 報告書発行に寄せて —

四川省登山協会 高 敏

このたび92年中国登山の報告書が発行される運びとなりましたことを心からお祝い申し上げます。

今登山では、思わぬ雨による道路崩壊のため、雪宝頂登山の実行が不可能となってしまいましたことは誠に遺憾のことと思っております。しかし、せめてもの慰めを感じられることは、皆様方が全員大姑娘に登頂なされたことです。好天が続いておりましたら、二姑娘にも登頂なされたことと思います。

今登山に際しましては、酒井隊長をはじめとして、皆様方の困難に負けずに頑張られる気持ちに敬服致しました。特に六十四才の岩田先生はたくましい気迫で大姑娘に登頂なさいました。そして、二度も登頂なさいました仕名野先生と追って登頂なされた天野先生。若い小太刀先生、大久保先生、谷田川先生。皆様方の行動から日本国民の物事に対する真面目さと頑強さを見て取ることができました。

今回、悪天候と道路事情のため、皆様方に何かと不安を与えたことと存じますが、そのことを除きましたら、私どもと一緒に楽しく過ごしました日々が懐かしく思い出されるものとなることと確信致しております。短期間ではありましたが、私たちの友情は四姑娘山頂の雪のようにいつまでも消えないものと信じております。

しかしながら、わが四川省登山協会の協力にはおそらく不十分なところがあったことと思います。この点、適切なお意見をいただきましたなら、是非取り入れていきたいと思っております。酒井隊長のお話では、四川省の様々な標高を有する美しい山々が、日本の登山愛好家の方々にとって魅力あるものであるとのことでしたが、我々はそうした日本の方々から心から満足される登山をなさることができるよう、できるだけ早く不十分な部分を改善していきたいと考えております。そして、いつでも皆様方のご来臨をお待ちしております。

今後とも、貴協会が有意義な登山活動を展開され、両協会のみならず、両国人民の相互理解及び友好関係の促進に大きく貢献されていくことを期待致しております。

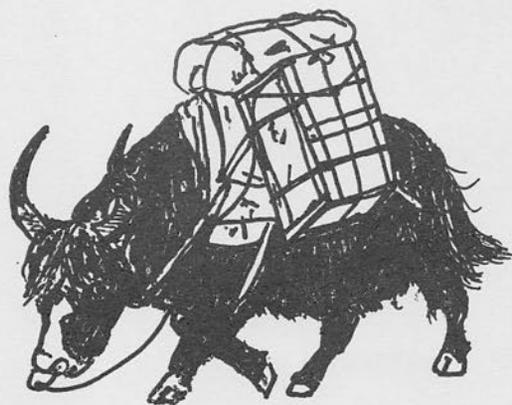
新年に際しまして、遠国から皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



第 I 部

登山報告

- 登山隊の概容
- 行動概容
- 行動日誌



登山隊の概要

趣 旨

HAJの野外活動は、未踏峰や未踏査地域を目指す隊、高峰の困難な課題を目指す隊、豊かな旅を追及する隊などに分けることが出来ます。

繁栄の一途を辿る日本の中であって、経済的には多少ゆとりが出来たものの、まだまだ長期間の休暇を取ることは難しい環境でもあります。また、一方では、登山界にも高齢化の波が押し寄せております。HAJの会員もこれら社会一般の波の中にある事は当然であります。このような会員の中から、「2週間程度の休暇の中で、ヒマラヤの高峰登山を楽しみたい！」との相談が寄せられる事が多くなりました。しかし、ヒマラヤの高峰が存在する場所の多くは、人里離れた遠隔地であります。

このような中から、昨年は山容、アプローチ、自然環境、情報、経費等の面を考慮して、中国・四川省北部に聳え立つ岷山々脈の最高峰の雪宝頂(5,588m)を選んで登山隊を派遣しました。13名(調査隊2名を含む)から成る同隊は8名を頂上に送り、所期の目的を果たすことが出来ました。

こうした趣旨での第2弾として今年は、雪宝頂に隣接する姉妹峰の小雪宝頂を目標の山に選びました。

雪宝頂は、1986年に日本ヒマラヤ協会と四川省登山協会の合同隊によって初登頂された山であります。岷山々脈の主峰が雪宝頂で、第2が小雪宝頂で主峰との高度差は僅か48mです。小雪宝頂は西南側に広い雪面をもった尾根型の頂上をした魅力的な山容をしています。

松潘高原にそそり立つ雪宝頂山群は、地元のチベット民族が古くから聖山として崇めている信仰の山でもあります。

HAJがこれまでに培って参りました経験と、隊員相互の経験を元に安全登山を心掛け、山岳の自然を汚染しないことを大原則とし、この登山を通して些かなりとも日中両国の友好親善の役割を果たす所存でありますので、この職旨をご理解頂きまして、皆様のご支援・ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

1992年5月

日本ヒマラヤ協会

1992年小雪宝頂登山隊

隊長 酒井国光

目的の山・登山の目的

1. 目的の山

小雪宝頂(Xiao Xuebao Ding、5,540m)

—中華人民共和国四川省アバ・チベット族自治州松潘県—

2. 登山期間

1992年7月30日～8月19日(21日間)

3. 遠征の目的

1) 小雪宝頂の登頂

2) テイクイン・テイクアウトの徹底(山岳の自然を汚染しない運動)

隊の名称・構成

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会小雪宝頂登山隊1992年
(英文名) HAJ Mt. Xiao Xuebao Ding Expedition 1992
(略称) HXXE-92

2. 主催

日本ヒマラヤ協会
The Himalayan Association of Japan (HAJ)

3. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会小雪宝頂登山隊実行委員会
会 長 稲田 定重(HAJ理事長)
実行委員長 山森 欣一(同 専務理事)
副実行委員長 酒井 国光(同 監事・登山隊隊長)
事務局 長 尾形 好雄(同 常務理事)
委 員 八木原 聡明、小島 守夫、鈴木 雄一、登山隊々員
登山隊事務局 日本ヒマラヤ協会

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506号
☎03-3367-8521 FAX 03-3367-4509

現地連絡所 中華人民共和国四川省成都市西藏飯店内 四川省登山協会気付け

4. 隊の構成

隊長	酒井 国光(53才)	茨城県	渉外係
隊員	岩田 達雄(64才)	東京都	医療係
〃	仕名野 完治(56才)	京都府	気象係
〃	天 野 一郎(45才)	東京都	食糧係
〃	小太刀 健(43才)	千葉県	装備係
〃	大久保 博(43才)	東京都	食糧係
〃	谷田川 武(38才)	東京都	記録係
連絡官	高 敏		
管理員	陳 軍		
通 訳	呉 少泰		



行動概要

- 7月30日 全員成田出発（NH 906便、10時54分発）。北京にて中国西南航空に乗り換え、成都着20時20分。連絡官より、目的の山の変更通知を受ける。
- 31日 四川省登山協会事務所にて、山の変更について検討し、貢山付近に決定する。午後隊荷の整理、食糧買い出し、梱包を行う。夜、四川省登山協会主催の歓迎パーティ。
- 8月 1日 午前中、出発準備。午後成都を出発し、雅安泊。
- 2日 早朝雅安を出発し、二郎山峠に向かったが、峠の途中にて道路崩壊に遇い、雅安に戻る。
- 3日 豪雨の中を、成都に戻る。次の目的地を検討する。最終的に、四姑娘山群に入ることとする。
- 4日 早朝成都を出発したが、途中交通止めに遇い、パンダ保護区の臥竜泊まり。博物館見学。
- 5日 巴朗山峠の上りで、交通止めに遇い、午後日隆泊まり。
- 6日 日隆8時30分発、隊員が先行したため、ヤク工が途中で荷をおろしてしまい、花海子に全員が到着したのは17時20分であった。初めてのテント泊。
- 7日 3時間登り、標高4350m付近にBC建設。ここより、大姑娘山と二姑娘山の2つを狙うことにする。
- 8日 休養日。隊員1名、休養のため日隆へ下る。午後、大姑娘山へのルート偵察に出る。
- 9日 6名の隊員は大姑娘山アタック。7時過ぎに出発し、頂上着12時50分。
- 10日 休養日。日隆で休養した隊員元気にBCへ戻る。
- 11日 6名の隊員で、二姑娘山東尾根の標高5100m付近までルート工作をする。
- 12日 二姑娘山の頂上アタックに出たが、標高5000m付近で雨に降られ、大事をとってBCに戻る。
- 13日 降雨のため、二姑娘山のアタックを断念する。3名の隊員が、二姑娘山のデポを回収する。2名の隊員が大姑娘山にアタックし、13時過ぎ、頂上に立つ。これで、大姑娘山の全員登頂がなされた。
- 14日 降雨の中、BCを撤収し日隆へ下山した。さらに、臥竜まで下った。
- 15日 パンダ園を見学し、成都へ戻る。
- 16日 隊荷整理。
- 17日 杜甫草堂、蜀刺繍店、武侯祠、竹細工店の見学。夜、答礼の祝賀会を開く。
- 18日 成都から北京へ。明の十三陵、万里の長城見学。
- 19日 帰国。（NH 906便、15時15分発、19時55分成田着）。

天府を西南、そして西北へ

— 出発、ジープキャラバン —

谷田川 武

7 / 30 (晴) 成田—北京—成都

朝から陽射しが強く、暑い一日を思わせる。8時、成田空港南ウィング集合。夏休みに入って1週間、空港はさすがに混雑をしている。ABCで別送していた隊荷を受取り、ザックと共に預け、酒井夫人、天野夫人らの見送りを受ける。10時45分、混雑のため15分遅れでテークオフ、NH 906便、ほぼ満席である。青空の下、機は上海上空、そして北京を目指す。我々はしばしの間心地よく酔っ払う。今回の隊は酒好き揃いで、先が楽しみである。

14時40分、現地時間13時40分(以降中国時間)、北京空港着。蒸し暑い。中国登山協会通訳の李豪傑氏らの出迎えを受ける。空港は大掛かりな工事中であった。3年前もアジア大会に向けての工事中であったが、今回はオリンピックに向けてのものか。成都への乗り継ぎまでに時間があるため、交替で荷物番をし、思い思いに過ごす。レストランで飲んだ罐ビール(モルツ)は15元であった。首都空港と言う場所柄か、他と比べても極端に高かった。

16時半、2階国内線出発ロビー集合、塔乗手続きをする。この際、カウンターで1枚しかチケットを貰えず、天野氏らが確認したが、大丈夫ということで、塔乗口に入る。しかし、これが後から大変なこととなる。というのは、塔乗の段になって、7人にチケットが1枚しかないということで、確認のために待たされ、何とか席を割振りされ、塔乗したら、ふたりの乗客がやってきて、「そこは私達の席だ。お前達のチケットを見せろ。」ということで、ひと悶着があったからだ。それでも、17時55分、時刻通りにテークオフ。西南航空4108便、満席である。夕暮れだが、上空は明るく、発達した雲海が美しかった。その雲のように胸が高鳴ってくる。

20時25分、成都空港にテークオン。四川省登山協会の高・陳連絡官、通訳の呉氏らの出迎えを受ける。マイクロバスにて成都の中心街を抜けて、宿舎へと向かうが、窓外の景色に話が弾む。21時半、西藏飯店(チベットホテル)着、なかなか大きなホテルだ。部屋に荷物を入れた後、近くの萬食荘という店で夕食をとる。蛙など、数々の皿が出、美食に乾杯で盛り上がる。高・陳・呉三氏共に年若く、楽しそうな人達だ。2時間近くがあっという間に過ぎ去り、暗い路地をホテルへと戻る。ホテルの部屋は新設されたばかりの新館で落ち着き、気持ち良かった。入浴の後、隊長の部屋を訪れた岩田、谷田川は土砂崩れのために雪宝頂に入れなかったことを聞かされる。初日より波乱含みの始まりである。

7 / 31 (晴) 成都滞在

明け方より街を行き交う車と人々のざわめきが騒々しい。7時半起床、今日もいい天気だ。部屋から見下ろす道を自転車が大波のように行き交う。交差点に信号がないため、自動車と自転車が交差する様子にははらはらとさせられる。工事中の高層ビルが目立つが、むしろを埃避けにしているのが印象的だ。3年前にも感じたことだが、落ち着いた印象を受けるのは緑の多さと建物の色彩によるのだろうか。何故だかほっとする。

8時半、ロビー集合、ホテルにてバイキング式の朝食をとる。揚げパンと饅頭が美味。どくだみの葉が出ています。チャレンジしてみるが、香りそのものの味で、体に良いということがなければ、決して食べられるものではなかった。様子を見てみると、中国人にもそれほど人気はないようだった。朝食後、隊長より雪宝頂に入れなかったことが告げられ、どうするか、この後、登山協会事務所で相談をし、その上で全員の協議で決定をするが、現在のところはミニヤコンガ方面への転進を考えているとの説明がなされる。

11時15分、事務所より戻った隊長の話を聞いて、協議を行う。成都を出て程ない要所（道の合流地点）で土砂崩れがあり、復旧の見通しも立っていないため、雪宝頂へも、四姑娘へも入ることはできないとのことで、地図をもとにミニヤコンガを南方から入り、雅家埂河をつめて、北稜の6000m峰の一つに取り付くことに決定をする。しかし、地図で見ると、かなり氷河が発達し、稜線も切り立っていることが推測され、日数的にも登頂は難しいものと判断される。ただ、外国人があまり入っていない地域であるということと、世界的な名峰ミニヤコンガを間近に眺められるということが楽しみに感じられる。とにかく、目的地が決まって、隊員の中に安堵感が生まれる。協議の後、昨夜と同じ店で昼食を取り、思い思いに過ごす。何人かはホテル近くの散策に出掛けるが、人口増長抑制のスローガンが所々に目に留まる。人口1000万の大都市、人口抑制は深刻な問題なのだろう。しかし、町には子供の、女子の姿も多い。ひとりっ子政策の進展により、女子の中絶が盛んに行われているというような話を何冊かの本で目にしたが、街行く人々を眺めている限りにはそうしたことは感じられない。

14時半、登山協会倉庫へ行き、デポ品の確認、隊荷の作成・梱包を行う。その間、天野、大久保は食料などの買い出しに出掛ける。とても暑い一日で、炎天下での作業はなかなか大変であり、裏の市民プールから聞こえてくる歓声が少し恨めしかった。18時、作業を終え、ラッシュの荒波の中をホテルへと戻る。夜、陳麻婆豆腐店にて登山協会主催による歓迎会が開かれる。協会副首席を初めとする出席があり、何杯も乾杯を重ねる。21時半、ホテルに戻る。明日はキャラバンスタートである。どのような出会いが待っているだろうか、期待と少しの不安の中で、岩田、仕名野、谷田川は隊長の部屋で更に杯を重ねる。

8/1（雨後晴） 成都—邛峽—雅安

7時起床。雨に濡れた街路樹の緑に、色とりどりのカップに身を包んだ自転車が右に左にと行き交い、上から眺めているととても美しい。ホテル5階、紅宮という立派な構えの食堂で朝食を取る。チベット風な壁掛けが印象的であった。9時半、倉庫へ行き、最終荷造りをするが、車が揃うまで待機させられる。

12時45分、ジープ2台、軽トラック1台にてスタートする。約15分も走ると、田園地帯の中の有料道路（代金2元）を行くようになる。有料道路が終わっても、のどかな田園風景が続き、小さな水路を何本も渡る。成都郊外のこの地域は水稻の大生産地域である。13時40分、岷江本流を渡る。凄い水量に、上流での土砂崩れが想像される。14時、斜江河を渡り、邛峽の街に入る。邛峽の邛はもともとは漢代の移民族の呼称であり、漢和辞典にもそのように出ている。何の工事か、道路は大規模な工事中であった。それ程大きくない店で昼食を取るが、あっという間に美味な皿が多数出てくる。食の国ということをつくづくと感じさせられる。この店には大小併せて9つもの鍋があったが、鍋の多さが中国料理のひとつの秘訣なのかもしれない。邛峽は名酒文君酒の産地であり、史跡も多い。15時40分出発、少し走った所で、トラックの調子が悪いので、修理をする。ここの娘は美人で、黄色の洋服が良く似合った。中国では黄色が良く好まれるが、それは陰陽五行説で黄が世界の中心を占める色とされているからであろう。小さな峠を越えて、名山、そして雅安へと入る。18時、雅安賓館着。雅安は市で、交通の要所でもあるため、賓館も大きく、立派だ。部屋から見る青衣江沿いの街並も美しく、何処か洗練された感じがする。

夕食後、キャラバンに入れた安堵感もあって、全員で青衣江に掛かる橋を渡り、町中を散策する。中央部の公園では、子供から老婆までがジャズダンスのような動きの早い踊りをやっており、着ている物もモダンであった。ホテルに戻る皆と別れて、岩田、谷田川は青衣江に沿って街を一周する。中心部を外れると薄暗く、川岸のベンチには家族連れが涼を求め、アベックが愛を語っていた。ホテルに戻り、6階の受付嬢（中国では各階ごとに受付がいて、部屋の鍵を開けてくれるところが多い）に日本語を教える。勉強しているとあって、ふたりともとてもうまかった。ここまで日本の旅行者が数多くやってくることの反映なのだろう。街を歩いていても感じたことだが、雅安は美人が多い。この受付嬢も愛らしかった。雅安は有名な茶の産地だが、茶が美人を育むのだろうか。9時半頃より雨が降りだし、雷鳴が轟く。今日までの疲れからか、明日の出発が早いからか、皆寝るのが早いようだ。ひとり、時間を持て余す。

8/2 (雨・曇・雨) 雅安—天全—雅安

5時半起床、街はまだ夜の世界だ。天野氏らの部屋でオリンピックの女子マラソンを見る。6時半出発、ジョギングの人が目立つ。昨夜の雨のせいで涼しい。道は青衣江に沿って進むが、朝の川は眠っているかのように霧に霞み、岸辺の切り立った岩と共に南画のような風景が続く。所々土砂が崩れている。暫く走ると雨が降りだし、多くの落石に先が思いやられる。7時半天全の街に入り、朝食を取る。揚げパンに肉まん、そして豆乳、簡単なものだが、これが旨い。子供達が道を行くので、尋ねてみると、夏休みでも補習があり、結構落第も多いとのことであった。8時出発、青衣江の上流天全河に沿って遡っていく。川岸は急だが、トウモロコシがかなり上部まで植えてあり、蜜蜂の養蜂箱なども目に付く。所々立派な滝が流れ落ちるが、ここでは凡な風景である。9時、鉄砲水に嵌まって立ち往生しているマイクロバスのためストップ。トラックがロープで引上げ、9時半過ぎ我々も慎重に通過する。しかし、少し走った所で土砂崩れのために再度ストップ。復旧作業員を乗せたトラックが進んでいくが、先の様子が分からないため、隊長、大久保が様子を見に行く。偵察によると、3か所の崩れがあり、先の2か所は路肩が大きく崩れ、長い距離を木々なども塞いでいるため、復旧は絶望的という。やんごとなし、10時45分、楽しみにしていた二郎山を遠くにして、雅安へと引き返す。12時、天全の中心街に入り、人民公社に車を預け、昼食を取る。又一家という6畳程の小さな店で、予約をしていたわけでもないのに、多数の皿が出る。その材料の多さに感心させられる。今日は雅安泊りということで、食事後、街外れまでのんびりと歩く。この街は古い軒並みが多く、絵になる。蛇に猿の頭などを並べた露店の薬売りも印象的であった。小1時間程歩いて、街外れに出、橋の上から天全河を眺めやる。ここでも水量多く、大河の体だ。しかし、ここより流れ下って青衣江となり、大渡河を合し、岷江となり、金沙江を合し、揚子江となって遠く東シナ海へと流れ込む。長江という名の的確さを実感する。また、東シナ海から800キロで日本だと思ふと不思議な気がする。

15時10分、昨日と同じ雅安賓館に入る。夕方より大砲のような雷、そして雨。中国スタッフが成都に電話をして、四姑娘への道が復旧したとの情報を得るが、この雨でどうなることやら。とにかく明日は成都に帰ることとなる。夜、隊長の部屋で飲むが、心なしか、皆元気がない。深夜、増水のせいか、川の音が大きく聞こえる。



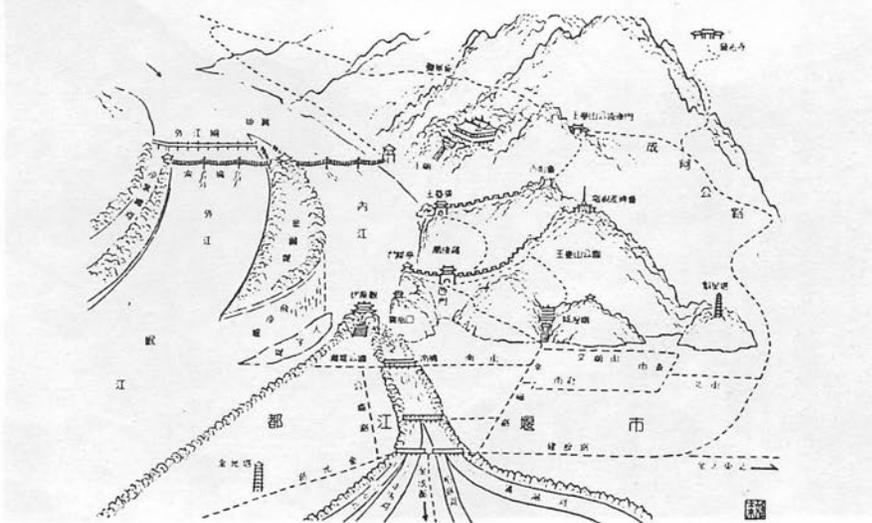
露商の薬売り(天全)

8/3 (雨) 雅安—新津—成都

7時起床、雨、本当に良く降る。今日は成都に戻るだけなので、ゆったりとした日程だが、雨となると気が重い。8時半出発、郊外で2号車はタイヤの修理をする。待つ間雨に煙る茶畑の緑が美しかった。今日はただ走るだけだ。移動中は滅多に寝ない私もぐっすりと眠る。12時50分、新津にて昼食を取る。名物の黄辣丁を味会うが、名のごとく辛い。新津は辣椒の産地である。14時過ぎ、バケツの水を撒いたような雨の中を成都郊外へと入る。15時、西藏飯店着。チベットの歌や踊りのショーを見ながら、紅宮にて夕食を取る。夜、協議をする。雪宝頂への道も紅原回りルートが開通したそうだが、入山までに時間が掛かり過ぎて、登山期間が短くなるので、四姑娘に入り、2峰か3峰をねらうことに決定する。隊長がヒマラヤ協会に電話をして伝送してもらった四姑娘の資料と高さんらの話をもとに、明日登山口の日隆まで入り、花海子 3900 m程にB.Cを張り、C1を出して登頂する計画を立てる。

8/4 (晴) 成都—都江堰—臥尤

5時起床、6時20分出発、朝靄の中を走る。7時前だが、人々の姿が多く、特に成都市内に向かう自転車が絶えない。段々と靄が薄くなり、日が射してくる。今日はいい天気になりそうだ。辺りは広く美しい田園地帯が続く。成都西北に面した郫県は銀の郫県と称される大穀倉地帯だ。7時、都江堰市が近付くと、自転車の流れが逆となり、車やトラクターの後に掴まって市を目指す者が多い。市の入口には二王として祭られている李冰親子の像が立つ。遡ること紀元前3世紀、蜀の官吏であった李冰親子は荒れる岷江を鎮めるべく大治水工事を行った。堰は流れを二分する魚嘴、水量と流砂を調節する飛砂堰、灌漑用取水口の宝瓶口からなり、調節された水は南の穀倉地帯を潤している。街中の黒石河橋にて、2号車が缶ビールを購入してくる間、1号車は待つ。自転車の荷台一杯に箒を積んだ人々が市に売りにいく光景が絵になる。ホテルが用意してくれたランチボックス(カステラやパンにゆで玉子など)を食べ、8時半、都江堰を後にする。木を積んだトラックが増えてくる。9時過ぎ、土砂崩れによりストップ。復旧を待つ人々にアイスキャンデーとゆでとうもろこしを近隣の人々が売りにくる。とうもろこしは何と7角(約18円)。10時過ぎ、徐々に動きだし、通過。岷江本流と別れ、支流の魚子溪沿いの道に入る。山が切り立ってくる。道路の舗装工事を行っているが、ひび割れを防ぐため、箒を引き水を撒いている。山地でありながら舗装を行っているのはパンダ生息地の臥尤があるからであろうか。目の前に越える峠であろうか、相当に高い山々が迫ってくる。しかし、川の水量、谷の大きさからして、まだまだ時間が掛かりそうだ。

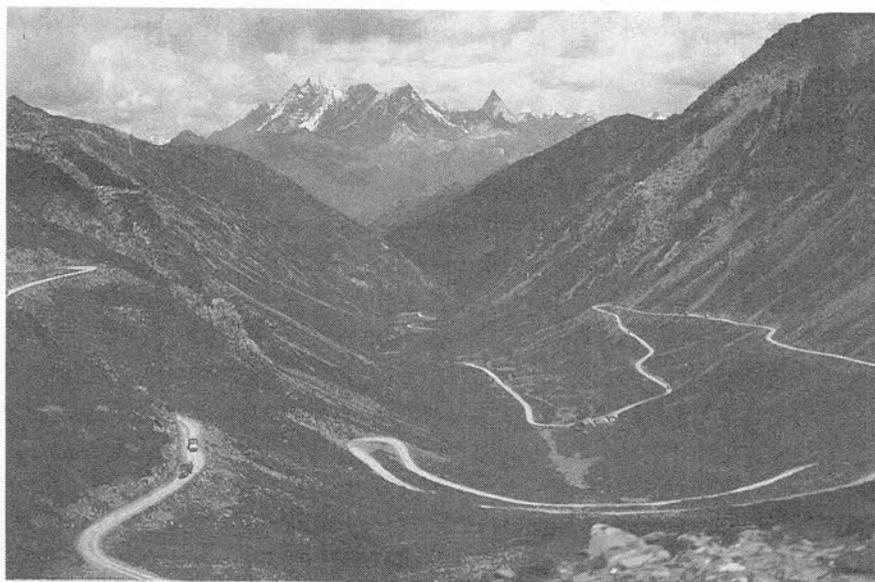


都江堰図

13時前、我々のトラックがぬかるみにはまって動けなくなる。しかも上からは落石が落ちてくる。水が流れているため、何時落石があるか分からないので、落石の間をぬって皆でロープで引き上げる。所が、我々1号車の運転手が怖じ気付いてなかなか来ようとしなない。それでも、13時25分、この難所を通過する。さあこれからだぞと思った矢先、臥牯の招待所に着く。昼食かと思ったら、今晚はここに泊るという。日隆まで入るものと思っていた我々は、登山期間のこともあり、日隆まで行くように主張するが、これから先も道が悪く、時間もまだまだ掛かるという。そのこともあるが、最大の原因は運転手が疲れてもう運転したくないということらしい。已むを得なく、ここに泊ることとなる。昼食の後、自然保護陳列館の鍵を開けてもらい見学をするが、パンダや金糸猿の剥製、四姑娘の植物などの展示がされていた。特別行政地区であるためか、街も美しく、発電所も2つ在り、恵まれている感じであった。招待所の別棟は個室で、照明も明るく、シャワーのお湯も出た。ゆったりとした生活が続く。

8/5 (晴) 臥牯-日隆

少し涼しさを感じて起床する。6時出発、皮条沟沿いの散村が続くが、チベット系の顔が増えてくる。日の当たらない谷は肌寒い。夜、峠を越えてきたのであろうか、木を満載したトラックと数多く擦れ違う。中には荷台の下に木を挟み込んでいるようなものもある。凄い重量で、良くこれだけのダート道を走るものだと感心させられる。だいぶ走った所で岩山が見えてくる。4000m程であろうか。8時半、崖崩れで盛り上がった箇所を越えられぬトラックのためにストップ。前のトラックがワイヤーで引き上げようとするが、逆Uの字状になって切れてしまう。仕方なく、我々はカステラとスプライトの朝食を取る。2号車の運転手が昴などのテープをがんと流す。9時45分通過、上り詰めて行くと谷が広がり、美しい。その向こうに4896m峰と思われる雪を抱いた山が見えてくる。天井に頭をぶつけそうながたがた道が続くが、道端にはブルーポピーを初めとする花々が美しい。12時10分、遅れた2号車を待って、4500m余の峠を越える。タルチョが何本かはためいていた。峠の向こうも美しい谷で、神の山と呼ばれる鋭峰を初め5000級の山々が眺められる。13時過ぎ、日隆着。馬かヤクが揃ったら出発とのことで待機をするが、揃わず、招待所泊りとなる。夕方、中国側の白酒で乾杯をする。ほろ酔い気分の大久保と谷田川は村の子供達と遊ぶ。明日はいよいよ山に入れる。夜、星が降るようだ。



神の山(プニュー)を遠望する

花咲く牧場、湖を通過して

— ベースキャンプへ —

仕名野 完 治

8/6 (晴) 日隆—大海子—花海子

やっと今日は山に登れる。我々山屋は中国に観光に来たわけではない。行先が小雪宝頂からミニヤコンガ山域へと一転、さらに四姑娘山域へと転じたので、事前にこの山域を研究して来たわけではないので、全く未知の世界であった。急速、隊長が留守本部へと連絡し、四姑娘山域の資料をファックスで送ってもらったが、自分にとってはどんなところか想像もつかなかった。

昨夜泊まった日隆の宿泊所の部屋は四人部屋で、ドアの掛金具は壊れたまま、ベットは簡易ベットで、薄い敷き布団の下には油紙でくるんだ薄いマットが敷いてあった。うわ布団はうす汚く湿っぽく、おまけに小便臭いものには全く閉口した。ネコかネズミが小便を引っ掛けたのであろう。当然部屋には洗面所もなければ風呂も便所もない。便所は村の公衆便所へと行かなければならなかった。辺境の山麓であるからやむを得ないが、テントで寝たかった。

朝起きて外に出てみるとひんやりと清々しい気分であった。やはり 3500 m ともなると下界とは違った気分である。ヤクが集まってくる。

青空が広がるもと、昨日来た道を少し戻って村外れの橋を渡り、その脇から尾根の末端を直登する。道筋にはサンショによく似た葉をしているがトンガラシのような赤い実を付けた木があった。暫く行くと、突如沢山の羊の群れが現れ、我々とゴチャマゼになってしまった。ヤクの柔らかい糞がいたるところにあるのを踏まないように急坂を登り詰めると、朝日を浴びている尾根上の草原に出た。ここで初めて四姑娘の全容を目にすることが出来た。全く素晴らしい展望である。我々が目指す山の様子がやっと分かってきた。

辺り一帯はウスユキソウが一面に生え、それ以外にも沢山の名前の分からない花が彩りを添えていた。そこに座って四姑娘を眺めている仲間の姿は一幅の絵となっていた。草原の小高いところにはチョルテンがあり、沢山のタルチョがはためていた。チベット族の世界に来たことを実感する。殆どの荷物はヤクが運んでくれるので、標高の割には息切れなどもせず、花や景色を楽しみながら登ることが出来た。

この長い長い尾根筋を登るのは我々のパーティーと我々の荷物を運んでくれるヤク方だけだと思っていたら、日隆の村からの羊飼いにきのこ採りや木の実採り、そして、上部にある夏場だけの住居(石積みのカルカ)へ荷揚げをする人、日隆からの買い物帰りの人達が次から次へと登ってくるのにはびっくりした。この長大な尾根が彼らの生活の場であり、巨大な牧場でもあるのだ。昼、放牧しているヤクや馬を夜集めるための各カルカには人の気配があった。当然用心のための犬がつながれており、ひとが近付くと吠え立てた。それらを敬遠しながら先を急ぐが、林の中で急にヤクや馬と出会うとこちらがたじろぐ。

途中、広い河原に大きなテントが何張りか張ってあるところに出くわした。何か行事でもやっているような雰囲気であった。ここが今日のベースキャンプになるところかと思ったら、アルパインツアー社の固定キャンプ場とのことであった。

行動食を摂りながら、大きな斜面をやっと越す。少し疲れが出てきた頃、大きな湖のほとりに出た。大海子である。冷たい水で顔を洗い汗を拭う。顔を上げて対岸に目をやると、のんびりと湖面に糸を垂らしている釣人がいる。こんな山奥にと思うが、カルカの人達なのだろう。どんな魚が釣れるのか知りたかったが、確かめる余裕もなかった。

湖岸沿いの道の最上部まで来た頃、雨となった。雨の中を歩くのが嫌なのか、少し前を先行していたヤ

ク方達が荷物を勝手に降ろしてしまっていた。時間的にも夕刻に近く、そろそろキャンプを設営したい気持ちだったが、この辺りは傾斜地で、しかも湿地であるため、キャンプに適していない。先行している隊長達が次のカルカ近くに平地で乾燥した適地を見付けているとのことで、そこまで行くようにいうが、ヤク方達は動こうとしない。そこで、我々は隊長と無線連絡を取りながら、連絡官を通じて強く交渉したが、雨のせいかな、ヤク方達はいっこうに動こうとしない。業を煮やした大久保さんや谷田川さんが強く出るがあまり効果なし。連絡官は何本もタバコをすすめ、なだめたりすかしたりして、1時間後やっとのことで、荷を積み直し、前進する。17時15分、隊長らの待つカルカ着。

ここは四姑娘主峰が真っ正面に見え、氷河の末端から流れ出た水が広い河原をなし、下に湿地帯が広がる絶好のキャンプ地であり、花海子と呼ばれるところである。いたるところにあるヤクの糞を取り除き、キャンプを設営した。氷河から吹き下ろす風がととても冷たい。夜、連絡官を交えて協議をする。ここから見た三姑娘、二姑娘は岸壁帯で登れない。明日、大姑娘と二姑娘との間の上部に移動し、B・Cを設置、大姑娘と二姑娘を登ることとなる。富士山を越す標高、天野さんが少し不調を訴える。

8/7 (晴) 花海子ーB・C

素晴らしい快晴で明ける。朝日に山が美しい。昨夜話したキャンプ適地を目指し、ヤクの踏み跡のついた急斜面を登り出す。登り出して間もなく、上部から荷を積んだヤクが猛烈な勢いで我々の方に向かって突進してきた。我々はクモの子を散らすように逃げる。皆、ビックリギョウテン、何事が起きたのか見当も付かなかった。理由は、我々の食料としてヤクの背に乗せていたニワトリが鳴いて暴れたため、ヤクが驚いて一目散に下に向かって走り出したのであった。その際、荷が落ち引きずられ、二箱が破損してしまった。散らかった食器やテルモスを拾い集め、出発する。尾根をトラバース気味に行くと、下に大海子、花海子が見えて美しい。道は、時には踏み跡が隠れるようなお花畑だ。

昼過ぎ、格好のベースキャンプ地に到着した。昨日の話では6時間掛かるとのことだったが、3時間程のアルパイトだった。周辺は一大草原で、高山植物が隙間無く咲いて足の踏み場もないくらいである。大姑娘、二姑娘登頂の基地としてアプローチ的にも最適、水場も側に水量の多い谷川があり、最高のキャンプ地である。時間が早いので、続けて大久保さんと酒井隊長とが上部の偵察に向かい、他のメンバーは整地をし、ベースキャンプを設営し、トイレなどを作る。雲が静かに流れていく。静かだ。

16時前、隊長達が戻り、ヤク方達も交えてベース開きをする。缶ビールで乾杯をし、記念写真を撮る。その後、日中の歌合戦を開く。ビール(今回はたっぷりと有る)、日本酒、山賊料理、いやが上にもメートルが上がり、大騒ぎの夜であった。しかし、標高4340m、さすがに外は寒かった。



大海子にて



B・C 開き

滝上のガレ場へ

— ルート偵察 —

酒井国光

8/7 (晴) B・C-4700m-B・C

お花畑のトラバースが終わり、少し登ると、思わず、「えー、もう着いたの」

と、言いたくなるような場所にテントが張られていた。

昨日の打ち合わせでは、BC予定地までは、6時間はかかるということだったのだ。しかし、すでに中国側のテントは張られており、隊員ものんびりしている。場所もお花畑のなかであり、近くに川も流れているし、見晴らしもすばらしい。場所としては文句はない。あとは、ここから大姑娘山、二姑娘山が射程距離なのか否かだ。

大久保はというと、すでに上部の偵察に行ったと言う。

(あとは、偵察して確かめるしかない)

中国側のテントの隣に、我々のテントを張るように指示して、大久保の後を追う。

水流の右側の斜面を登る。下からみると、ピーク状に感じるが、ひと登りすると傾斜が落ち、平坦な放牧地となる。数頭の馬が草を食んでいる。

ここは大姑娘と二姑娘の間の谷で、2つの山の最低鞍部はもう近いらしい。昨晚の連絡官の話だと、この谷から、大姑娘と二姑娘に登れるという。

「なるべく上まで行ってそれを確かめよう」

と、登り続ける。

道らしきものははっきりとついているし、所々にケルンらしきものさえある。

標高4700m付近まで登る。

見渡す限りは、碎石を重ねたような岩稜、岩壁だ。今までの少ない経験から、こういう所の岩は極端に脆いのだ。できれば避けて通りたい所だ。

左手上部の大姑娘への登路は、どれも岩稜に食い込むガラガラのルンゼにとるしかない。そのうちでも、頂上から右へ2つ目のルンゼが、最も良さそうだ。これとて、稜線に出てから200m位は岩稜を登らなければならないだろう。

二姑娘への登路は、頂上から東に落ちる尾根上の雪面に、いかにして出るのがポイントとなる。雪面の下は岩稜になるが、この岩稜の通過をなるべく短くしたい。それには、岩壁帯に食い込む大きなルンゼに入るのが良いようだ。落石には十分注意しなければならない。

以上のように、ねらいをつけBCに下る。

下りは、気持ちに引かれるものがあるのか、40分だ。

すぐに『BC開き』

始めはいろいろと儀式を考えていたが、缶ビールでの乾杯と全員での記念写真の撮影だけですませる。

4時半過ぎ、日中交歓会を開く。ビール、日本酒、山族料理、独唱、合唱、雑唱……。

メートルが上がる程に、元気が出て、大騒ぎの夜であった。

〔タイム〕 BC(12:50)～4700m(14:50～15:07)～BC(15:47)

花咲き乱れる道のトラバース

— 大姑娘ルート偵察 —

谷田川 武

8/8 (曇) B・C滞在、大姑娘偵察

明け方、雨が降る。7時半起床。日本出発以来9日間行動してきたので、今日は初めてのホリデーとなる。体調のいまひとつ優れない天野氏は日隆に下り、あさって登ってくることとなる。9時15分、ヤク方ひとりと共に下っていくのを全員で見送る。少し寂しさが走る。山にはまだ雲が掛かっている。

午前中はテープを聞いたり、寝たり、思い思いに過ごす。上のプラトーから流れ落ちる滝の音が静かに響いてくる。昼、食担の大久保氏がホットケーキを作る。旨い、つつい食べ過ぎる。

午後、腹こなしも兼ねて、大姑娘の偵察に向かうこととする。14時25分、高連絡官とヤク方の冠さんの案内で、仕名野、小太刀、谷田川の3名で出掛ける。色とりどりの花の咲き乱れる斜面を、足の早い高氏らの後を遅れないように付いていく。振り返ると、二姑娘のピラミダルな山容が美しい。下には大海子の青緑が美しい。しかし、ぼんやりはしてられない。咲き乱れる花に踏み跡を見失いがちになるからだ。踏み付けるのが勿体ないような花の絨毯を少しの後ろめたさを感じながらふわふわと踏んでいく。1時間程で尾根を巻き込み、大姑娘を正面に見る。下から谷ぞいに登ってくるルートが何本かあり、その一本が我々の道に合流する。片言の中国語と筆談とで大姑娘のルートを確認する。水に光る露岩の右側を通り、ガレ場を主稜線のコルへと出、そこから稜線沿いに登るとのことである。稜線には雪が少し見えるが、傾斜は殆ど無いようだ。冠氏の話では、ここから山頂往復で4時間とのことだが、高度順化の問題を除いても6時間は掛かるように思われる。無線でそれらのことを隊長に伝え、引き返す。

下り出して直ぐに高氏が甲高い呼び声を上げるので、何かかと思ったら、下の谷を1パーティーが登ってくる。聞くと、相模家族山の会とのことであった。コンガへ入る予定だったのを、やはり土砂崩れでこちらに入ってきたらしい。王連絡官と再会の握手をする。16時半過ぎ、ベースに戻る。相模の会は谷川の向こうにベースを置いた。

岩田先生が少し具合が悪いとのことで、O2パックを吸わせる。夕食後、サイコロを振るが、5人とあって、いまひとつ盛り上がらない。明日は大姑娘を登頂するので、8時には終了し、それぞれのテントに入る。明日の晴天を願うが、星はあまり見えない。



花海子を見下す

ガレ場をコルへ、そして頂へ

— 大姑娘登頂 —

岩田達雄

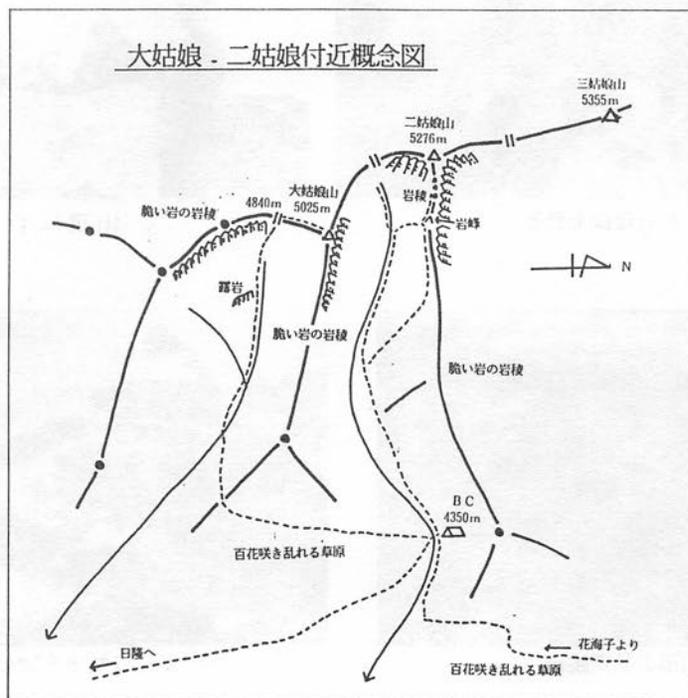
8/9 (曇) B・C—大姑娘—B・C

6時起床、昨夜酸素ポンペを吸ってタツプリと寝たので、体調はまあまあようだ(体温34℃、脈搏78)。頭痛もない。隊長、大久保さんなどが食事を作ってくれている。有り難い。

7時、B・Cを出発。テントのそばの川を渡って左方向へのトラバースが長々と続く。草原の足元には、高山植物が高度を増すに連れて種類を少しずつ変えて咲き揃う。しかし、ヤクの道でもあるので油断は出来ない。エーデルワイスの花が群れというより、一帯に咲き乱れ、また、黄色い花から白い花、赤い花と我々の目を楽しませてくれる。

あの小高い所から右に展開するのかなと何回も何回も期待しながら、先へ先へとトラバースは続いた。やっと山の向こう側に出てほっとする。この辺りまでは前日仕名野さん達が踏まれて調査したところで、迷って下の場所に出る恐れのある所だ。ここをちょっと下ってからいよいよコルを目指してルートファインディングだ。コルの手前に幾つかの岩場が立ちはだかり、それらの右側を巻きながら行く。水の滴り流れる沢状の所や足場の柔らかい所などがあるが、殆どは歩きやすい場所で、足下には一段と美しい花が競い合って咲き誇る。カメラでパチパチと撮りたかったが、このときはもう体調が優れず、無念の顔をして眺めるだけ。先に行く谷田川さんの足取りが恨めしい。特にサクラソウが色鮮やかで私の目を引いた。

最初の岩山の上で休憩してコースを検討する。丁度ヤクが降りてきたところを登るらしい。コルを目指けて出発する。コルの手前の岩場の上で休憩する。天気心配していたが、薄日が差してきたので安心する。ガレ場には要所要所にケルンがあり、道もしっかりと踏まれていた。



11時20分、4840mの科尔に出る。雄大な展望が広がり、海子溝、長坪溝の谷の緑が美しかった。ここから山頂へは急登で、続けて谷田川さんがトップで私はその後が続く。途中から雪とガレ場の中に入り多少苦しんだが、12時50分山頂到着。ここまで色々なハプニングがあったが、とにかく皆嬉しい表情は隠せない。握手を交わし、早速ヒマラヤ協会の旗を出して登頂記念の撮影をする。山頂からの眺めは素晴らしく、圧巻だ。穂高を大規模にしたようで、美しく迫力ある山並みの眺めは私たちをこの上なく喜ばせた。お互いの写真を撮ったり、食事をしたり、50分程滞在する。5000mの山頂にいることを忘れさすほどのどかな時間が過ぎる。

帰途は酒井隊長が途中までトップで下山、科尔には14時15分に着く。これからは下りだから楽だと思ったが、今までの疲れが出て、体も足も前に進まない。そして、のろのろとした動作でないと息苦しくなる。下りこそとカメラを手にするが、シャッターを押したのは1~2回しかなかった。私以外の人は足が速い。でも、谷田川さんが前で、隊長が直ぐ後に付いてくれて、他の隊員との距離は次第に離れたが、黙々と歩き続ける。歩くしかない。

岩場の下りからB・Cへのトラバースのポイントにやっと辿り着く。しかし、これからも大変で、疲れた体に鞭打って頑張る。19時前、B・Cに辿り着く。12時間に及ぶアルバイトであった。

夜、連絡官なども交えて登頂記念パーティーを開く。焼きそばに、卵スープ、ホットケーキなどなど、そして乾杯に乾杯。疲れ切った私は酸素を吸い、先に寝てしまったが、明日はホリデーということで、だいぶ遅くまで盛り上がったようだ。

体は大変疲れたが、大姑娘に登頂できた喜びで胸が一杯だった。多謝。



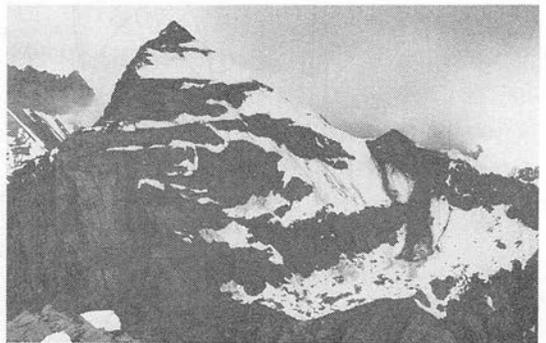
科尔から稜線を登る



山頂にて



山頂よりの眺望



二姑娘を望む

鋭峰へルートを求めて

— 二姑娘ルート工作 —

大久保 博

8/11 (曇) B・C—二姑娘東稜5100m—B・C

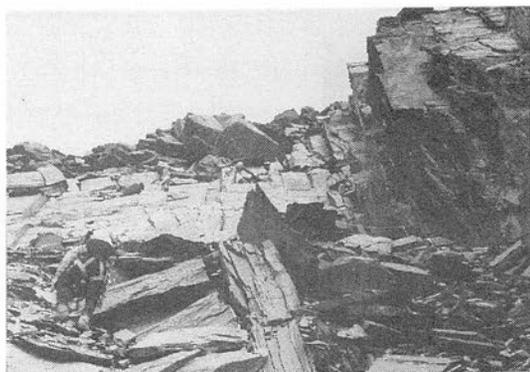
いよいよ、今日は二姑娘へと向かう。ザイル、登攀用具一式を持って、朝露を踏んで、6人で出発する。休養1名。

相模の会に同行している連絡官の王さんの「easy」という言葉を信じよう。大姑娘とは比較にならないだろうけれど、まあ3日間あるのだから、登れるだろうという軽い気持ちで歩く。登っていくうちに、天気も上々になってくる。

東尾根の岩峰の下に出るために、急なガレ場を登らなければならない。ガレの下まで、高連絡官達も空身でついてくる。下を見ると、二姑娘の南面、4700m地点に相模隊のC1が張られている。彼等はルンゼのルートを取っている。我々は稜線ごしに行ってみることにする。岩を落とさないように登るのは難しい。10時10分、稜線に出、第一の岩峰下着。

右は壁ですっぱり谷まで切れ落ちている。酒井隊長、大久保で左側を偵察する。偵察後、岩峰の下で、登攀用具をつける。ガチャガチャと金具をつけると、少しずつ緊張感がわいてくる。目標の山は決まった。南面の偵察では、雪面に出れば、トラバース気味に東尾根を回り込めそうだという判断があった。要は、雪面まで稜線の何処に行くかだ。天野、小太刀、大久保、谷田川の4人でルート工作にあたる。対面の大姑娘の岩稜は滝谷のようで、穂高で岩登りをしているような気分である。とにかく、慎重に登る。

岩峰の下からは左手に回り込んで、ルンゼ状に登る。ここからフィックスをする。岩は脆い。登るために岩を落とさなくてはならない。下にいる方が危険なくらいだ。フィックス2本で稜線に出る。その先は傾斜の緩い雪面に出、ここからも一応フィックスして第2の岩峰下に達する。雪面に出ることは出たが、右手(北面)はスパッと切れ落ち、とてもそちら側を回り込むのは無理である。左手(南面)は、何とか頂稜の雪面に続いていけばいいなあと覗くと、途中から雪がなくなって、急なガレがある。それではと、そのまま第2の岩峰を攀じると、10メートル、スッパリと切れ落ちていて、懸垂下降で下りるしかない状況である。アップで下りたら、帰りはユマーリングになるなあとちょっと溜め息が出る。丁度、相模隊の4人が雪面をコンテニューアスで下りてくる。頂上は近いのである。



浮石のガレ場にルートを開く



5100m付近の雪面を登る

時間は14時半、5100m、今日はここまでとする。頂上まであと200m足らずである。無線で隊長に状況を報告し、下山する旨を伝える。明日また来て、左手の方から回り込んでみよう。天気はそこそこ。明日があるとの軽い気分と、たった4本でもルート工作したという軽い充実感にひたって、第1の岩峰の下まで下り、登攀用具をデポする。長時間待っていた隊長と仕名野さんは寒かったに違いない。

下りは、急なガレを避けて、稜通しに下る。二姑娘上空がどんよりとした感じになってくる。16時40分、ベース帰還。

ザイルの数が足りるかなあ、明日の天気は大丈夫だろうかとやや不安になるも、明日に期待して、早めに寝る。なお、明朝に備えて、圧力釜でうどんをゆでておいた。

8/12 (曇後雨) B・C-5000m-B・C

夜半、トイレで目を覚ますと、おぼろ月であった。朝、案の定雲が多い。「今日いっぱいもってくれ」と念じて出発の準備をする。朝食のうどんは芯もなく、好評のうちに終わる。

今日の行動メンバーは、昨日のルート工作隊に酒田隊長を加えた5人とする旨を昨夜のうちに言われていた。7時、天気が心配だが、とにかく出発する。岩峰の下のガレ場への道を取らずに、稜通しの道を行く。昨日は3時間掛かったデポ地まで、荷物がなかったせいもあるが、1時間半と掛からないで到着する。時折、ガスが谷からわいてくる。

デポ地で、天野さんが「明日は大姑娘のほうに行きたいので、これからB・Cに下って、明日に供えたい。」と言う。結局、4名で上に行くことにする。

「さて、行こう」と、岩峰の下を左に巻いて、いよいよこれからは勝負と思っている矢先に、ポツリポツリと雨が降ってきた。「これからどうしよう」と相談である。天野さんに間違えて無線を2台渡してしまい、我々には1台もないということで、天野さんの所まで取りにいった谷田川さんを待っている間、雨足は激しくなり、雨具をつける。はじめのフィックスの所まで来ていた。しかし、雨のため岩がテカテカつるつるしている。さらに、曇まで降ってきた。

「今日はこちらまで。」と酒井隊長。一応、今後の予定を協議する。

「もうザイルを回収して、このルートを諦めよう。」と大久保。

「せっかく5100mまで来たんだから、明日に賭けたい。」と谷田川さん。

「登山期間は明日まで。明日に賭けよう。」と、酒井隊長がすぐさまに結論を出して、昨日と同じ岩峰の下に荷物をデポする。10時45分、下山開始。

雨の下りは速い。11時50分にB・Cに戻る。濡れた身に暖かいお茶は有り難い。岩田さん、仕名野さんに感謝する。気分的にやや落ち込みながらも、のんびりと昼食を取る。雨は止む素振りも見せない。

夜、ヤケ酒を飲んで、7時半には寝てしまう。夜中も雨は TENT を叩いていた。



B・Cから二姑娘をめざす

雨降る中を無念の荷下げに

— 二姑娘ルート回収 —

小太刀 健

8/13 (雨) B・C-5100m-B・C

夜中中雨がテントを叩き、これでは登頂は無理だなあと思いながらも、何とか止んでくれないかなあとシュラフの中で思っていた。明け方、一時雨が止んだので、これはもしかすると行けるかなと思ったが、結局また降り出して、登頂断念と決まった。8時、仕名野氏の案内で、天野氏が二姑娘へと出発する。8時半、大久保、谷田川、小太刀の3名で、重い足をひきずりながらデポ品の回収へと向かう。視界がきかないため、前日までのルートよりかなり下にきてしまう。大久保さんの話では、このままトラバース気味に行けば、前々日相模の会のパーティーが下りてきた雪面に直接出られるのではないかということで、もしそうならば、もう1日あれば登れたかもしれないなあと思いながら、デポ品の置いてあるコルに引き返す。視界がきかず、3人離れ離れになってしまい、コルの方角はどっちかと思いながら、歩きにくいガレ場を足をとられながら登る。暫くして上の方から大久保さんの声があったので、ホッとてやっとの思いでコルに辿り着く。谷田川さんも息を切らしている。しかし、小雨が激しくなり、休んでられない。

ここからさらにガレ場を登り、フィックスロープの岩場を2ピッチ、ユーマルで登り、さらに岩稜帯を経て小さな雪面に出る。ここで雪面の先の岩場にデポしてあるザイルを回収し、下りてくる大久保さんを確保する。上部の回収を完了し、引き返す。雨で下りの危険が考えられるため、岩場のフィックスロープは残置とする。コルに戻って、ここにデポしてあったものをザックに詰め、はぐれないよう3人揃って下山にかかる。雨はこやみなく降り続き、滑りやすい岩に足を取られながら下る。これで終りかと思うと、残念さが胸をかすめる。視界が悪く、帰途も道を間違えてしまう。ガレ場から草原地帯へと変わり、やがてテントが見えたときにはホッとした。15時40分、ベース着。酒井隊長が作ってくれたお粥が、冷えた体に実に旨く、ひと心地ついた思いだった。17時、仕名野さん達も戻り、安心する。

夜、連絡官、ヤク方など、全員で打ち上げをする。中国側は心尽くしの料理を食べ切れないくらい作ってくれる。乾杯に乾杯、そして独唱、合唱、そしてまた乾杯。皆いい顔だ。山自体はやや物足りなかったが、楽しい旅行ができた。雨の山に遅くまで山賊の歌声や笑い声が響いた。



雨の中ヤク方も交えて宴は続く

霧の中の頂。何が満足か？

— 大姑娘山登頂 —

天 野 一 郎

8 / 13 (雨) B・C—大姑娘—B・C

明日が最終日であるという前夜、天野は天候にかかわらず大姑娘山に登ることになった。隊の中で最も山頂を踏んでいないただ一人であったからだ。富士山でも確実に高山病の症状が現れる自分であったから、今ごろの方がかえって良かったかも知れない。下でウロウロして時間をロスしたくなかったので、途中までは、仕名野さんが同行してくれることになった。

朝、天候は曇時々霧である。数日前に登ったメンバーにルートを細かく聞いておいたから心配はないが、それにしても展望があまり期待できない中を出発するのは、気が重い。ベースキャンプから尾根を一本越えた反対側の谷を登りきるのがルートになっていた。登路の谷に入ると、そこは意外にも広々とした草原が、相当な高度まで続いていた。トレッキングツアーがたまに登る山なので、細々と踏み跡はあるし、ケルンもあった。仕名野さんは、高山植物に興味を持つ人なので、いろいろと花の名前を教えてくれるが、なんとかキンバイとか、なんとかキンポウゲとか、なんとかウスユキソウは、私の脳裏から短時間の内に蒸発してしまう。足を止めると、広い草原の谷間に、沢のせせらぎの音だけがやけに大きく聞こえたりする。

ヤクの糞が少なくなり、足元への心配が薄れると草地は減り、代わりに瓦礫が多くなってきた。目印にしていた横に広い岩壁を昨夜指示された通り右から巻くと、傾斜は増し谷はしだいに狭まっていく。右だ、左だのルートの心配が無くなり、あとは大姑娘の南のコルへひたすら登るだけというあたりへ達すると、小雨模様になった。コルの直前は、ザレ混じりの岩場でちょっと気を引き締めた。霧で見えない間は、結構すごいところを登るんだなと思っていたが、正規のルートはもっと右の急なザレであった。コルへ出ると、雨は結構な降りとなり、風も少し出てきた。どうせ頂上へ行っても、何も見えないことはわかっていた。行くか、戻るか。思案のしどころであったが、この先、ルート上の危険はないと聞いてきたし、仕名野さんも頂上まで付き合うと言ってくれるし、ここで引き返す理由は何もなかった。登りを決心した。しかしガス混じりの小雨なので、視界は至って悪い。ガラガラの岩続きの尾根上だが、所々に目印となる布切れがあるので助かった。ガスの動きや風の当たり方で、今いる場所が、長い山稜上の天空へ突き出た一部であることが感じられる。大地を踏んでいながら、空中に躍り出ているような、そんな気持ちである。目当てになると教えられていた雪田を渡り、山頂へ続く急な岩稜をゆっくりゆっくり登ると、もう高いところは無かった。大姑娘山頂であった。のんびり歩いたためか、ベースから五時間以上かかった。足元とごく近くの岩場以外何も見えない。交信で「遙か西にミニヤコンガ」などと冗談を言ったが、本当に晴れていれば眺望出来たかも知れないのだ。四姑娘山だってド迫力で目に焼き付いたかも知れない。念のためにと持ってきた双眼鏡は、雨に濡れないようにと、ザックのさらに奥へと押しやられた。5025メートルと言っても、やはり季節は夏だ。風も強くはないので、寒い気はしなかったが、それでも我々は風をよけられそうな岩の陰に休憩場所を求めた。

二十分ほど休んで下山にかかった。雨も本格的に降り出したので、コルまではすばやく下り、その後、横に広い岩場の上までは、何となく気が抜けなかった。再び草原となり、野生の馬の群れが霧の晴れ間に見えたりすると、ペースはぐっと落ちたが、安堵と、そしてなんとはなしの満足感が全身を包み始めた。

二度目の頂へ

— 大姑娘登頂 —

仕名野 完 治

夢にも思ってみなかつた四姑娘山城へ来て、しかもたったひとり2回も大姑娘に登らせてもらうなんて考えもしなかつた。

隊長の発案で、8月9日は高所順応を兼ねて大姑娘へ登ろうということで、日隆へ下山している天野氏を除いて全員でお花畑の広大な斜面を踏み跡を辿りながら1時間程のトラバースから始めた。

大姑娘から南面に押し出している長大なガレ沢を忠実に詰め、もう少しで稜線というところまでくると、苦しくなつたので、足を運ぶピッチがうんと落ちてしまった。時間的にはもう少しだと分かつてはいたが、少し登っては呼吸を整えなければ足が前に出なかつた。五千米を越す高度を経験したことはなく自信がなかつた。幸い頭が痛くなかつたので、少し歩いては一息入れての繰り返して、少し遅れて皆がいる頂上に辿り着くことができた。頂上に着いたとたん一ぺんに元気が出てきたのには我ながら呆れた。

五十代半ばを越した年齢で果たして登れるだろうかと心配だったが、私よりも年配の岩田先生も同行されているので精神的に安心感があつたのと励みにもなつた。あついに自分も五千米を越える高所に登れたんだと自信みたいなものが湧いてきた。この日のために低山ではあるが京都山科の上醍醐山を毎月8回から10回は登ってきたのが効を奏したのだろうかとも思った。7月の富士山ではあれだけ頭が痛く、夜呼吸も苦しかったのに、比較的調子がいいとも思った。

下山は楽かと思つたが、思つたより距離が長く、厳しいアルバイトだった。これで大姑娘に登つたので、もう欲も無かつたし、しかももう一度登ろうなんて気力も無かつた。

翌10日は休息日でのんびりと体を休め、11日には二姑娘へのルート工作のためにフィックスロープを担ぎ肩まで登り、若い4人がフィックス工作をしている間、肩で待機していた。その間、日が照ると暑く、日が陰ると寒く、その繰り返して体温の調節ができず困つてしまった。案の定、風邪をひいてしまいすっかりコンディションを崩してしまつた。そこで12日はベース滞在とする。その夕刻、隊長から、天野隊員ひとりがまだ頂上へ登っていないから、明日大姑娘の沢口まで案内してやってほしいといわれたので了解した。

翌13日は朝から雨で止みそうにもなかつた。それでも8時に思い切って出発することにした。天野隊員と雨の降る大草原（お花畑の大斜面）を延々と歩き、やっと大姑娘の沢口に到着した。ここで彼を見送るつもりであつたが、調子がよかつたのでもう1時間ほど同行するつもりだと告げて沢をつめる。

稜線直下まで来て、天野氏にひとりでいきますかと聞くと、行きたいとの答え。自分もひとりで下山するのも寂しいし、体の調子も良かつたので、一層のこと頂上まで同行しようと思つた。無線で隊長にそのことの了解を求める。隊長の了解を得て、前回よりも右側の稜をゆっくりと詰め、雨に濡れたガレ場を踏み締め、13時15分頂上に立つ。何も見えない雨の頂上で天野氏と握手、私だけが知らぬ間に第二登を果していた。感激。



日隆あれこれ

天 野 一 郎

早速の下山

頭痛はするの、体温は38度を越えるので高山病の症状が出ていた。自分の体が、降りれば治ると訴えかけていたので、日隆までの2泊3日の旅をする事になった。下山は、ヤクを下ろす明さんが同行してくれることになり、ちょっぴり安心であった。

山腹の草原に延々と続く踏み跡程度の道は、放牧の為のいわば仕事道だ。30分も下ると石積みの囲いと小さな夏小屋があり、数頭のヤクがのんびりと陽にあたっていた。見覚えのある顔がにこにこしてこちらを見ている。我々の隊の荷物を運んだヤク方の冠さんだった。ここが自分の小屋だと身ぶり手振りで説明してくれた。昨日夕方、遅くなって下って行ったが、なんということはない、すぐそばに泊まり場所があったのだ。さらに30分ほど下ると、再び夏小屋があらわれここで休憩となった。この主は、明さんとは親しいらしく、とても親切に対応してくれた。

けむい小屋の中で

まずはこの小屋の生産活動の説明。ヤクやら羊やらに草を食べさせているだけではなしに、要するにヤクの乳を搾りチーズを造っているとのことだ。搾った乳をかき回す為の器と棒も見せてくれた。ちょっとやってみたが、結構力があるのに驚いた。次に注目したのは、天井からぶら下がっている魚の薫製。下の川で釣ってきたという。ハヤより大きくマスより小さな淡水魚であった。良く釣れるらしい。とは言え、その釣竿には恐れ入った。柳のような木の棒である。浮きもおもりもない。不細工で大きめの針が糸の先端についているだけだ。これで釣れるのかと問うと、自慢げな顔つきで釣れると答える。うらやましくなってしまった。そうこうする内にヤクの乳が温まった。山羊の乳ほどには臭みがなく牛乳に近いといえる。炉端の隅にあった残りのパンまでもらい、結構飲んだり食べたりしてしまった。

臨時のヤク方

長く休みすぎたと思ったのは、私だけではなかった。下るペースが少し速くなった。元気が出てきたのを明さんは見逃さず、私に棒切れを渡して、3頭いるヤクの内、ラストのを追い立てろというのである。歩き始めから先頭のヤクが勝手な行動をとるので、そのヤクに手を焼いていた。その間他の2頭に目が行き届かなくなる。一人で3頭というのは、やはり大変なのだろう。ヤクは縄でつながれているわけではない。うまく行けば、前のヤクに素直について行くのである。ところが、横へそれたり、遅れてしまったりと、すべて好きなようにさせておくわけにはいかない。ラストのヤクを追い立てる仕事が必要となるわけである。時折尻をたたくのだが、コツがわかってくると、斜め後ろからヤクに見えるように棒を振るうだけでも効果がある。道中忙しくなり、のんびり景色を眺めたり写真を撮る暇はなくなってしまった。

途中、省登山協会所属の王さんに出会った。神奈川県の出発地を案内していた。話している内に、我々のベースキャンプと同じ場所に行くということがわかった。日隆には午後2時頃についた。

チェコのルーマン

人民公社の食堂で夕食をとっていた。夕方どやどやとやってきたアルパインツアーのおばさんたちと話す気もなく、ポケーツとしてしていると、隅の方で一人モソモソと食事をしている外国人を見つけた。ビールでも飲むかいと誘うと、風邪気味なのでビールは遠慮するが、話をしようと言う。チェコからやってきた大学生でルーマン君といった。四川省が2回目だという彼の辺境ヒッチハイク・トレッキングは興味ある内容であった。小金から日隆に登ってきたというが、彼の口からは、康定とかラマ教寺院とか、ミニヤコングの西面とか、よく一人で行けたと感心するような地名がぼんぼんとして出てきた。正式な許可証はないようなので聞くと、今回も2度ボリスに捕まると平然と答えた。彼いわく「四川省のボリスもトラック運転手も親切である」と。

固いベッドに横になったとき、登山ならぬ旅のおもしろさのあった日だなあと思うのであった。

晴れ行く谷に思いを残して

— ベースキャンプ撤収 —

大久保 博

8/14 (雨後晴) B・C-日隆-臥龍

あっという間に登山期間は過ぎてしまった。当初の小雪宝頂という山から紆余曲折した我登山隊は、大姑娘の全員登頂で「まっいいか」ということに落ち着いた。でも、私の心の中には、まだまだハプニングがありそうな気がする。例えば、迎えの車が来ていないとか。そんなとりとめのないことを考えているうちに夜は明けた。といっても薄暗く、外はまだ雨だ。荷物の整理をする。量的には来た時とあまり減っていない。燃えるゴミは燃やすことに、ビールの缶などは潰したりして、燃えないものは持ち帰ることにする。「Take in Take out」の実施である。

しかし、困ったことが一つあった。それは、入山の時はヤクが9頭だったのに今日は6頭しか上がってきていない。ヤクだけでは荷物は積み切れない。結局、積み切れないザックはヤク工が担ぐことになった。ご苦労さま。9時、B・C発、大姑娘の東斜面をトラバース気味に下る。歩き始めて暫くすると、雨は上がり、対面の山々が時折顔を見せる。ガスの切れ目からの懸垂氷河とその峰々の姿は一服の絵そのものである。銀板に燃き付けていた写真初期の世界か、はたまたベス単？の世界か。休憩時はフォトタイム。しかし、ガスがかかり、なにせ暗い。撮れたら面白い構図になるぞと思いつながら、慎重に遅いシャッターで撮る(結果は想像に任せる)。山の次は、花だ。登りの時は、あまり撮らなかった高山植物も、今日は思い思いに撮っていく。登りのルートと合流すると、エーデルワイスを踏み付けるようなお花畑の中を道は続く。途中で2、3のカルカ(家)を見、麦畑を見、人間の営みはどんな辺境の地にもあるんだなぁと変に感心したりする。また、直径30cmはあるかと思われるキノコにはビックリ。それを細く切って、屋根に干してあるカルカがあるので、食べられることは分かる。味はどうなのか？

日隆の町に下る尾根の外れ(峠)にラマ教の塚がある。タルチャー(旗)はあるがマニ塚ではない。香をたいた跡がある。オンマニペニフムの経文紙が散らばっている。一応ラマ圏なのだ。近くで、羊や牛を放牧している。子供達はその番をしている。のんびりとしているが無用に遊ぶ人間はいない。皆、何らかの仕事の割り当てはあるのだ。今の日本の子供らのお手伝いなどという生易しいものでは、もちろんない。しかし、子供らの我々の姿を好奇に見詰める目には、くもりは全くない。「ニーハォ」と声を掛けると、「ニーハォ」とはにかみながら答える。愛らしい。ひととき休息する。鳥が「ピジッピジッ(麦酒=BEER)」って鳴いているので、重い腰を上げ、最後のつづら折りの坂道を下ると日隆の橋へと出る。ヤク隊は傾斜の緩い道を遠回りして下っている。橋からその様子を見てみると、ヤクが下りに苦労しているのがわかる。と間もなく、1頭が転び、荷物が転がっていく。8月7日の出来事を思い出した。暫く経って、ヤク工らが橋に着いたが何事もなかったような顔であった。日隆の招待所には、大久保と天野が3時に着いたが、中国隊はもっと早かった。懐かしい？運転手の顔が見えるし、連絡官の高さんの奥さんもいる。今日はここまでと思いつ、のんびりとビールでも飲んで後を待っていると、高さんらは時間を気にしている。後の人はどれ位で着きそうかと我々に聞くので、思い思いに写真などを撮ってくるから、はてどの位か見当もつかないと答える。荷物を部屋に入れられないので、変だなぁと思っていると、臥龍まで下るといふ。後ろの人達を橋まで車で迎えにいった。酒井隊長ら、4時半着。

入山の時は、臥龍に2時半で、峠越えは暗くなるので駄目といていた運転手もこれから下っても大丈夫という。慌ただしく軽い食事をして、5時に出る。再び見ることもないだろう山々を振り返り振り返り、峠へと延々と続く道をゆく。峠6時、ブルーポピーが無造作に咲いている。これからが長かった。美しい夕景の後には、ただ暗闇の中を走るのみ。入山の時にもこれぐらい頑張ってくれば1日無駄にならなかったと思うことしきり。2台のジープが臥龍に到着したのは22時であった。

天府、そして悠久の都へ

— ジープキャラバン、帰国 —

谷田川 武

8/15 (晴) 臥尤-旋口-成都

7時半起床、爽やかな朝である。昨夜は招待所に着いたのが遅かったが、好意でお湯のシャワーを浴びることができ、体もさっぱりとしている。朝食事、隊長より、日本に電話が通じ、隊の状況を伝え、各家庭へも下山の連絡を頼んだとの話がある。いよいよ、帰国である。しかし、このところ降り続いた雨に、成都までの帰路が心配される。

9時出発、すぐに大熊猫(パンダ)の研究所に立ち寄る。鍵をじゃらじゃらとさせた所長が説明をしてくれる。現在19頭のパンダがおり、うち2頭は子供とのこと。見学する際には静かにして、近付き過ぎない、写真は撮ってもいいですとのことなど。ふむふむと聞いていると、パンダを抱いて写真を撮れますが、皆さんで600元ですという。最初聞き間違えかと思ったが、どうもそうでないらしい。思わず無然とする。酒井隊長が一応どうするかと皆に聞くが、誰もが無然としている。

しかし、見学を始めると、皆ニコニコ顔になり、声を出したり、近付き過ぎたり。そういう私も、檻越しに一緒に写真を撮ろうとして、腕を引っ搔かれてしまう。あまりはしゃぎ過ぎたためか(我々もはしゃいだが、一番はしゃいでいたのは高さんの奥さんだったように思う)、結局最後には撮影代としてひとり5元を払うこととなった。あのお金は所長のポケットマネーとなったのだろうか?

9時50分、研究所を後にするが、往路と同じ箇所、直ぐに足留めを食う。しかし、補修も進み、止まっているトラックも少なかったため、30分弱で動き出す。後は順調に進み、11時40分には岷江沿いの道に出る。しかし、やはり往路と同じ路肩の崩壊した箇所でもたしても暫くの足留めに会う。お客を満載したバスがお尻を擦って、お客を降ろしている。最初からお客を降ろせばいいものと思うが、どうもそういう考えはないようだ。

12時半、旋口の町に入り、滌塵飯店にて昼食を取る。ここの娘は愛想が良く、味もなかなかで、繁盛している様子だった。我々は扇風機の下に通され、冷えたビールにすっかりいい気持ちとなる。13時半出発、一路成都を目指す。道も平野部に入り、スピードを上げる。車の量も増えてくる。



パンダと共に



立往生するバス

15時、成都の入り口の金牛区で洗車をする。成都市内に入る車は汚れを落とすことが義務付けられているようだ。綺麗な車はそのまま真っ直ぐに走っていく。我々の車は当然洗車となる。どうするのかと思っていると、人は乗ったままで、左右からホースの水が掛けられ、タワシでゴシゴシと洗われる。綺麗になってスタート、登山協会の倉庫に着き、荷物を降ろし、16時過ぎ、久し振りの西蔵飯店に入る。

夜、ホテルのレストランにてチベットの歌や踊りなどを観賞しながら、いささか飽き始めた(ぜいたくな話だが)豪華な食事を取る。食事後、何人かで錦江賓館付近の夜店をひやかす。相変わらずの賑やかさであったが、流行があるのであろうか、3年前にはあまり無かったモノクロ写真のようなデッサン画が多く売られていた。賓館で冷たすぎるビールを飲んで戻る。

8/16 (晴) 成都滞在

9時、倉庫へと行き、隊荷の整理をする。とても暑い一日で、コンクリートの照り返しもあり、続けて仕事をすると頭がくらくらとした。倉庫内のデポ品が埃だらけなので、全部を出し、綺麗にし、デポ品と青海省へと送る荷物とに分ける。16時半終了。

夜、我々の希望により火鍋を味わう。惠願、成都では有名な店らしい。鍋がふたつに仕切られ、一方が薄味(健康火鍋)、一方が昔からの辛味になっている。口の中が火事のようになるが、昔からの辛味の方がおいしいように思う。火鍋の店では男性は上半身裸になっていいということで、高さんたちは裸になっている。流しがやってくる。1曲10元とのこと。食事後、また錦江賓館前の夜店をひやかし、それぞれに土産を購入する。

8/17 (雨) 成都見学

夜半より降り出した冷たい雨が降り続き、秋の気配がする。

9時半、市内観光に出発、まず西部郊外の杜甫草堂を訪れる。周辺はのどかな感じのする農村地帯で、草堂もしっとりとした感じがする。唐の詩人杜甫が759年から3年間居を構えた場所で、その後何回も修復されてきている。正面の詩史堂には杜甫の像が安置され、裏には広大な美しい庭園が広がっていた。雨に濡れた竹や灌木の緑が美しく、その中に赤壁や望楼が霞む。雨の風景もまた良し。1時間余見学して、近くの蜀繡研究所を次に訪れる。蜀繡は蘇州、湖南、広東と合わせ、四大名繡のひとつで、その両面刺繡の技術にはただただ感心させられる。続けて三国志ゆかりの武侯祠を訪れる。ここは蜀王劉備玄德と丞相諸葛孔明を祠った廟である。中門を潜ると、左に蜀の武官、右に文官の像が併せて28体並ぶ。そして、正面には劉備の大きな像が安置され、左右には関羽、張飛の兄弟像がその性格を現す形相で主君を守っている。この奥の諸葛亮殿には「静遠堂」という額の下に静かな目差しの孔明像が安置され、主君を後ろからじっと見守っている。しばしの間、歴史への思いを馳せる。



件の火鍋



杜甫草堂にて

陳麻婆豆腐店にて昼食を取った後、竹細工の工房を訪れる。瓷胎竹編といって、糸のように細くした竹ひもで陶器をくるみ、編み上げていく。竹に彩色も施され、非常に美しいものだ。16時前、小降りになった町をホテルへと帰る。

夜、豆花飯店にて于副首席、羅副秘書長、高連絡官などを招いて答礼会を開く。何杯も杯を重ね、それぞれに美声、ダミ声を張り上げる。酒井隊長は、宇宙時代の今、地図は国家機密でないことを力説する。ホテルに戻っても、隊長の部屋で遅くまで盛り上がる。

8/18 (晴) 成都—北京

4時起床、5時出発。昨夜の白酒と寝不足でか、皆顔がさえない。省外に出る場合の空港使用料は30元であった。6時45分、西南航空4101便にて北京を目指す。雲海が正に海のように美しい。

9時過ぎ、北京着、暫く待って、長城へと向かう。空港からは並木の美しい道が真っ直ぐに続くが、平行してオリンピックに向けて高速道路が築造中であった。市街には新しい高層ビルも目立った。長城へは片側2車線のいい道が続く。正午前、十三陵に着く。明王13代の陵墓群であるが、発掘されている(入り口が発見されている)のは定陵ひとつである。昼食後、その定陵を見学する。副葬品の展示された博物館を見、地下宮殿に入る。地下5、6階の深さであろうか、玄室をはじめ5室がある。築造費800万兩(当時の国家財政2年分)、延べ6500万人(日3万人)を動員して作られたという。ひんやりとした地下から暑い地上へと戻り、長城・発達嶺へと行く。十三陵以上に凄い人だ。北四楼まで登る。現在のこの長城は明代末期のものだ。先程の定陵と併せて、中国王朝の力を実感する。15時、夏霞みに霞む長城を後にホテルへ向かう。17時過ぎ、3年前に泊った北緯飯店新館の天橋賓館へと入る。11階の部屋で眺めが良く、遠くに天壇が見える。それにしても緑が多い。

夜、山西料理の普陽飯荘にて中国登山協会による夕食会が開かれる。全員が登頂証明書を貰う。証明書では大姑娘の標高は5355mとなっている。隊員は旨い料理と酒に早く寝てしまったが、酒井隊長は遅くまで清算に追われていた。谷田川はひとり琉璃廠を往復する。

8/19 (晴) 北京—成田

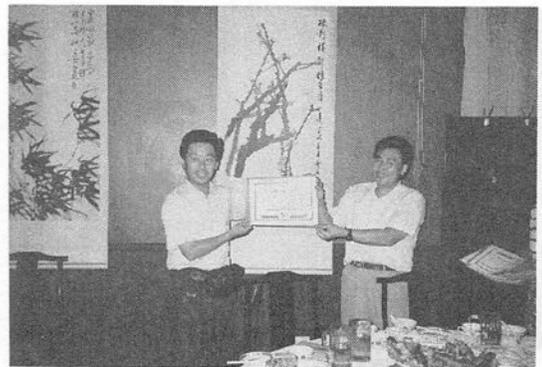
5時半起床、仕名野さんとふたり、天壇公園を往復する。ホテル周辺には路上の出店で寝起きをしている人々の姿が目立った。公園の入場料25角が外国人は10元というのでびっくりする。緑溢れる公園内ではあちこちで太極拳をやっており、その姿が朝の陽射しに美しかった。時間が早いため、祈年殿は塀越しに見るしかなかったが、梅原龍三郎の絵で見慣れたその姿に感動する。ホテルに戻る道沿いは人込みで、出店で朝食を取る熱気に溢れていた。

午前中中友誼商店へと行き、最後の土産物を購入するが、天安門広場の毛主席記念堂前は、毛主席の棺を公開しているとのことで、凄い人の列であった。毛沢東の存在を改めて考えさせられる。

15時15分、NH906便にて北京を後にする。国際線の空港使用料は60元であった。色々あったが、3週間の旅は終わろうとしている。

今遠征も限られた条件の中で、決まった期間の中で、多くのものと出会えることができた。成田が近付くにつれ、様々な情景が思い浮かび、また出掛けたいとの思いが強くなってくる。

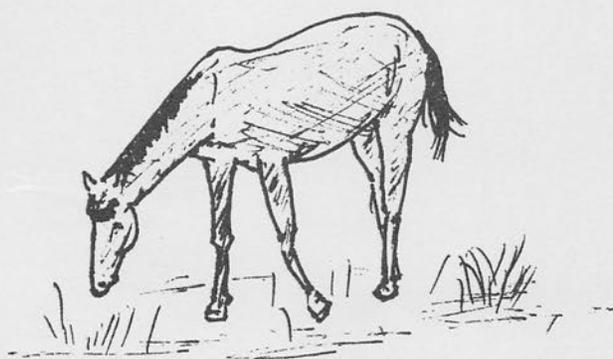
19時55分、成田テークオン、楽しい旅であった。



登頂証明書を頂く

第2部

隊員の横顔 随想



隊員の横顔

- 1) 生年月日 2) 住所 3) 勤務先
4) 所属山岳会 5) 海外遠征歴

隊長 酒井国光 (Kunimitsu Sakai)

- 1) 1939年4月 生(53歳)
2) 〒300 茨城県筑波郡伊奈町

- 3) 聖徳大学附属小学校
4) 昭和山岳会
5) 1976年 アメリカ・マッキンリー(6,194m) 隊長
1979年 } ヨーロッパ・アルプス, モンブラン
1980年 } 他 隊長
1983年 パキスタン, ビルチャール・ドバニ (6,134m) 登攀隊長



- 1984年 中国, アムネマチンⅡ(6,268m) 副隊長, 登頂
1988年 パキスタン, ブロード・ピーク (8,047m) 隊長, 登頂
1989年 中国, シャラリ(6,032m) 隊長代行
1991年 中国, 雪宝頂(5,588m) 隊長, 登頂

不思議な人である。山に入るとあまり食べない。なのに、飄々としてマイペースで歩き、強い。その秘密は何処にあるかという酒である。今回もその酒に付合わされて、体調を崩した隊員が若干1名いた。街でもよく飲む。酔うのは早いが、「そうだ!!」という独特の相槌を打ちながら最後までその場に付合う。その表情はいつもは穏やかだが、時折とても厳しい表情を見せる。そこに、長年の山に対する経験と知識とが感じられる。昭和山岳会、日本山岳協会と、現在の山岳会をリードしてきたひとりである。殊に黒部に傾注し、シャラリ遠征の後いただいた『黒部雪山』は私の大切な宝物である。今遠征では、土砂崩れのため街での滞在日数が多くなり、最後まで赤字に頭を痛めていた。最終日の北京、中国登山協会との長い協議を終え、ウイスキーを取りにきた際、付合わないですいません。今年はムスターグ・アタへ、そして夢は4年後のエベレストへと続く。素敵な奥様とスポーツマンの大学生であるご子息がいる。隊員全員から強い信頼感を寄せられていた素敵な隊長である。ご苦労さまでした。(谷田川)



B・Cにて全員集合

隊員 岩田達雄 (Tatsuo Iwata)

- 1) 1928年5月 生(64歳)
- 2) 〒125 東京都葛飾区
- 3)
- 4) 東京雪稜会
- 5) 1989年 パパア・ニューギニア・ウィルヘルム(4,508m) 登頂
1990年 天山山脈トレッキング
1990年 アルタイ山脈



隊の最年長者・岩田さんを最年少者・谷田川は『がんちゃん』と呼ぶ。親しみを込めて。そう、岩田さんは、『がんちゃん』と呼んでちっとも違和感のない先輩です。

がんちゃんは、年を感じさせない人です。何事にも興味・関心を寄せ、率先して行動に移します。50歳過ぎて水泳をマスターし、今はその指導員をしているなど、その最たる例です。

がんちゃんは、とても真面目な人です。雅安賓館でのこと、朝まだ明けやらずの時、天気を見ようとベランダに出たら、隣のベランダでヒタヒタと音がしています。何かと覗いてみたら、がんちゃんがトレーニングをしているのです。一瞬「がーん」ときました。日頃のこの精進が、頂上につながったのです。まさに、岩田さんは『がーんちゃん』です。

がんちゃんは、付き合いのいい人です。がんちゃんと一緒にいて楽しい人です。がんちゃんは……。とにかく、がんちゃんはすてきな先輩です。ご一緒できたことを、幸せに思っています。(酒井)

隊員 仕名野完治 (Kanji Shinano)

- 1) 1936年2月 生(56歳)
- 2) 〒607 京都市山科区
- 3) JR東海株大阪運転所
- 4) 京都山岳会
- 5) 1970年 台湾・玉山(3,952m) 登頂
1981年 マレーシア・キナバル山(4,101m) 登頂
1990年 スイス・メンヒ(4,099m) 登頂



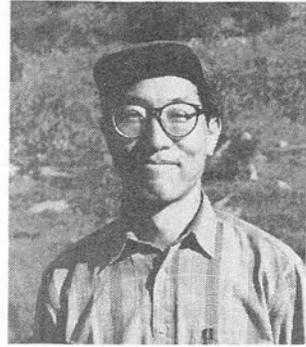
一番大きなザックを背負って、色々な物を持って来た人だ。大姑娘山頂で銘水の缶が出てきたときにはびっくりさせられた。そして買物も沢山したようだ。

山は大姑娘の下見をするなど、非常に熱心な人だと思う。そればかりではない、天野さんと一緒に2度も大姑娘に登るなど、友情は溢れるばかりだ。知識も豊富な人で、花などについてその才を見せ、また、探求心を旺盛で、中国スタッフや現地の人々と一番良くやり取りをしていたようだ。日本では、ハングライダーをやるなど、多趣味な東海道新幹線の運転手さんだ。

山を下りてからは何時も夜は飲んで元気に歌ったりして、明るく朗らかな人で、我々6人を楽しませてくれた。今回の遠征では大変有り難い存在であった。(岩田)

隊員 天野一郎 (Ichiro Amano)

- 1) 1947年4月 生(45歳)
- 2) 〒190 東京都西多摩郡五日市町
- 3) 日の出町立平井小学校
- 4) 奥多摩山岳会
- 5) 1974年 ヨーロッパ・アルプス・モンブラン
(4,807m) 隊長、登頂
1983年 パキスタン・バツラ氷河 隊長



大きな黒ブチのメガネに大きな額、ヒョウキンな感じで物に動じない。現地人の誰にでも臆することなく気安く話しかける。別に言葉が通じなくとも、熱心な身振り手振りで一生懸命自分の意思を相手に通じさせようとする。行動も積極的で、物ごとをテキパキと処理していく頼もしい人物である。残念ながら、ベースキャンプ到着後、体調を崩し、下のチベット村リーロンに下山、2日間休養を取って戻ることがあり、我々を心配させた。しかし、その後は順調で、雨の中、私と共に大姑娘に登頂した。忘れられぬ思い出となると思う。

中国人と大阪人をミックスしたようなところがある。人民軍の帽子を常時かぶっていたため、中国人と見間違われるから愉快。現実的で、探求熱心である。
(仕名野)

隊員 小太刀健 (Ken Kodachi)

- 1) 1948年8月 生(43歳)
- 2) 〒270 千葉県我孫子市
- 3) 東葛飾農業改良普及所
- 4) 山岳同人一同心
- 5) 1987年 アメリカ・マッキンリー(6,194m)
1989年 インド・トレイ・サガル(6,904m)



ともかく名前が勇ましいです。姓も名も剣に関係あり、顔付きもどこか佐々木小次郎を連想させる男です。都会や麓では、おとなしく、人のなす通り、反論一つせず黙々と作業をこなしてくれます。下界で体の不調を訴えたこともありましたが。そんな時、他の隊員がこの先大丈夫かと心配していましたが、私は、こういう人こそ、いざという時、先に登っていくもんだよ、と言っていました。その通り、ひとたびBCから上へと登山活動が開始されると無口な中に秘められた闘志が湧き出てきたのです。平然と着実にガイガイと登り、本当に頼りになりそうな男です。この人のために、もう2日好天があったらと悔やまれます。不言実行の人、独身です。
(天野)

隊員 大久保博 (Hiroshi Okubo)

- 1) 1949年4月 生(43歳)
- 2) 〒112 東京都文京区
- 3) 足立区立北鹿浜小学校
- 4) 深田クラブ
- 5) 1974年 ヨーロッパ・アルプス
1983年 インド・ヌン(7,135m)
1989年 中国・シャラリ(6,032m)



体は小さいが、抜群のスタミナと行動力で今回の遠征をリードした。ルート工作では常にトップにたち、また食料担当として、いつも早く起きて準備をしてくれるのには、頭が下がった。そのエネルギーの秘密は何処にあるかということ、毎日、23区を横断して、自転車で通勤していることにあるようだ。

また、中国側との宴会の席では、隊長補佐役として持前のユーモアと明るさで席を盛り上げた。うまくはないが、歌好きでもある。帰りの成都では頑張っって白酒を飲み過ぎて、体調を崩していた。

この実力とバイタリティとをもってすれば、今後さらに大きな目標に向かって、自ずと道は開けてくるものと確信します。名前を間違える愛妻?と2人のお子さんの4人家族。(小太刀)

隊員 谷田川武 (Takeishi yatagawa)

- 1) 1953年9月 生(38歳)
- 2) 〒178 東京都練馬区
- 3) 東京都立久留米西高校
- 4) 白嶺山の会・白い峰
- 5) 1981年 メキシコ・ポボカテペトル(5,452m)
1988年 パキスタン・ファラク・サル(5,918m) 隊長
1989年 中国・シャラリ(6,032m)



TAKEISHI氏にささげる駄句一句 —— 春の風想いを告げるだけでなく ——
彼の句集『四季』(1991年6月発行)から勝手に選ばせてもらおうと、

冴返る「先生なんて大嫌い」	「ごめんなさい」去りし子らに風光る
燕の子蜀の都に雨の降る	ヒマラヤの空を映して青きケシ
しゃくとりを眺めてあきぬ子供もあり	無残やな地上げ攻勢草茂る

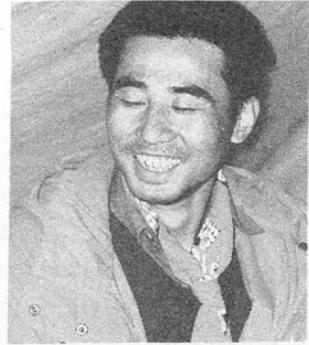
勤務先の高校の生徒と共にある若い先生の姿二句、1989年に同行した今回と同じ四川省の未踏峰「先熱日」の時に作ったのだろう二句、他二句、優しい目、そして、怒れる目を持つ彼は純な好青年なのである。文学だけではない、酒を飲み高吟だれかれはばからないし、そのレパートリーは洋の東西、古今を問わない。顔良く、背高く、機知に富み、金もそこそこにありそうだ………なのに未だ独りなのである。真面目すぎるのか………今流行りのほめ殺し?ではない。それとも………?

記録係としてだけでなく写真を多量撮っていた。若い女性には目を輝かせ、子供にも優しくレンズを向けていた。秘書として活躍。岩田先生に声をかけ、愉快的メンバーを増やした功績大である。(大久保)

連絡官 高 敏

四川省登山協会連絡官

86年雪宝頂、88年ゲニ、91年ミニヤ・コンカと日本ヒマラヤ協会との付き合いは長く、コンカの隊長であった山森氏や副隊長であった松館氏の名前がよく話に出た。明るく、特に酒を飲むと陽気になる。はにかんだように歌を歌う姿が印象的であった。成都に新婚の奥さんを残しての仕事で、最後の方はやや時間を持て余しているようであった。帰途、その奥方が日隆まで迎えに来て、やや浮かれているようであった。若いが、山に対する造詣は深い好青年である。



管理員 陳 軍

四川省登山協会連絡官

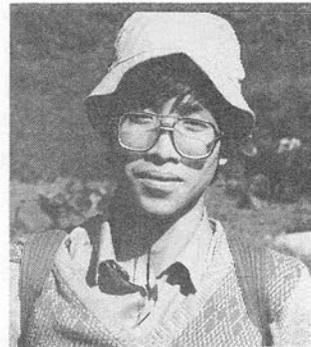
見ためはおおらかであるが、繊細な所もあり、鋭い感性の持ち主である。高連絡官と同様、成都に年若い美人の愛妻を残しての随行、やはり時間を持て余しているようであった。ベースキャンプで奥さんの写真を見せ、皆にからかわれていた。「私は陳です」とか、「私は陳パンダ」などと言って、我々を楽しませてくれたばかりでなく、その良い喉で、歌合戦の主演をつとめてくれた。好青年である。



通 訳 呉 少泰

四川大学外文系日語科四年級

初めての通訳で、しかも登山隊の仕事ということで、相当に気を使っていたようである。登山も始めてということで、やや体調を崩していたが、日中の間にとって一生懸命に努めていた姿は好感が持てる。また、山を好きになってくれたようである。今後の活躍が期待できる。彼また好青年である。言葉はもとより、自国の歴史、名跡などに鍛練してほしい。



* 以上3人の寸評は谷田川が担当した。

閑中忙有

酒井国光

無性に本が読みたくて、仕事なんかでんで手につかないことがある。

(いっそ病気にでもなって、1か月も入院出来ないか。思いっきり読書ができるかも知れない……………)
と、考えてしまう。無い物ねだりというか、病気の人には申し訳けないことである。

今まで、10回程海外登山してきたが、いつも忙しい登山ばかりであった。それらは、隊長とか副隊長などという役のつくものがほとんどであったので、もっとコントロールタワー的な立場に立つ必要があったのだろうか……。いつも、隊員と同じスケジュールに従って行動してきた。と言っても、同じだけ荷を担いだとか、ルート工作をしたという意味ではない。隊長としての仕事に頂上に登る隊員としての行動が常にプラスされていたという意味でだ。

(たまにはテントに居て、隊員の行動をコントロールするだけの任務もいいな……………)
と、考えもするのだ。

*

今回の隊で、1日、憧れが実現した。8月13日のことだ。前日、二姑娘山へアタックをかけた。東尾根の5,000m付近で雨が降ってきた。さらに登ったものの、雨脚も強くなり、岩も滑りだした。おまけに曇まじり。

「残念ながら、本日中止」

岩峰の下に集まり、今後の予定を協議したが、結果は明白だ。

「高度順応はばっちしだ。5,276mの山の5,100mまでルート工作してある。登山期間も、後1日ある。明日に賭けよう」。「エイ、エイ、オー」だ。

しかし、その最後の1日は雨だ。当然、登山は中止。その上、デポ品・フィックスドロープの回収という仕事が残された。

この日の行動を決めるに当たって、当然自分も行くものと思っていた私に、大久保の意外な発言。

「ぼくたち3人で荷下げしてくるから、酒井さん行かなくていいよ」

本日の行動 ・二姑娘デポ回収 … 大久保・小太刀・谷田川
 ・大姑娘アタック … 天野・仕名野
 ・B C ス テ イ … 酒井 岩田

8 : 00 天野、仕名野、出発。

「天気が悪いので無理するなよ」

「はい、無理するタイプではないです」

と、言って出発した。正直な話、この時点では頂上まで届くとは考えていなかった。

8 : 35 大久保、小太刀、谷田川、出発。

「無理するなよ」

「デポまでは問題ないが、その先のフィックスの辺りは注意しろ」

「状態が悪かったらザイルの回収はしなくてもいいぞ」

と、出発に当たって注意する。

*

外は雨だ。岩田は別のテントで休んでいる。メステントで(ひさしぶりにのんびりできるなど)、横になる。しかし、どうしてどうしてのんびりなどとは……………。

以下は、無線交信の記録である。

9 : 00 (交信相手) 【天野・仕名野】

「コル状の所に居る。仕名野の調子が良ければ大姑娘まで行く」

「2隊が行動しているため、BCは常にオープンにしておく。定期的には、1時間ごとに交信してほしい」

10 : 00 【天野】

「横に長い岩場を越して、10分ぐらい歩いた所に居る。仕名野も元気で、一緒に上に行ってくれるもようで心強い。天気は相変わらずだが、雲は薄くなりつつあるので、がんばりたい」

専務理事の山森氏に出す手紙の草稿を作る。

11 : 00 【天野】

「賽の河原のような所に居る。仕名野の話では、あと1時間でコルとのこと。天気もまあまあ(同じ調子)なので登り続ける」

「わかった。がんばってほしい」

11 : 20 呉通訳が来て、今日の宴会の料理は中国側で作るので、日本側のご飯を炊いてほしいと言う。その後、ヤク工が来て、テープを勝手に聞いていく。こちらも考えごとがあるので、天野みたいに対応してあげられないのが残念である。

11 : 40 【大久保】

「視界悪く、相模隊が登った岩場の方へ行ってしまった。やっとデポ地に着いたが、谷田川、小太刀はまだ着いていない」

「慎重に行動するように」

12 : 00 【天野】

「コルに居る。天気は雨。風は無いので頂上へ行く」

「OK。2人離れないで行動してほしい」

12 : 06 【大久保】

「谷田川、小太刀、デポ地に着いた。視界は5m位。天気は雨。少し休んでフィックスの回収に向かう」

「天気を考え、回収するか否かを考えてほしい。あくまで無理をしないように。また、3人離れずに行動してほしい。天野、仕名野はコルから頂上に向かって行動している」

登山隊下山の一報を草稿する。

13 : 15 【大久保】

「ザイルデポ地に着いた。フィックスしたザイルは回収した。下のデポ地に降りたらまた交信する」

「わかった。岩は滑るので気を気けて降りるように」

13 : 16 【天野】

「ただ今頂上。視界は悪い。仕名野さんのお陰で登れた。5分休んだら降りる」

「おめでとう」「仕名野さんご苦労様。お陰で全員登頂が出来ました」

「途中引き返そうと思ったが、一人で引き返すのが寂しいので付いて来た」

「岩が濡れているのでゆっくり下る。多少時間がかかる」

「わかった。あくまで2人離れずに下ってきてほしい」

岩田さんが12時20分頃より1時間位、メス TENT に来て、紅茶、わかめ汁、お湯などを飲んでから、自分のTENTに戻る。

13時52分、ヤク工がチャンライを持ってきてくれる。

13：55 【天野】

「ただ今コルに居る。気を付けて降りる」

14：10 【大久保】

「下のデボ地に着いた。メインザイル4本を回収した。天気は雨、視界は10m」
「離れず、気を付けて降りてくるように。天野たちも頂上を踏み、下山中である」
「次の交信は3時にする」

「OK。BCはいつもオープンである」

14：47 【大久保】

「雨、視界50m位。どこも同じように見える。道なき道をひたすら下っている。まだ、草原にならないが、草原になったら連絡する」

「OK。こちらも雨だが、視界はある」

15：00 【天野】

「横に長い岩の上に居る」

「大久保たちも上で苦労している」

「こちらは放草地で申し訳けない」

「気を付けて降りてくるように」

15：20 【大久保】

「草原に着いた。あと10分位か」

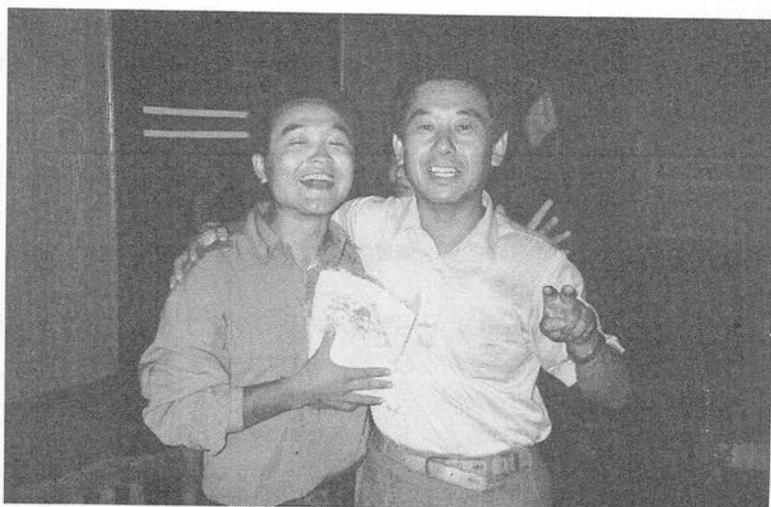
15：40 大久保、小太刀、谷田川、BC着。ご苦労様。2パーティのために甘い紅茶、塩味を付けたお粥を圧力釜で炊いておいた。このお粥は、来年のムスターグ・アタ隊の目玉にしようと考えているものだ。

16：53 天野、仕名野、BC着。

*

実に忙しい一日であった。件の『入院』も、こんなものなのだろう。

やはり健康が第一で、これからの海外登山でも、「隊長とは言え常に隊員と登り続けたい」と、考えているこの頃である。



答礼会にてメートル上がる

山旅雑感

岩田達雄

四川省は山の国である。素晴らしい山々を眺められた楽しい山旅だった。

4,000米の草原にテントを張る。まわりは限りない高山植物が広がり、その中にヤクが通ってできた道がどこまでも続く。山腹をトラバースする道を薬草をとりて原住民のグループが歩いていく。遠くまで続く山々の美しい眺め、足下にはエーデルワイスの大群落、まさに地上の楽園である。夕方になると、テントからやや離れた小高い丘に野生の馬が一頭姿を現し、こちらを静かに見詰めている。やや痩せた背の高いその馬がシルエットになると、まもなく消え、日も沈んでいく。

B・Cの夜、と言っても明るうちから、原住民が遊びにくる。我々の生活が珍しいのか、やるのが面白いのか、とにかく来て眺めて楽しんでいる。顔はいつも愛想笑いをしている。言葉は通じないが、言葉の必要は殆ど感じない。おそくまでいて一緒に歌を聞いたり歌ったり、また時には搾りたてのヤクの乳を持ってきたり、造り酒（発酵乳）を持ってきたりしてくれる。国際交流が深まってきた所でお別れとなるのが淋しかった。

山岳道路を自動車で通りながら、広い土地の整備が機械化されていないので大変だなあと感じた。もう一つ以外だったのは、急な崖のある所や、かなり高い所の斜面にとうもろこしが植えてあったことで、これでは山崩れにならないのか心配だった。植林よりも食糧の方が大切と言われればそれまでだが、これは改めないと交通手段が使えなくなると思った。

高山植物が至る所に咲いている。ヨツバシオガマ、フウロソウ、ウツボクサ、ブルーポピー、……………、とりわけ驚いたのはブルーポピーだった。ヒマラヤの幻の花—青いケンシダ。怪しげな雰囲気漂わせている。量でびっくりしたのはエーデルワイス、B・Cからの帰り道、足の踏み場もないほど咲き乱れており、大きいものから小さく可愛いのと、まるで天国を思わせる。

山への行き帰りに成都に泊まり、市内の見学もした。この都市は朝から活気があり、自転車がかなり利用されている。雨降りの時などは婦人の自転車に乗った姿がカラフルで見ていると楽しい。信号が少ないので、自動車が通る時はハラハラするが、お互いに避けて、すりすりとの隙間をぬって、ぶつかりそうでぶつからないで走り抜けていく。日本では考えられない軽業的芸当といえる。

中国のテレビ放送もなかなかのものであった。丁度オリンピックの放送をしていたが、コマーシャルを集中してやるので、途中で中断がないのが良かった。コマーシャルはなかなか上手で、中国らしさを（さすが中国と）感じさせられた。

ビールは五星ビールが多かった。一般に冷やさないでそのまま飲んでいる。初めは旨くなかったが、段々飲めるようになってきた。今回はよく飲ませていただいた。昼と夜は毎食ビールを飲んだ。中国人はよくウーロン茶を飲む。丸いビンの中に入れておき、キャップを回して蓋をずらして葉が出ないようにして飲む。雨季といっても、雨が降らない限り乾燥しているから、何らかの水分補給は大切なのだと実感した。



邛崃にて

随想あれこれ

仕名野 完 治

我々、登山を趣味にしている者にとって高い山は魅力がある。「山高くして尊からず」という文句があるが、やはり高い山に登りたい衝動に駆られる。しかし、わが国の最高峰は富士山の3,776米で、それより高いところはない。したがって勢い海外に登る対象を求めざるを得ない。

今までに少しでも高いところへと、台湾の玉山(3,997米)、ボルネオのキナバル山(4,101米)、アルプスのメンヒ(4,100米)に登ってきたが、これ以上の高さを経験したことがない。それで満足しておけばよいのに、まだもっと高い山へ登りたいという願望はいくつになっても沸いてくるものである。しかし、体力と気力と高山に対する順応力が必要不可欠である。今回、サラリーマンが短期間でヒマラヤの一角を登れるところとして選ばれたのが四川省の小雪宝頂(5,540米)であった。自分のような高齢者(56才)でも果たして登れるのだろうかという一抹の不安があった。

それで、東京都岳連の高所順応研究会に参加し、多くの知識を得、出発直前には富士山へも行ったが、夜高山病症状が現われ、これでは中国登山で頂上は踏めないかもしれないと思いながら、日本を後にした。

成都に着いてからが大変だった。予定していた小雪宝頂へのルートが全て寸断され、近付くことができない。次の候補地のミニヤコンガ山域へも入れないと分かって、もうこれで登山を断念して、観光でもして日本に帰らねばならないのかと一時はあきらめた。しかし、多くの犠牲を払い折角ここまで来て、すぐすぐと帰るわけには行かないと思っていたところ、登山協会の情報により四姑娘連峰に転進することが決まった。我々は、四川省の成都まで観光に来たわけではないので、是非どこか5,000米級の山を一つ登って帰りたいと思っていたので、これでやっと山登りができると喜んだものである。

行先の山が二転、三転してしまうなんて日本では考えられない。中国の道路事情が悪く、山岳地帯の幹線道路は防災工事が殆ど施されていず、豪雨で崩壊、崩壊すればその都度直せば良いという発想のようである。そうはいっても、この広大な中国の道路を日本のような狭い国と同じにしろと望むほうが無理なのかもしれないと思った。川は中国において昔から龍に例えられ、暴れると手に負えない代物とされてきた。流域面積が広いので、一度大雨が降ると河川はたちまち氾濫し、多くの被害をもたらす。我々はこの大雨の後に成都を訪れたわけである。

小生が所属する山岳会の月例山行の際、同行の女性から成都に行くなら司馬遼太郎の『食の道』を読んで行くと参考になると教わったので、早速本屋に探しに行って尋ねても不明であった。小生はてっきり「ショック」とは、食の国のこと、食べ物のことばかりだと思っていたら、ある本屋のオヤジさんが中国・蜀と雲南の道を書いたもので、『街道をゆく』20(朝日文庫)と教えてくれた。教えてくれた彼女もうろ覚えで『ショックの道』という本だったと思うがという程度だったので、探すのに暇が掛かった。笑い話である。

それによると、成都(四川)は山多く、水量も多い、天水をこの山岳地域にたくわえ、あまたの急流をなして流し、やがて諸川が長江(揚子江)の水となって中国大陸をうるおしている。いわば中国大陸の巨大な「水がめ」のような地であると著している。まさにその通りだと感じる程、どの河川もとうとうと水が流れていた。それらを全部集めたらどんな大河になるのだろうか、揚子江のとてつもなさを感じた。

また、明治9年の「竹添井井」の紀行によると、「蜀に入ってより雨多く、十日のうち九日は雨である」ということも記載されている。

また、四川大学出身の横川氏の弁によると、「四川の犬は、太陽を見て吠えるという」話をも伝えている。四川の犬たちは地球の全てが曇天であると信じて生涯を終える、まれに太陽が雲間からのぞくと怪し

んで吠えるということらしいが、今回の我々の行程中はそんなことは経験しなかった。3週間の日程の中で雨に降られたことはあっても、それは長続きする程のことはなかった。比較的天候に恵まれた山行であった。季節によっての違いが在ろうが、明治の時代と現代の成都の天候とは、地球の環境の変化で変わってきていると思うが、十日のうち九日も雨が降る地とは少しオーバーな表現だと思ったが、その時たまたまそうであったのかも知れないとも思った。

今回、気象担当であり、中国上空の気象図が手に入ればと思っていたが、その願いはかなわなかった。



「北国の春」熱唱

初めての中国、初めての登山隊

天野一郎

成都の街路商人

錦江賓館の前の大通りには、観光客相手の掛け軸屋がずらりと並んでいる。二晩も続けて同じ店をひやかすと、顔なじみになり、商人の考え方もわかってきておもしろかった。他に客もいなかったし、一緒に座り込んであだこうだとお茶をご馳走になりながら話したから、値段や彼らの生活も理解できてきた。彼らとのやりとりを通して、最多価格帯である最初のフッカケ値段の1000円を分析してみた。私の値切り方が余りに極端で驚いたのか、彼らは途中から、「我々はこれで飯を食っているんだ！」という事を盛んに強調し始めた。掛け軸には、元絵であるオリジナル作品を描いた芸術家としての画家がいるらしい。その者の許可を得て、画工といえる職人が似たような絵を何枚も描くようだ。どうりで大通りには、似たような掛け軸が並んでいるわけだ。「ほら、あそこにいるおじさんが、その画工だよ」と教えてくれたりもした。画工から作品を買ってきて売っているのが、この通りの商人という訳らしい。単純に考えても、画家と画工と商人の三者が生活していくための費用がこの掛け軸の値段であるわけだ。このような商業活動は、今の中国では、許されているようだ。家族が4人だの、生活費がかかるだのと言っていたが、単純計算として、三者とも月収を標準所得の3,000元、3人で1カ月9,000元。1日の売上は、300元を必要とする。だいたい50元ぐらいまでまけていた様子だったから、売れない日もあるなんて言っていたが、1日6枚程度がノルマではあるまいか。50元の3分の1は、約17元であるが、場合によっては画家が15元、画工が15元、商人が20元となっているかも知れない。1000元の言い値が50元までは、10単位で落ちて行くが、その後は5元単位、40元を割ると1元単位で価格のやりとりが続いた。商人にとっての元値は、30元と見て良い。もしもどこかのお人好しが、80元で買って値切ったと喜んでいたら、彼らは1日2枚売るだけで、万歳、ノルマ達成という事になる。ほとんど私の憶測であるが、二晩にわたる互いのブロークイングリッシュによる会話は、けっこう愉快であった。(私はいくらで買ったかって？彼は青ざめた顔で品物を渡してくれましたよ。)

忍耐と理解（登山協会にお世話になりながら）

日本とは違う。中国に入ったなら、中国のペースに従うようにしなければならない。そんな事は、百も承知であったが、努めて理解し、じっと我慢しなければならない事態は、何度もあり、良い国際理解の機会でありました。

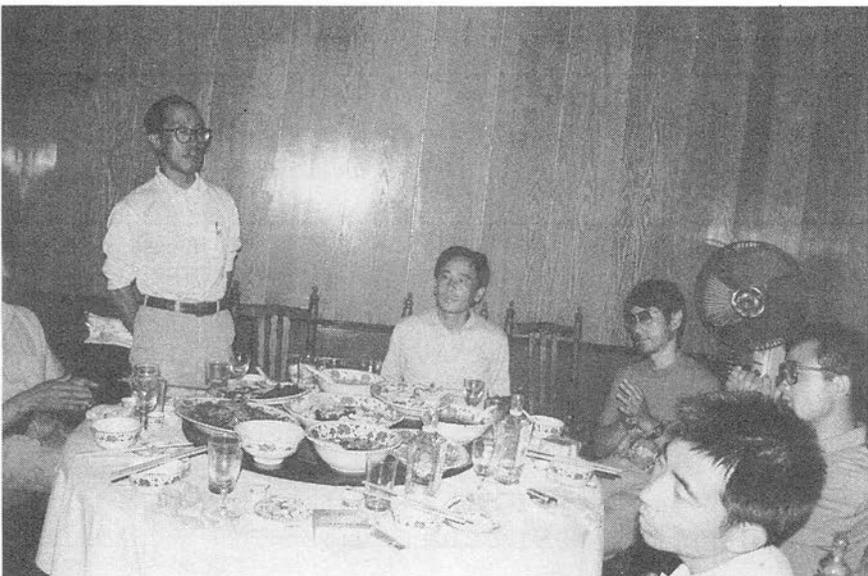
雪宝頂へ通じる松藩へ行く道が不通である事は、我々が日本を出発する前に起こっていたらしいが、そのような事を情報として、収集する習慣がないらしい。たとえわかっていたとしても、日本にテックスで送るなんてことは、考えもしないようだ。成都に着くなり、「お話したい事があります。」と言いつつ、もったいぶってなかなか話さなかった事が、この雪宝頂不可能通告であった。相手は、単なる公務員だ。指示に従って動いているだけだろうから、文句を言ってもしかたないと思うことにした。

二郎山バスを越えてのミニヤコンカ山城へのキャラバンも似たようなものだった。毎日往復しているバスの営業所にも問い合せれば、情報は得られそうなものだが、それは日本人のせっかちな考えらしく、とにかく2日をかけて現地へ走ってみるのだ。「土砂崩れで、とても越えられません」との判断は、その時、そこで自分達だけの観測によって、練り出されるのだから、呆れてしまう。人や景色を眺めるのにウキウキしていた中国初めての私などはよいとして、早く登山をしたいと願っていた他の隊員達は、さぞかし日数の無駄に悔やんだことだろう。

登山協会とは言え、友好だけではなく、ビジネスとしてしっかり金をとるのであるから、もう少し努力してほしいものだ。

もっとも今夏、四姑娘南壁に登った広島山の会と同行した四姑娘トレッキング隊は、我々の泊まったホテルより上級ランクの錦江賓館に泊まったし、我々のいただいたTシャツ以上の結構なプレゼントをもらえたようだ。ビジネスのうまい部分を享受できたラッキーな隊もあったのだ。

私の知人が今夏、添乗員として中国に行った。通訳の若者がしきりに日本に来て日本語を勉強したいと言ったそうだ。それはよくある話だが、それに対して知人は、日本語だけではダメだ、日本語以外に何か勉強することはないのかね、と聞いたそうだ。通訳の若者は、考え付かないと答え、何を勉強したらよいでしょうと尋ねたそうだ。そこで知人は、「サービスということについて勉強なさい。」と言ったそうだ。



得意の弁とのどを聞かせる

しばしのメルヘン

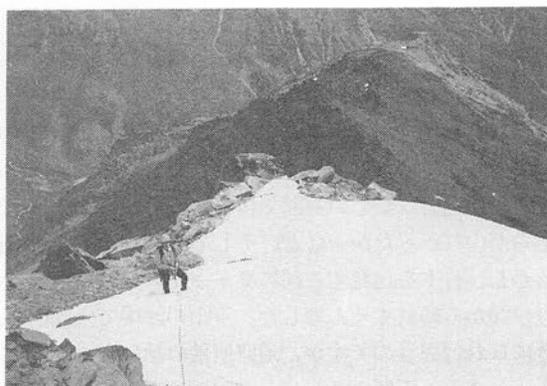
小太刀 健

豪雨による道路の不通ということで、2度にわたる目的地の変更となり、一体こんどの登山はどうなるのかなあという思いだった。3度目の目的地となった四姑娘山周辺へも、はたして入れるのかどうか、半信半疑であった。しかし、3度目の正直で、何とか基地の日隆まで入ることができた。ここからキャラバンが始まった。一登りした所の草原地帯から見る四姑娘山の眺めは素晴らしい。巨大な鳥がつばさを広げて今にも天に向かって飛び立とうとしているように見える。世界広しといえども、こんなに素晴らしい山容の山はめったにないだろう。この主峰からガクッと高度を落として他の3姉妹峰が連なっている。

この周辺のお花畑も素晴らしかった。一面のエーデルワイス、その他の花花が咲き乱れ、地上の楽園だった。BC予定地の花海子も良い所だった。現地の人小屋があって、後続を待っている間、この小屋で休ませてもらった。夏の間、放牧のためここに寝泊まりしているらしい。人なつこくて良い人達だ。ここから見る四姑娘山もまた素晴らしかった。

しかし、ここのBCは一晚だけで、上部に上げることになった。この第2のBCも素晴らしいお花畑の中で、一生こんな所にいられたらいいなあと思う。ここから登山活動が始まった。大姑娘はガラガラの岩山であまりパツとしない。しかし、何とか5,000mの頂上に立つことができた。海外の山で頂上に立ったのは初めてだ。頂上から次の目標である二姑娘山のルートを目で追う。岩肌が露出しているが、頂上直下から雪面が続いている。この雪が岩の裏側で下部まで続いているのではなどと希望的観測をして下る。しかし、二姑娘は以外に手強く、天気も味方せず、登頂断念となった。

BCでの一週間はあっという間に過ぎ去った。テントから見える丘の上にじっとたたずんでいた野生の馬の幻想的な姿と、最後の夜の宴会でyak方の歌った哀調のあるメロディーが印象的だった。登山そのものは満足いくものとはいえなかったが、日常生活では経験できないメルヘンの世界に、しばしの間、時を過ごすことができたのだった。

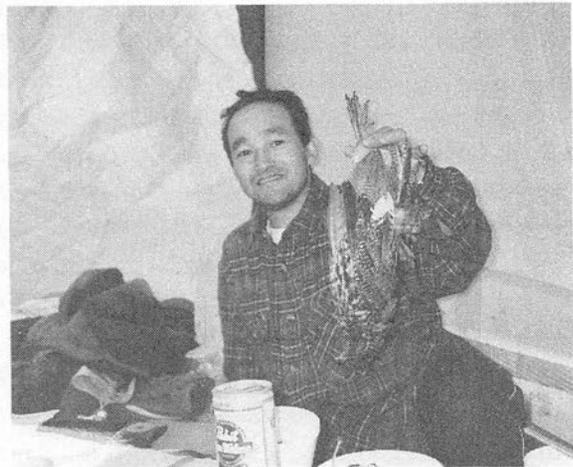


二姑娘東稜を登る

雨ばかりじゃないと思いつつ

大久保 博

今回でヒマラヤ協会隊に参加するのは3度目です。小雪宝頂は、前回同様、四川省の山であり、何か親しみを持つと共に、山の他にも中国の料理や風物に触れる楽しみがありました。さらに、協会隊の楽しみは、全国にいる見知らぬ会員が集まって作る登山隊ですから、隊の仲間作りにあります。今回も、3週間という遠征期間だけでなく、随分楽しませてもらいました。メンバーでは、隊長の酒井さん、先熱日(シャラリ)でもお世話になりましたし、谷田川さんも先熱日以来の友人にさせてもらいました。また、高校山岳部の良き先輩の天野さんは、私の誘いに快く賛同してくれました。そして、万年青年の岩田さん、新幹線の運転手さんで博識な仕名野さん、寡黙ですが実力のある小太刀さんらの新しい友人ができました。まず、皆さんにお礼を述べたいと思います。有り難うございました。



B・Cにて

醫醫桑榆日
照我征衣裳

たそがれ時に山の端の夕日が旅の埃にまみれた私を照らす。

但逢新人民
未ト見故郷

見掛けるのは服装、言語、風習のまるで違う人ばかり。
私の故郷へはいつ帰れるのか、見込みもつかない。

自古有羈旅
我何苦哀傷

旅の苦しみは昔からあることだ。
何も自分だけがひどく悲しむべきではない。 (杜甫 「成都府」より抜粋)

登山の後の成都観光で杜甫草堂に行きました。「我何苦哀傷」な今回の山旅を振り返りたいと思います。成田から成都に着いた翌日(7月31日)、小雪宝頂への道路が土砂崩れで行けないと連絡官の高さんから聞いた時のショックは忘れられません。日本と中国との情報システムの違い、考え方の違いを改めて認識させられました。中国側も我々には特別に配慮してくれました。例えば、着いたその日に話題にして心配させてはまずいと、到着の歓迎会は楽しい雰囲気という心遣い、小雪宝頂以外に行けるルートの積極的な情報提供(量そのものが少なかったが)など、そして四姑娘でも登れる山は幾つ登っても良いと言ってくれたりしました。しかし、日本を出発する前にファックスなり電話なりを入れてくれれば良かったのに……と、そればかりが頭から離れませんでした。下山の途中で土砂崩れがあり、帰れなくなったなどというよりはマシかと今になれば思うのですが、道路崩壊の話はショックでした。

都市滞在が予定より多かったのと、丁度オリンピックがあったので、宿ではテレビばかり見ていました。飛び込み、卓球、競歩、体操、中国選手の活躍の場面ばかりです。日本選手はどうしたのか分かりません。

朝、通訳の呉さんらにそのことを話すと、ニコニコしています。また、岩崎恭子さんや柔道の時は中国側も率直に喜んでくれました。8月1日は軍関係のニュースばかりでした。他に「史努比」のマンガや香港や台湾のドラマもやっていました。CMは、薬(子供の食欲増進剤?)、家電品、車が主で、5分、10分とずーっと続けて流しています。それにしても、テレビの威力ってすごいなあと思いました。

四姑娘に入る前、8月4日、臥龍(龍)に泊りましたが、臥龍とは寝ている龍という意味だそうで、「三国史」の中にこんなことが書いてありました。—襄陽の近郊隆中に「臥龍」と呼ばれる傑物が隠棲している、つまり諸葛亮(孔明)の噂を聞いて劉備が「三顧の礼」を尽くした。—と。「臥龍」はパンダの思い出だけでない、私の一つのメモリアムタームになりました。

8月5日という日も忘れられません。日隆の招待所に泊り、ベットに寝ていたのですが、背中が痒くてたまりませんでしたので、ノミにでも食われたのかと思いました。実は、皮膚のアレルギーらしいと分かりました。その日以降、体が暖まると、手足や背中に痒みを感じるようになったからです。日隆の宿泊施設はノミがいても不思議ではないくらいで(我々にとってベットがあれば天国ですが)、中国の運転手が泊りたがらないのも無理はありませんでした。

89年の時と変わったなあと思われることに、成都で、火鍋料理に健康火鍋というのができたことです。健康火鍋の健康ってなんだとは思いましたが、確かに火の吹くような辛い火鍋料理より健康的だし、普通の火鍋を食べる時に男性は上半身はだかになって食べている姿を見ると、文化的?に見てもひとつの進歩かななんてひとり合点しました。

日隆にて、日本人が松茸が好きなのが分っていて、値段をかなりふっかけてきました。「500gで500元」、物価からいったら、日本の10倍以上のことです。日本人をなめているのかと一瞬思ったくらいです。日本にいたら松茸の丸焼きなんてものはできそうもありませんから、ちょっと位の高い値段なら買ってもいいなあと思っていました。あまりのことに買わずに食べませんでした。臥龍のパンダ園では600円でパンダを抱かせましょと所長がいます。600元=15,000円でパンダを抱いて写真を撮りまくった観光客がいたのでしょうか。我々は7人ですから一人当たり2,000円です。日本だったらパンダを抱くなんて不可能でしょうから、それ位のお金を出すのもいるのでしょうか……。結局見学して、パンダの写真を撮って一人5元でした。この価格の落差は一体何なのでしょう。

中国に限ったことではありませんが、外国に行って思うことに、値段の駆け引きをする場面が多いということがあります。日本では定価があって、この何割引というのはあっても、交渉の結果何割引というのはあまりありません。交渉する程時間的ゆとりがないのか、売買の楽しさ?を知らないというのか、正直というのか、まさに国民性なのでしょう。成都では、土産を買うのに値段の交渉を皆さんずいぶん楽しんでたようですから、郷に入れば郷に……ということでしょう。

北京では新しい高層ビルの建築ラッシュでした。オリンピックのためでしょうか。韓国との国交調印前だというのに、コリアン航空の大看板が空港前にデカデカとあったり、北京飯店の前のマクドナルドには大勢の人だかりがあったり、世の中変わっていくのですね、と思うことしきり。

最後になりましたが山のことです。二姑娘山へのルート工作は、大姑娘の北面の岩稜が穂高を思わせる風景でしたので、気分的にも穂高で遊んでいるという楽しい一日でした。短い登山期間の中で登頂というひとつの希望に向かっての充実した日でした。本来の目的の小雪宝頂の姿さえも見ることができないというアクシデントの中で、全員が大姑娘という名のある山に登れたのは運がいいとみなければなりません。8月9日、大姑娘に行く道は、石畳の様で、まるでローマの道?を思わせる所がありました。私の耳に「レスピーギの曲、ローマの松・アッピア街道の松」が聞こえてくるようでした。そこにはブルーポピーも咲き乱れていました。

しかし、やっぱり二姑娘に登れなかったというのは残念でした。また、実力不足も痛感させられ、山行きの課題をいやが上にも感じた次第です。次回は、頂きで千切れる程旗を振りたいですね。

風景への思い

谷田川 武

人には忘れ得ぬ風景との出会いというものがある。それには色々な場合があるだろうが、多くは始めて目にした風景への感動というものが基軸になっているように思う。

今遠征は、期間も短かく、色々あった割には、ゆったりとできる時間が多かった。大姑娘を登頂した翌日の夕刻、二姑娘東稜末端の岩の上に座して、ぼんやりと景色を眺めやる。

「美しい」

それしか出てこない。移りゆく自然の表情の前に、いかに人間の表現力の貧しいことか、改めてそのことを感じさせられる。足元には西日を浴びた草原の緑がその鮮やかさを増し、馬が—頭静かに草を食んでいる。その下の谷には、尾瀬ヶ原を小さくしたような花海子の入り組んだ色彩が横たわっている。対岸にはそこから切り立つように原始の山が青空へと伸び、天に届く前に万年雪の白点を置いている。

静かすぎるせいだろうか、何故だか昔のことが浮かんでくる。

何時からか、僕には放浪癖がある。母にいわせると、出生からして、皆が食事に出ている夕暮れ時にびよっこりと出現して、ベットから落ちそうな所を看護婦さんが駆け付けてくるまで必死に支えていたというから、その時から放浪癖があるのかもしれない。それはともかくとして、思い起こしてみると、何故だか、幼稚園の頃から自然に対する憧れ、旅に対する憧れというものがあったように思う。良くひとりで近隣を冒険した。

風景として強く目に焼き付いている最初のもは、伊勢湾台風名古屋にいる叔母の家を母とふたり見舞いに訪れた時のものだ。夜行に揺られた寝ぼけ眼で見た窓の外には、海のような一面水浸しの光景が広がっていた。そして、一匹の犬が犬小屋の上でしきりに吠えている姿が飛び込んできた。涙の滲む目に、列車は名古屋駅に滑り込んだ。小学一年の時のことだが、漠然とながら、自然の恐ろしさというものを感ぜさせられた風景だった。

これに対して、ず〜と後のことになるが、自然の美しさというものを強く認識させられたのは、高一の春、ひとり東北地方を旅行した時のことである。雪でバスの入らぬ十和田湖畔をとぼとぼと歩いて、途中一泊して、次の日、峠を越えた。氷の張り詰めた湖岸、青白く眠ったような湖心、湖の周囲を白く包み込んだ樹氷、そして山々。それまでも幾つかの旅をし、山に登り、自然の美しさには多少なりとも接していたが、この時の風景ほど、印象に残り、その後、強く、そして深く自然の世界へと引き込んでいったものはなかった。

その後、機会があれば、旅をしているが、山に入っているかという時期が続いた。そして、数多くの風景と出会ってきた。

今遠征でも忘れ得ぬ多くの風景と出会った。

天全の古い町並み、濁流渦巻く岷江、行く手を遮るような臥龍の山々、緑美しき峠と谷
日隆の段段畑、百花咲き乱れる広き尾根、天空に飛び立つような四姑娘の雄姿……………

それらが走馬燈のように駆け巡ってくる。

暗くなったので、ふと上空を見上げると、夕暮れの雲がゆっくりと流れていく。東に目をやると、花海子へと流れ込む広々とした谷の緑を雲の影が凹凸に覆っていく。陰りゆく谷、何とも雄大で、美しい。

“あと何回、このような風景を見ることができようか。”

ふと、そんなことが浮かんでくる。そして、思う。

“この谷の向こうにはどのような風景が広がっているのだろうか？”

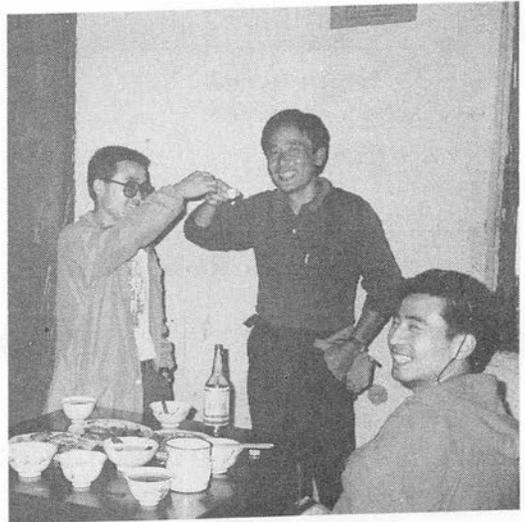
何時か、目的もなく、こうした谷をのんびりと上り詰め、峠を越えて谷を下ってみたいと思う。当分、放浪癖は無くないなと思う。

西に目を転じれば、すぐ下にベースが見える。少し前に天野さんが日隆より戻り、大久保さんが帰還祝いに八宝菜を作っている頃だ。ベースの後には滝がかけ、周囲はまだ西日を受けた緑が燃え立つようだ。明日からは二姑娘登攀で、この景色をゆっくりと眺めやる時間はないだろう。大久保さんには悪いけれども、もう少しのんびりとしていこう。

何時の間にか、馬が直ぐ足元まできている。このまま自然に溶け込んでいけるような気がしていた。

今遠征でも、いくつかの句を作った。

天府の夜大砲の如雷鳴す（成都にて）
災天に水音近き荷詰めす（成都にて）
夜涼みに橋ゆく群れの一となる（雅安にて）
対岸の街の灯暗き蜘蛛の糸（雅安にて）
水盤の片隅にあり家朽ちる（天全にて）
日盛りに売り子眠れし糸の中（天全にて）
天抜けしような白雨に古都に入る（成都にて）
蝉時雨顔拭きもせず通過待つ（都江堰付近にて）
ダート来て温きビールのひりひりす（臥龍にて）
夏の蝶宿してジープの山行けり（巴朗山峠にて）
薫風に山村の子らと過ごしたり（日隆にて）
夏草の花あふれ雲流る（海子溝にて）
草いきれヤク方の頭の青き帽（海子溝にて）
夏小屋の子供ら覗くキャンプかな（花海子にて）
草原の中落つ滝の光かな（ベースにて）
膝埋めトラバースする花畑（大姑娘偵察にて）
登頂の歌を背に見る星涼し（ベースにて）
岩鼻の哲人の如き馬に南風（ベースにて）
ガラガラの岩場を詰めて夏の天（二姑娘にて）
雲湧きて谷犯しゆく夏夕べ（巴朗山峠にて）
草堂の葉柳散らし雨の降る（杜甫草堂にて）
杯重ね別れの宴明け易き（成都にて）
夏霞長城の果て空に入る（發達嶺にて）
白靴の集いて舞えし朝の庭（天壇公園にて）



日隆にて

日本に帰って、友と阿賀野川をカヌーで下った。その時、浮かんできたのは何故だか岷江のくだけ散る濁流であった。何時か、その流れを上って、雪宝頂も見てみたいと思う。雪宝頂は幻に終わったが、楽しい旅であった。感謝。

オム マニ ペメ フム

チベット仏教徒から「マニ車」と「オムマニペニフム」の呪文を切り離すことはできない。この呪文の意味について杉本猪三氏は、「中央アジアの仏陀・岩と雪2号」で以下のように言う。

オム = 仏陀の功德に対する賛美の叫び声

マニ = 宝珠の意で不可思議の妙用を具えた仏陀の聖法

ペメ = 仏の浄土に生ずる無染清浄な蓮華と菩薩とを兼ね現す

フム = 聖衆団に対する感嘆詞

六シラブルあるところから六字呪文と言われており、この六字呪文の文字は、如何なる群れをも清浄に洗い去り、その文字を目で見るだけでも利益があり、読経の声を聞くものはすべて極楽に往くものとされ、その含蓄する処は中国、日本の六字名号「南無阿弥陀仏」と何ら変わらないと解説する。

私（山森欣一氏）は1984年夏、チベットのシガツェにあるタシルンボ寺で経木を彫っている場所を見学したことがあるが、僧からこの呪文はそれぞれ下のような世界を表わしていると説明を受けた。

オム = 神の世界

マ = 神と人との間の世界

ニ = 人の世界

ペ = 全ての生物の世界

メ = 餓鬼の世界

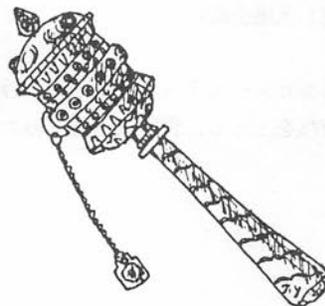
フム = 死の世界

（シャラリ峰登山報告書より）

四 姑 娘 山 の 歌

山を下る最後の夜、ヤク方のひとりが朗々たる声で四姑娘の山の歌を歌ってくれた。メロディーは唱歌「荒海」に何処となく似ていた。ここには歌詞を載せておく。

四呀四姑娘山四姑娘山的姑娘們 你們好像世上路辺大呀嗎大紅花



第3部

隊務報告 考察



隊務報告

1. 総括

登山隊の成果を振り返るとき、その方法論としては、やはりその隊の目的に照らして云々すべきだろうと、常々考えています。ここでは、この観点に沿って、今回の登山を総括します。

(1) 第1の目的〔小雪宝頂の登頂〕という面からは、全くの失敗でした。第一、目的の山の姿すら見てはいません。異常とも言える豪雨、土砂崩れ等が原因でした。それにしても、今から考えると、中国流の『白髪三千丈』的な表現に惑わされたような気がします。といっても、これは何ら四川省登山協会の先生方の責任ではありません。民族性の違いにしかすぎないのです。

「復旧は今年いっぱいかかります」は、せいぜい1か月でしょうか。

「1か月かかります」と、聞いたら1週間以内。

「1週間」と、いったら2日もみればいいでしょう。

しかし、順調に進行しても、8日間しか登山期間がない我が隊には、入山前には2日間とはいえ、停滞は考えられないのです。

(2) 第2の目的〔テイクイン・テイクアウトの徹底〕という面については、それを完全に実施するべく努力しました。これは、時代の潮流から当然のことですが、口でいうのは易しくても、いざ実施するとなると、なかなか難しいことです。

山中の生活日数が、当初の計画より少なかったので、食料、燃料などが半分も残ってしまいました。

下山時のヤクの数が少なく困りましたが、金を払って、ごみと一緒に成都まで運び降ろしました。

目的外とはいえ、地図上に山名の記載のある山に全員が登頂できたことは、望外の幸せでした。もともとこの登山隊は、『2週間程度の休暇の中で、ヒマラヤの高峰登山を楽しみたい!』という会員のニーズから生まれ、発展してきたものなのです。そのニーズに答える一つの方法がこの山域にあったのです。

大姑娘(5,025m)、二姑娘(5,276m)、これらの東側にある山々(5,000mは越している)がその対象となると思います。山ばかりではなく、それらの山々の裾野は、エーデルワイス等百花咲き乱れる素晴らしいお花畑なのです。(酒井 国光)

2. 総備

共同装備については、殆どが現地の登山協会の倉庫にデポしてあったものを使用し、日本から持っていたものは、ガソリンコンロ(ピークI)、簡易無線、電池などわずかだった。

テントについては、B・C用の大テントと上部キャンプ用の小テントを持参したが、目的の山が変更になったため、B・Cのみで、上部では使用しなかった。B・CではPPシートをフライとして使用したが、大変有効であった。登攀具については、大姑娘登頂では全く使わず、二姑娘では、上部の岩場でフィックスロープ4本とロックハーケンを使用した。アイスハーケンやスノーバーは、雪が少なく、また軟らかく、全く使用しなかった。これは、上部(山頂手前)の雪面に出たとしても、この時期ではあまり必要ないのではないかと思われた。コンロについては、B・Cではガソリンコンロ、上部ではEPIという考えだったが、ガソリンは現地の有鉛ガソリンを使用したため、後半コンロが不調となり、EPIに頼らざるを得

なくなった。ガソリンは、撤収の際にゴミを燃やすためにも使用するの、やや多めに持っていく必要があるように思う。いうまでもないことであろうが、食器関係では圧力鍋が大きな役割を果たした。高所では、食欲が減退し、麺類等のメニューが多くなるので、隊員個々が圧力鍋の使用法に慣れておく必要がある。酸素についてはO₂パックを持参し、不調となった者が使用し、有効であった。

個人装備については、この時期は雨が多いため、雨対策をしっかりと考えていく必要がある。

今回は、目的の山が突然変更になり、また、登山期間も短くなったため、装備についても十分な選択ができず、やや過剰きみであったが、このような状況の中ではやむを得なかったと考える。装備一覧表は省略する。 (小太刀 健)

3. 気 象

7月下旬は、中国大陸中西部は天候不順で、四姑娘を登頂した広島山の会のメンバーも天候にてこずったようである。

天気図によると、7月27日から現れてきた低気圧が998mbに達しながら、北東へと抜けている。この時、寒冷前線が南下するにつれて、北部より別の低気圧が南下している。この低気圧と、南海上から発達し、北北東に抜けた前記の低気圧とが四川省全域に相当の降雨をもたらしたものと推定される。このため、長江上流の各河川に沿う道路は、土石流、落石、崖崩れ等により、多くの箇所が不通となったようだ。我が隊の目指した小雪宝頂への3本のルートも不通となり、転進したコンガの途中でも、道路の流失していることが分かり、成都に引き返すという羽目になった。

四姑娘山域は比較的荒れていなかった。入山中の天候もまずまずの調子であった。しかし、二姑娘登攀の際には天候が崩れ、登頂断念という結果となった。

今遠征中、大砲のような雷音を何回か聞き、その後河川の水量が急増する様子を見たり、入山最後等にはかなり激しい降雨にあった。これらのことから、推測の域を脱し得ないが、この時期は、一旦の降雨でかなりの雨量があるものと考えられる。遠征中の天候概況については別表参考のこと。(仕名野 完治)

4. 医 療

日本から食料品と共にまとめて隊として医薬品を持参し、成都にあるものは現地補給した。それから、毎日の各人の健康チェック表(別表参考)記入を義務付けた。

今回の山行で高山の影響を受けたのは2名で、結果として何れも大姑族の登頂には支障なかった。A隊員は、8月7日にB・C着の際、頭痛を訴え、翌日日陰に下山し、1日休養した後B・Cに戻り、その後大姑娘に登頂している。本人の申告により下山したものであるが、結果としては良かったと考えられる。I隊員は、7日B・C建設の夜、明日は休養ということで安心して、若干酒量が増し、9日大姑娘登頂後、高山病の症状がはっきりと現れた。頭痛、顔の浮腫み、吐き気、足の筋肉痛等で、食事は勿論のこと、好きなビールを飲む気力、体力も弱まり、強い眠気かられた。O₂パックの酸素を吸い、ひたすら休養に励んで次第に回復したが、隊長としては一時下山を考えた程であった。

全体としては、環境、特に食生活の変化から、胃腸の不調(下痢が大半)を訴える隊員が多く、胃腸薬、また、疲労回復のためのビタミン・カルシウム剤(ポボンS)が多く利用された。

今回のような短期間の遠征では、隊員個々で医薬品を持参することも考えられるが、やはり隊として一通りの医薬品を持参し、万が一に備えることが妥当であろう。また、ネパール等と異なり、中国では食べ物や水の心配をする必要はさほどないが、辛く刺激的な食事が多いため、胃腸薬は多めに持参した方が良く、ガラガラのガレ場が多いので、外傷薬も多めに持参した方が良いように思う。(岩田 達雄)

天 候 概 況

時 月日	6 時		12 時		18 時		備 考
	天 候	温 度	天 候	温 度	天 候	温 度	
7月30日	⊙	29℃	⊙	—	⊙	28℃	成田～北京～成都
31	⊙	27℃	⊙	33℃	⊙	28℃	成都滞在
8月1日	●	26℃	⊙	33℃	○	27℃	成都～雅安
2	●	23℃	⊙	31℃	●	27℃	雅安～天全～雅安
3	●	27℃	●	25℃	⊙	26℃	雅安～成都
4	⊙	27℃	○	31℃	○	21℃	成都～臥尤
5	⊙	19℃	○	25℃	⊙	16℃	臥尤～日隆
6	○	14℃	⊙	25℃	●	12℃	日隆～花海子
7	○	4℃	⊙	26℃	⊙	11℃	花海子～B・C
8	⊙	7℃	⊙	24℃	⊙	14℃	B・C滞在
9	⊙	8℃	⊙	21℃	⊙	11℃	B・C～大姑娘
10	⊙	8℃	⊙	24℃	⊙	11℃	B・C滞在
11	⊙	7℃	⊙	27℃	⊙	11℃	B・C～二姑娘
12	●	7℃	⊙	12℃	●	12℃	B・C～二姑娘
13	●	8℃	●	21℃	●	12℃	
14	●	8℃	⊙	12℃	⊙	18℃	B・C～日隆～臥尤
15	○	13℃	○	35℃	○	26℃	臥尤～成都
16	⊙	25℃	○	33℃	●	26℃	成都滞在
17	●	21℃	●	25℃	●	23℃	成都滞在
18	⊙	20℃	⊙	—	⊙	28℃	成都～北京
19	⊙	22℃	⊙	—	⊙	31℃	北京～成田

92 小 雪 宝 頂 隊

体調チェック表

氏 名

月日 項目	7/30	31	8/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
位 置																						
前 の 日																						
脈 拍																						
体 温																						
1 頭 痛																						
2 倦 怠 感																						
3 咳																						
4 咽 頭 痛																						
5 喘 息																						
6 呼 吸 苦																						
7 嘔 気																						
8 下 痢																						
9 食 欲 不 振																						
10 不 眠																						
11 2 点 浮 腫																						
12 2 点 嘔 気																						
評 価																						
そ の 他																						
処 置																						

※1～12までは該当するものに+印を。

※評価は1～12までの+印の和。

5. 食 糧

<基本的な考え>

- Take in Take out の実践
- HAJ ルームにデポしてある食糧品をフルに使う。
- 現地で購入できるものは、それでまかなう。
- めん類を多く、α米はへらす方向。
- 10日分(BC食・C1食の区別をしない)
- 飲み物をとるように心がける。ビールも酒という効用だけでなく、飲料という考えで、できるだけ荷上げる。
- 昼食は、日印合同隊の女子隊でレーション化してあるものを使う。

<現地購入品リスト>

品 名	購入量	値段(円)	評 価
玉 ね ぎ	5 kg	1.5	良
ジャガイモ	5 kg	1.5	良
キャベツ	1.5 kg	1.0	腐 敗
にんにく	0.5 kg	0.6	
卵	1.1 kg	4.95	良
ね ぎ	1 kg	0.8	腐 敗
リンゴ	4.15kg	14.9	好 評
粉ミルク	500 g	17.6	
乾 し 肉	6 袋	16.5	味付からい
塩	500 g	0.34	
食 用 油	1.8 ℓ	16.8	容 器 破 損
しょう油	500 ml	2.04	
容 器 代		0.8	
は し	10 組	0.5	
粉末ジュース	500 g	8.66	甘 い
荔枝ビン詰め	1 kg	4.58	好 評
桃ビン詰め	1 kg	3.7	好 評
電池単2	16 コ	7.26	

※1元 ≒ 26円 成都にて購入

<食糧計画>

()は実際のもの

月日	朝 食	昼 食	夕 食
① 8/4	ラーメン ()	行動食 ()	カレー ()
② 5	魚定食 ()	"	野菜いため ()
③ 6	やきそば ()	" (行動食)	酢 豚 (カレー)
④ 7	うどん (ラーメン)	" (行動食)	マーボー春雨 (マーボー春雨)
⑤ 8	そうめん (うどん)	" (ホットケーキ)	中華丼 (回ほう鍋)
⑥ 9	お茶漬け (ラーメン)	" (行動食)	ちらしすし (焼そば)
⑦ 10	ラーメン (うどん)	" (ゆで玉子)	カレー (野菜いため)
⑧ 11	やきそば (ラーメン)	" (行動食)	チャーハン (す し)
⑨ 12	うどん (うどん)	" (行動食)	カレー (チャーハン)
⑩ 13	お茶漬け (うどん)	" (おかゆ)	ちらしすし (α米・中国)
⑪ 14	—	—	— (ぞうすい) (行動食) ()

<雑 感>

- 総量は75kgとなった。(10×3×7=210食)
- 計画と実際との比較でわかるように、朝はめん類が多く、登山期間も短かったので、α米・行動食などずいぶんあまってしまった。
- うどんは乾めんを圧力釜でゆでて好評であった。
- 油はトラック輸送中に容器が破損してこぼれてしまった。ゴマ油はにおいがきつく使えない。
- 野菜は、移動に日数がかかりくさってしまった。
- リンゴ・フルーツは好評であった。

(大久保 博)

6. 環 境

(1) 我々の環境保全に対する気配り

登山隊の残していった装備やらゴミやらが散乱する場所がヒマラヤあたりには、結構あると聞く。隊の大小にかかわらず、ゴミ処理は、事前の計画の段階で明らかにするべきであろう。我々の場合、H A Jの方針でテイクイン・テイクアウトの徹底がはかられた。

燃料は、灯油を使い、暖をとる目的でも薪を燃やすことはしなかった。

ゴミについては、ゴミになりそうなものを極力持って行かないように心掛けたと思うが、現地では、生ゴミ、燃えるゴミ、燃えないゴミ（含むビニールゴミ）に分けるようにした。ゴミ焼きは、ちょっと穴を掘ってから、そこで燃やすと始末がしやすい。生ゴミと燃やした後の灰をそこに埋めた。雪上や岩場の場合は、砂れき地や土のある場所まで降ろすことになるが、今回は、その必要がなかった。ただし、草原では、意外と表土が浅かったのには驚き苦労した。ビニールゴミなどの燃えないゴミは、踏む、たたく、詰め込むなどして、小さい塊にしておいた。これを下山の時に持ち帰った。結局成都まで運んだ物が多い。

(2) 四川省の環境に対する懸念

現在、地球規模で土壌侵食が進んでいるが、四川省の日隆、四姑娘山の地域も例外ではないように思えた。牧草地となっている草原は、元々の草地もあるが、灌木のある所もちらほらあった。その灌木は、明らかに薪として伐採されて、減少していた。また日隆の周囲の山腹は相当な高さまで、畑として利用されていた。それはそれで中国人の勤勉さの現れであろうが、土砂流出の危険は、まったくないと、思えなかった。ちょっと道を間違えて畑にもぐり込んでしまったが、その時見た段差の石垣やら土垣は、決して丈夫なものとは見えなかった。石弘之著「地球環境報告」（岩波新書）によると、「揚子江の水はかつては澄んでいたが、今では黄河なみに濁ってきた。すでに流域面積1億8,000万ヘクタールの2割に相当する3,600万ヘクタールで土壌流出を起こし、毎年24億トンの表土が失われて、5万トンの土砂が東シナ海に流れ出している。」とある。そういえば、巴朗山パスを越える木材搬出のトラックがやたらと多かった。ベースに向かう尾根から対岸を見たとき、結構な斜面で木を切り出していた。揚子江上流の四川省、雲南省は東北地方に次ぐ森林地帯だが、森林が急減していると聞く。さもありませんという気がする。前掲書の別の項には、砂漠化の原因として、「① 32.4%が過度の伐採、② 29.4%が過度の放牧、③ 23.3%が過度の農耕」とある。我々としては、環境保全も重大問題であるが、四川省の緑豊かな山をいつまでも残してほしいと望むのである。

（天野 一郎）

7. 記 録

記録については、小雪宝頂に向けて次のような方針を立てた。

- メモ程度でも、隊員全員に全日程を通じての記録をお願いする。班別行動の際にはそれぞれに詳細な記録をお願いする。
- 隊務については各係りで記録をお願いする。
- 写真については隊として特に規定を設けず、自由とする。全体の流れは記録係りで撮影する。
- ビデオ・8mmは撮影料が高いので、隊としては持参しない。
- 報告書は登頂の可否に拘らず発行する。その際、隊の性格から自分たちの思い出としての要素を重視する。

結果として四姑娘への転進ということになったが、未知の地域ではないということ等で、基本的には上方針をそのまま考えた。

（谷田川 武）

四姑娘周辺の概観

谷田川 武

四姑娘（スークーニャン）は四川省北東部阿坝（アバ）蔵族（チベット族）羌族（チャン族）自治州に聳える名峰であり、邛崃（チョンライ）山脈の主峰である。

阿坝州は13県（県）からなり、四姑娘は州南部の汶川（ウェンチュアン）県、小金（シャチオン）県の堺に位置し、周辺には5,000m級の山々が連なる。州自体はチベットヒマラヤの東端に位置し、人口約50万人、その7割がチベット族であり、州都は馬爾康（マルカン）である。その大半を高山と高原が占め、谷間に散在する集落の人々は段々畑の農業、ヤク・馬・羊などの放牧、薬草取りなどを生業としている。

四姑娘には西の小金から入る。地図で見る限り、東の汶川から近付ける車道は無さそうである。ここでは成都から追う形で概況を述べてみたいと思う。

道は、成都北西にある治水史話で有名な都江堰（ドージャンヤン）市を通る。多くの史跡が残されているところだ。活気のあるこの町を抜けると、大河岷江と離れ、美しい谷の続く山あいへと入っていく。日本の谷を大きくしたような緑あふれる谷が続き、激流が岩間を白く流れ、何処をとっても絵になるような美しい風景が展開する。現地のパンフレットにも溪谷の美しいところとして紹介されている。

その溪谷沿いに大熊猫（パンダ）の生息地臥龍（ウーロン）がある。周辺は自然保護区とされ、自然の宝庫であり、植物4,000種、鳥類300種、哺乳動物60種以上を数える。特別行政区でもあり、訪問客が多いためか、立派な招待所がある。町から少し離れた所には世界野生生物基金協会により設立された大熊猫研究所があり、誰もが多くのパンダを見ることができる。

その臥龍より、長くハードなダート道を4,500mの巴郎山（バロンジャン）峠を越えて小金県へと入る（峠が県堺となり、巴郎山は四姑娘から南に下った山脈上に位置する）。大変な道だが（中国山間部では一般的か）、道ぞいにはブルーポピーを中心とする多くの花が咲き乱れ、美しい谷や山の風景に飽きることはない。峠を越えると、神の山と呼ばれる槍ヶ岳を大きくしたようなプニューが印象的に迫ってくる。

小金県は人口約7万、その大半を高山森林地帯が占める。小金から成都へと向かうトラックの大半が材木を山積みにしてきた。そのトラックが峠を越えていく様子は圧巻である。これに対し、成都から小金へと向かうトラックの大半が幌を掛けているので、推測にすぎないが、おそらくは生活物資を運んでいるものと思われる。県の南部を長江の一流源である沃日（アオリー）河が東西に流れ、集落の多くはこの川沿いに散在している。四姑娘への登山口となる日隆（リーロン）はその流れの上流部に位置し、日本の郡にあたる郷である。幾つかの村から構成され、村は川沿い約10キロの範囲に点在している。

日隆の人々の生活は農業、放牧、薬草取りで成立っている。

農業は、川岸からかなりの上部まで段々畑（日当たりを考え、大半が川の北側、南面を向いている）が作られ、菜の花を中心に、他に麦、豆などが栽培されている。菜種は毎年秋に収穫され、日隆の集荷場に集められた後、小金の工場で搾油されるそうだ。そして、菜種はその量に応じた米や麦に交換されることである。最近は個人経営の搾油工場への自由売買も増えているそうだ。

放牧は周辺の草原、高原を利用して幅広く行われており、ヤクと羊が大半のようである。馬も多くいるが、主に荷物運びとして使われているようである。夏には5,000m辺りまで放牧され、人々も高地にあるカルカ（夏だけの石小屋）で暮らしている。カルカは内部が6畳～10畳程の小規模なものが多いようだ。ヤクや羊飼いは子供の仕事でもあり、花の咲き乱れる草原をのんびりと女の子たちが羊を追ったりしている。ヤクはその毛はもとより、運搬手段、乳を得る動物として、人々にとって大きな存在となっている。

る。我々もその乳、ヨーグルトを御馳走になったが、栄養価はもちろんのこと、腹持ちもいいようである。人々は主に乳からバターを作り、バター茶として常用しているようだ。また、食肉用として都市部への販売も行い、1頭1.000元前後で売買されているようだ。僅かであるが、年配の女性が紡錘車を持っている所を目にした。糸紡ぎは女性の大切な仕事としていきづいているようだ。

薬草取りは人々の大きな収入源となっている。日隆周辺は薬草の宝庫といわれ、我々もキャラバンの二日間だけ何人かの薬草取り（町に売りに行く人）と出会った。大黄、ゆり根（茎）、そして昔から妙薬として知られる冬虫夏草など、他にも多種の薬草が高所を中心に野生している。古くより漢方医学を支えてきた一地域であるのかもしれない。

菜種販売や薬草販売により、郷としての所得水準は高まり、テレビ・ラジオなども少なからず普及しているようだ。成都から近く、多くの登山、トレッキング隊が入るため、それに伴う収入も大きいようだ。

先述したように、大半をチベット族が占める地域であるが、我々が入山した海子（ハイズ）溝側にはラマ教関係の文物は殆ど見られなかった。唯一、沃日河から急坂を登り詰めた広い尾根の外れ（峠状で、良く四姑娘が見える箇所）に塚があり、タルチョ（経文を書いた旗で、風が吹く度に経が世界に広がっていくとされる）がはためき、経文紙が散らばっているのを目にしたのみであった。おそらくは神の山とされる四姑娘が空に飛び立つような姿でよく眺められる長坪（チャンピン）溝側の方に文物が多いものと考えられる。以前はチュプルスティーという旧い寺があったそうだが、文革の際に破壊され、現在は廃墟のままだそう。四姑娘への山岳信仰を基盤としたラマ教寺院であったのだろう。先熱日（ジャラリ）遠征の際に貢嘎冲古（コンカチョングー）で見た廃墟を思い出した。チベットの名山の麓にはその山への畏敬と崇高との念を基盤とした信仰の息衝きがあり、仏教と結び付いた後もその山の良く見える箇所に寺院が建立させてきたのであろう。垂直なるものへの畏敬の念が原始宗教の始まりであるとする説があるが、四姑娘はその説を十分に納得させ、そして今でも、カイラス信仰をはじめとして、山岳信仰がラマ教、チベット仏教の大きな柱となっていることを感じさせる姿の山である。

* 四姑娘山名考

仏教では仏をその慈悲から女性的な姿に描くことが少なくないように思う（観音菩薩像などは女性の肉体を思わせるものが多い）が、四姑娘とは四人の娘ではなく、四体の仏なのかもしれない。

ところで、疑問に思ったことがひとつある。それは、標高の低い順に何故大姑娘、二姑娘、三姑娘、四姑娘と命名されているのかということである。仏教は、釈迦の生、老、病、死の四苦の認識から始まり、その苦を滅するための四諦（したい）という根本経説をもって形成された。四諦とは四つの真理という意味で、仏教にとって、四は大きな意味を持った数字なのである。殊に、道諦と呼ばれる第四の真理は、苦を滅する道（八正道と呼ばれる）を説いたもので、経説の柱といえる。苦を滅した境地がいわゆる涅槃であり、仏教の理想境である。他の三山に比べ、一際高く、崇高な美しさを有した最高峰に涅槃の理想境を見、四姑娘という名を付けたと推測することはできないだろうか。チュプルスティーの僧達は毎日四姑娘を崇め、自分もその境地に近付くことを目指し、修行に励んでいたことは十分に想像できることだと思う。大姑娘を第一の苦諦、二姑娘を第二の集諦、三姑娘を第三の滅諦に見立て、そして道諦の四姑娘へと至る一その山容は四諦、そして仏である。ジャラリも「仏が住む一番高い山」、「千手観音菩薩」をその名の由来とすると麓では言い伝えられている。別考では、大姑娘には年取った女性という意味があることから、山容の穏やかさからその名が付けられ、気高く近付き難い最高峰に若い末娘の四姑娘の名が冠せられたとも推察される。四姑娘には岩と雪で人の顔が現れるということも付記しておきたい。

最後に『コンサイス外国山名辞典』（三省堂）から四姑娘の項を記載しておく。

「スクゥニアンシェン 四姑娘山：中国、四川省。邛峽山の主峰6,250m。ほかに5,664m、5,454m、5,386mの3峰がある。ほぼ南北に連なり、東側は岷江支流の水源、西側は大渡河支流の水源を成す。1981年7月に同志社大学山岳部隊（川田哲二隊長）が南東稜から初登頂」

四姑娘山域の概観・登山史

酒井国光

正直な話、1992年8月3日まで、私自身この山域で登山をしようなどと、考えたことがなかった。今回の目的地も『小雪宝頂』であり、これが不可能という段階で変更したのが『貢嘎山周辺』だった。再度、目的変更の時点で「どうしようもない、四姑娘でも行くか」というのが、今回の我々の四姑娘だったのだ。

したがって、私にはこの山域をくわしく語ることは出来ない。しかし、我々は四姑娘へ行ってきたのだ。報告書を出すにあたり、我々にはこの山域を説明する責任が生じてしまったのだ。

ここでは、帰国後、手元の資料をまとめたものを掲載する。したがって、既存のものを最大限に利用させていただいていることを、まず、おことわりしておく。これから先、この山域を目指す人達の参考になれば幸いである。

(1) 山域の概説

中国の山々への登山が、我々外国人に解放されたのは、1980年である。この面については、解禁後まもなくの、1981年12月に出版された『中国登山ハンドブック』（中国人民体育出版社監修、上越山岳協会編）が詳しい。ここでは、それを基に概説する。

「四姑娘（スークーニャン）山は横断山脈北部、邛峽（チョンライ）山の最高峰で四川省アパチベット族自治州と小金県の境界に位置している。四姑娘山は四つの5,000m峰からなり最高峰は6,256mで、周囲にはさらに十数座の5,000m以上の高峰があり、四姑娘山を中心とする山塊を形成している。

横断山脈とその北部の邛峽山は、いずれも南北方向に伸びている。このため南からやって来る海洋性の湿った暖かい空気はかなり北の方まで到来し渓谷内には植物が繁茂している。

▷入山ルート

成都から灌県をへて、臥竜（Wolong）自然保護区を通り、巴郎（Balang）峠（海拔4,487m）を越えて、小金県の日隆（Rilong）人民公社（海拔3,150m）に入る。この間の全行程は230kmで、自動車なら1日で到達できる。道路状態は比較的良好い。

日隆は紅旗人民公社の所在地で、ここには小金県営の旅館が1軒あり、食堂、売店も設けられており、40人が宿泊できる。日隆からベース・キャンプ（海拔4,400m）までは馬とヤクを使うことができ、約2日で到達できる。

日隆から四姑娘山に入るには二つのルートがとれる。

1. 真北に向かう長坪谷（Zhang-pinggu）ルート

日隆から長坪谷をへて四姑娘山に至る全行程は約14kmである。長坪谷は四姑娘山稜の西側にあり、谷間は森林におおわれており村々を結ぶ山道が通じている。四姑娘山の西側はおよそ40度～50度の急な斜面となっており、しかも高度差100m以上の岩壁がいたる所にある。クライマーにとってはきわめて魅力的な所である。

2. 東北に向かう海子谷（Haizigou）ルート

海子谷は四姑娘山稜の東南側にあり、このルートは全体が東北から西北に向かう半円形をなしている。日隆から四姑娘山麓までの全行程約18km。日隆人民公社から東北方向に向かい、尾根（海拔3,500m）を越えると四姑娘山が見渡せる。ここから大海子までの山腹は草付斜面や灌木地帯で山道が通っている。大海子は氷河の融けた水でできた高山湖である。湖面は海拔3,800mで、南北方向に長く、長さは1km、幅は500mで水中には食用となる裸鱗魚が多数生息している。

花海子北端から、氷河が融け出してできた小川に沿って西北方向へ登った海拔 4,400 m の古氷河谷が、ベース・キャンプ地となる。そこは岩石と草付斜面からなり、斜度は 5～10 度である。付近には水場があり、危険な場所はなく 30～40 のテントを設営することができる。(『中国登山ハンドブック』)

(2) 登山史と登山の概要

中国の山々の門戸が開かれると、満を持していた各国は、続々と登山隊を送り込み多大の成果をあげた。四姑娘山域としてその例外ではない。(この中国登山年譜は当ヒマラヤ協会発行の『中国登山の手引』第二版にくわしい)。ここでは手元のいくつかの資料を元に、この山域の登山史のあらましを列記し、さらに、登山活動の概略をまとめる。なにぶんにも、『孫引き』が多いことをことわっておく。

① 解放以前の登山

前記『中国登山ハンドブック』の中国登山年表によると、中国で登山が正式にスポーツとして取り入れられ、組織的に行われるようになったのは、1955 年である。以降、四姑娘がこの年表に登場するのは、解放直前の 1980 年である。つまり、

【A】「1980 年、春、四川省登山協会隊がスークーニャン山偵察」である。

この偵察行は、その年の末に行われる解放のためのものであることは想像に難くない。ということは、現地四川省登山協会といえども十分な情報をもっていなかったということである。

今回、すがすがしい朝の冷気を胸いっぱい吸い、日隆を出発した私は、長坪溝左岸の尾根に登りだした。高度を上げるに従い、木の間越しに盟主四姑娘山が立ち上がってきた。周囲を薙ぎ落した黒々とした岩壁・白銀の氷壁で守られたこの山の、天をつく神々しさに息を飲んだ。すばらしい。やはりこの山も、地元チベット族の人々の聖なる山であることを実感した。解放以前に、この聖山への今日的な登山はないと思わざるを得ない。

② 高所登山

この山域での活動を、私は 4 つに分類してみた。1 つは四姑娘山を中心とした高所登山である。2 つ目は、いたるところに露出した岩壁群を対象とした「岩壁登山」、3 つ目は山麓のお花畑の散策を中心とした「トレッキング」、さらには、周囲に十数座あると言われる 5,000 m 峰への登山である。

ここでは、四姑娘山、三姑娘山、二姑娘山への登山にふれたい。

【B】「1981 年、四姑娘山(6,250m)、同志社大学隊が 4 月から 7 月にかけて 2 隊を送りこんで登頂」

「第一次隊(和田豊司隊長ら 7 名)は、ルート偵察後、南東稜にルートを決めて挑んだが 5,620 m で断念。引き続き 7 月から第二次隊(川田哲二隊長ら 8 名)が南東稜に挑み 7 月 28 日に 2 名登頂。29 日、30 日にも登頂する。(合計 7 名が登頂)」(『中国登山の手引』)

この隊は、「第一次隊が登頂を断念し帰国」とあるが、その報告会で和田隊長は、

「登山を断念したのではない、一時中断したのである。登山協会から異例の登山延期の承認もすでに得ていること、また四姑娘山の近くの日隆(リーロン)人民公社に二名(高橋、角谷)の隊員を残留させ、第二次隊の到着までに徹底的なルート偵察をやること、さらに出来る限り気象に関する情報を入手し、登山に適した時期を報告すること、などの重要な手筈もすでに整えての帰国であった」と述べている。

第二次隊は、7 月 5 日に日本を出発し、12 日、前回と同じ場所に BC(4,500m)を設営する。

17 日、C1(5,200m)建設。そこはクーロアール基部右寄りの岩壁の下にできた凹地で落石、雪崩を避ける唯一の場所である。

18 日から、最大の核心部クーロアールのルート工作にかかり、東南稜上の第一ステップ(5,630m)に出たのは、22 日の 16 時であった。そのクーロアール登攀の様子のとに、

「この急な岩と氷のクーロアール(平均斜度 45 度～50 度、下部のゴルジュは 70 度に近い岩壁)を登攀することは、全神経と持てる力のすべてを打ち込んでもなお苦しい困難なものだ。それに加えて落石と雪崩ではその登高は想像以上であろう」と、述べている。

さらに、東南稜のルート工作についても、

「稜線は痩せており、西側は急な雪壁で一気の下の水河に落ち込み、東側は雪庇が出ていて要注意。西側をトラバースするように前進するしかない。」

その上、25日、C2完成、

「といっても10時から14時まで5名の隊員が懸命にピッケルを振っての苦戦。それでも不十分で、結局テントを狭くして背負子を2個使い辛うじて完成。」と、悪戦苦闘の連続であった。

28日、12時ジャスト、2名の隊員が南峰(6,250m)に初登頂。この時点では、南峰と北峰のどちらが高いか不明であった。

29日、第二次登頂隊2名が南峰に登頂。

30日、第三次登頂隊3名が南峰に登頂。さらにこのうちの2名が北峰に向い、北峰に立つ。測定の結果、「南峰の方が雪庇の分だけ高い」とわかり、南峰を主峰と決定した。(以上『岳人』412号より)

【C】「1981年、二姑娘山(5,276m)、同志社隊登頂」

前述同志社第一次隊は、登頂断念後周囲の山へ向かった。二姑娘山と大姑娘山の間の東へ向いている沢(毛狗洞)の源頭付近にテントを移し、5月12日、5名が二姑娘山に登頂した。

さらに、これらのうちの2隊員は、翌13日、北側より大姑娘山に登り、南へ稜線通りに下り、日隆に達した。このとき、大姑娘山登頂後、「2日続けてピークに立つことになるが、何となく物足りない。四姑娘山の気品の高い容姿や困難さを比較すると二姑娘山と大姑娘山は何となく庶民的で容易な山であろうか」と。(『四姑娘山1981』)

【D】「1981年、四姑娘山10月にアメリカ隊(J.ドニニ隊長ら4名)が、北壁にルートを取って登頂を試みたが失敗した」(『ヒマラヤの高峰5』編者補遺)とあるが、詳細は不明である。

【E】「1982年、四姑娘山、アメリカ隊、北壁中退」

話が前後するが、次の【F】隊の報告中に、

「公社旅館に入ると、アメリカ登山隊がおり、プニュウへ向かうとのこと。その隊員の一人が昨年四姑娘山北壁へ出かけたとのことで、びっくりする。大クローアールにルートを取ったが、氷のコンディションが悪くて5,200mで敗退したようだ。彼は「右手の岩稜のほうがいいだろう。今度行くとしたらそっちにする」と話していた。謝さんに聞くと、今のところ四姑娘山北壁をめざした隊はこのアメリカ隊一隊のみとのことである。」と記している。

『人民中国82年7月号』に

「昨年10月、わたしは、アメリカの登山旅行隊にガイドとして同行し、この四姑娘山を訪れた。山登りのダイゴ味に富む、それはすばらしい登山旅行だった。……ベース・キャンプで休みをとり、装備をととのえてから、四姑娘山頂をめざして登攀にむかうことになった。残念ながら、わたしたちの登山隊は、山頂まで到達することができなかった。天気が思わしくなく、山頂まで登りつめることが不可能となったためだ。アメリカの友人たちは、5,000mの地点で、やむなく引き返すことになったのである。」とある。この隊と、【D】隊との兼合いが知りたいところである。

【F】「1983年、HAJ四姑娘山踏査隊」

当ヒマラヤ協会が、中国の山岳を舞台に活動を始めたのは、1983年である。いや、正確には、中国における登山及び踏査活動の第一段として9月23日より10月7日にかけて、この山群にこの踏査隊を派遣したのである。この隊は高所登山を目的とした隊ではないが、便宜上ここに入れて説明する。

隊は3名の隊員と、5名の報道団から成る。このうちの、角田不二、吉田憲司の2名は、四姑娘山の北面と三姑娘山の東面を偵察した。

29日、羊岩子の谷を登り、4,600mの快適な草の平地にピバークした2名は、真正面に北壁を仰ぎ、次のように語っている。

「この岩壁を見て興味を示さない人はクライマーではないと断言してもいいくらいすばらしい壁である。主峰北壁は5つのブロックに分類できる。すなわち①大クローワール、②左岩壁、③正面壁、④右岩稜、⑤右スラブである。右スラブの右に小さなリッジがあり、さらにその右にも西稜末端北面の大スラブ群が広がっている。また大クローワールの左手には5,920 mの針峰があり、これを取り囲む岩壁群もすばらしい」

2日、花海子より小沟を登り、三姑娘山東面を4,600 m付近まで偵察した後、

「やはり三姑娘北壁一帯は非常に面白い岩壁で、真中の懸垂氷河もアイスブロックの崩壊にさらされており、どうにもならない。結局三姑娘の登路は二姑娘經由（同志社のルートで二姑娘に登り、稜線づたいに三姑娘に達するルート）しかないようだ」と。

【G】「1991年、四姑娘山、拓殖大学隊、南東稜より頂上を目指すも、5,630 mにて断念」

樋口謙次総隊長、井上功隊長ら9名が8月に西面から入って、初登頂の同志社ルートを目指したが、5,630 mで断念した。やはり、南東稜に続くクローワールで苦勞し、南東稜に出てC2を建設しアタック体制を整えたが、悪天で断念を余儀なくされた。（『岩と雪』山岳年鑑 '92』）

【H】「1991年、春、四姑娘山南壁偵察」

次の【I】隊の偵察隊が、南壁の取り付けまで行き、可能性のある2つの岩稜を見付ける。（『岩と雪』156号）

【I】「1992年、四姑娘山南壁、広島山の会隊7名登頂」

1981年に同志社隊が登頂を果して以来、四姑娘山の第二登であり、それまで独特の気象条件の悪さから8隊の攻撃を退けてきたとか。

今回、この隊が狙ったのは、四姑娘山の顔ともいべき南壁である。

「顕著な2本の岩稜のうち、西稜に出てから頂上までの距離の短い右のはうをルートにえらんだ。稜なので壁とちがって落石や雪崩の危険性は小さいが、岩壁帯のルート設定と降雪直後の登攀は、かなり難しいものとなるだろうと予測した。タクティクスとしては、西稜上に抜けるまでの岩壁帯と雪壁帯の要所には固定ロープを張ろう。そして、西稜に出たならチームを3つに分け、同時に頂上ヘラッシュをかける、という方式を考えた。ルート開拓はふたり、もしくは3人でい、残りのメンバーは荷上げと休養にあたることにした。遠征期間は、ABC建設後、登山に1か月、トータルで40日とする。メンバー各自の事前準備としては、乾いた岩なら最低でも5・10 aがこなせること、氷ならば垂直の登攀にも慣れておくことを条件とした」

6月29日、干海子（3,500 m）にベース・キャンプを設営。ABC（4,600 m）までの荷上げはポーター10人で5日間を要した。C1（4,900 m）からは、本格的な壁の登攀になる。天候は、午後からかならずといていいほど崩れ、雨からみぞれ、そして雪となる。

7月7日から下部岩壁のルート工作が始まり、C3は5,450 m、西稜に出たのは23日であった。

24日第一次アタック隊2名、さらに第二次隊2名が登頂。翌25日にも3名が登頂を果した。

登頂後、

「四姑娘山という名前の響きもいいが、これほど美しく気品のある山はそうざらにない。惚れた女性に対するように、私たちもこの山を求め続けた。遠征には、闘争心・強い意志そして高度な登攀の技術も必要だろう。だが、もっと必要なのは、その山に惚れてむことではないだろうか」と、結んでいる。蓋し名言である。（『岩と雪』156号、『雲表倶楽部OB会通信』第14号）

【J】「1992年、二姑娘山登頂、相模家族山の会」

8月8日、大姑娘山と二姑娘山間の谷（標高4,350 m）にBCを建設する。9日、4,700 mにC1を作り、11日頂上に登った。（現地では我々と隣合わせのBCであった）

【K】「1992年、二姑娘山中退、H A J 小雪宝頂隊」

彷徨える我が隊である。8月7日、BC建設後、9日大姑娘山に登頂。その後、11日、二姑娘山東尾根の5,100mまでルート工作したが、荒天のため断念する。（『ヒマラヤ254号』）

③ 岩壁登攀

前掲の『中国登山ハンドブック』にも、長坪谷はいたる所に岩壁が露出し、クライマーにとってはきわめて魅力的な所であると述べてある。また、手元に四川美術出版社版の写真集『四姑娘山』があるが、ここでは、この山域の四季のすばらしさをカラー写真で紹介している。場所の同定はしていないけれども、幾つもの魅力的な岩壁群が紹介されている。ここではそれらの1つであるセレスチャル・ピーク（神山、または、プニューがそれに当たると考える）について説明する。

【L】「1981年秋、アメリカ隊の偵察行」

「2人のカリフォルニア人・ステックとヴィイルが四姑娘山塊を偵察し、セレスチャル・ピークを見つけだしてその登山申請をした。」とあるが、詳細は不明である。（『岩と雪』106号）

【M】「1983年秋、セレスチャル・ピーク登頂・アメリカ隊」

前年の偵察でこの山を見つけたエドワード・ヴェイルが隊長となり、8名の隊員のうち6名が頂上に立った。このピークは、プニュー、プニューウ、神山などと表記されているが、同じ山のようなのだ。

山自体は花崗岩で、アメリカのホームグラウンドにいるときと同じような装備で行動している。

「監視塔のコーナーを5.9のジャミングでさらに登っていくとルートの核心部になった。小さなフレックにブリッジして5.10Cのオーバーハングを越え、フィンガー・ジャムから指先のレイバック……17,000ftの高みで、暖かい陽ざしとよき仲間に見守られながらの花崗岩のクライミングはロック・クライマーの夢の実現といえよう。筋肉も神経も極限まで張り詰め、岩は足元を流れていく。」と、記している。

④ トレッキング

【N】「1984年、H A J 四姑娘山トレッキング隊」

前年の踏査隊の結果に基づき、隊員を募集した。

「同山麓は目を見張るような山岳美とのどかな草原散策のトレッキングを十分に満喫出来ることが判明しました。又、同山域には4,000m～5,000m級の山々が林立し、どの山も大きな岩壁を抱えていることも判りました。このため、今夏のトレッキングでは、ヒマラヤでの「ロック・クライミング」に興味を持っている岳人も加えて、トレッキングとロック・クライミング混合の隊を編成してみようと巾広く公募したけれども、結局はトレッキング隊のみしか成立しなかった。

トレッキング隊、小林英見隊長以下6名。期間7月27日～8月12日、長坪溝と海子溝を散策した。（詳細は『ヒマラヤ153号、157号、158号』）

【O】「アルパイン・ツアー、トレッキング隊」

1981年に四姑娘山本峰に初登頂した同志社隊の登攀隊長が、アルパイン・ツアーの関係者だったことから、同社では、1982年から四姑娘山トレッキングを実施した。

「最初は知名度も低いところだけに、参加者も少なかった。私達もその狭い山域から、すばらしいお花畑の自然を守るには年間100名程度の入山者が限界と判断し、積極的な宣伝もしなかった。しかし口コミとは恐ろしいもので、4～5年もすると参加希望者が急増しはじめた。それでもシーズンに4～5グループのツアー設定だけにとどめておいたおかげで、年間80名程度に押えることができた」（『Newsletter』No.100）

以来、10年、計算上では800名程の人がこの山麓のすばらしさに接したのであろうか。『山と渓谷』No.630のTopicsの紹介なども、その内の1つであろうか。

「今年になって他社手配によるグループが目立つようになってきた。それに伴い、ゴミ処理や現地の人々に与える影響も問題となってきたのだ。」として、日本ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト（HAT—

J)の倫理コードをもとにして作った、四姑娘山群での環境保全に関する具体的な行動倫理を提言している。つまり、次の7項目である。

①燃料。地元の人々は成長の早い柳の木を燃料としているようだが、トレッカーは成都から持ち込むガソリンを炊事の燃料とする。まき、今まで楽しみにおこなっていたキャンプファイアーはやめる。

②ゴミの処理。生ゴミは地元の人がベースキャンプ付近で飼っているブタの餌とする。燃えるゴミはBCで焼却。燃えないゴミは成都に持ち帰る。また、電池など有害物質を含むものは日本まで持ち帰る。

③トイレ。トイレットテントを持参。トイレットペーパーは使用後トイレットに置いてある箱に捨てる。使用済みの紙は下山時にまとめて焼却。

④BC近くを流れる川の汚染に注意する。洗濯や洗面などの際も洗剤や汚水などを川に流さないようにする。

⑤昆虫や植物の採取はしない。

⑥子供達に菓子、ボールペン、風船などを与えない。

⑦地元の人の写真を撮るときは必ず許可を得ること。彼らの文化、プライバシーを尊重する。子供達にものを与えて写真を撮るのはやめる」(Newsletter 100号)

日本ヒマラヤ協会も、山岳の自然を汚染しない運動を推し進める、日本ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト(HAT-J)の推進母体の1つである。今回の我々の登山においても、その徹底を隊の目的の1つに挙げ、実践してきた(『ヒマラヤ』№254)。今後ともこの行動倫理が普及されることを期待しているものである。

【P】「1992年、広島隊別動トレッキング隊」

【I】の四姑娘山南壁隊の別動隊として、新聞紙上で公募したトレッキング隊19名と広島放送の取材チーム4名が、この山域に入った。二姑娘と大姑娘の間の谷から大姑娘山に登ったようである。(『岩と雪』156号)

⑤ 付近の5,000mの山々

本稿『四姑娘山域の概観』で、私が書きたかったのはここだったのだ。しかし、いまの時点では力不足で、諦めるしかない。「かんべん」と、手を上げたが、編集者は許してくれない。しかたなく、周辺をめぐるってきたのだ。

隊の報告、ヒマラヤ№254の『登山を振り返って』で、

「『2週間程度の休暇の中で、ヒマラヤの高峰登山を楽しみたい!』というニーズに答える、一つの方法がこの山域にあった。大姑娘山(5,025m)、二姑娘山(5,276m)、これらの東側の山々など。山々の裾野は、素晴らしいお花畑である」と、書いた。

一つには、この東側の山々をまとめてみたかったのであった。

実は、今年の登山隊が、「小雪宝頂はだめ、貢嘎山もだめ、四姑娘山しかない」ということになり、ヒマラヤ協会から送ってもらった『ヒマラヤ』の記録中に、次の文をみつけたのである。

「王連絡官の5万分の1の地図を見て、大塚さんが大海子の東側にある4,100米のピークに登りたいと言う。王さんの話では、道も殆どなく現地の人でも上り4~5時間、下り3時間位かかったとの事で無理だというので彼女は諦める」(『ヒマラヤ』№158)

「よし、これなら四姑娘へ行っても何とかなるな」

「高い低いとは別に、近くの射程距離に頂上があるのだ」というのが、そのときの気持ちであった。もっとも、現地に赴いて、最初にそれらを相手にしようと考えたわけではなかった。もっと高い山があるからだ。しかし、その大姑娘の頂上に立って驚いた。何と、大海子対岸の山は、ここ大姑娘山(5,025m)より高いではないか。さらに、その北に同じような山々がいくつか連なっているではないか。これらはまさに『2週間程度の~』にぴったしなのだ。

残念ながら、まだそれらの山々について調べがついていない。いずれも5,300m位までの標高のものである。ここでは、これら東側の山々のスケッチ図を載せるにとどめる。(スケッチ図1)

また、四姑娘山の西側にも、かなり岩の露出した5,000m級の山がある。成都からのアプローチで、巴朗峠を越えると、下方の谷の正面に雪の被った大きな山群が展開する。ドライバーは『四姑娘』というが、四姑娘山はもっと右手で、尾根に隠されて見えないのだ。

この山塊は、長坪谷とさらに1つ西側の双橋谷の間の山々で、地図によると5,609mを最高にいくつかの5,000m峰から成るものである。神山(またはプニュー5,413m)もその1つで、いずれも岩壁の露出の多い山々である。これらは『2週間程度の〜』の対象にはならない。巴朗山峠付近からのスケッチ図を載せてみた。(スケッチ図2)

さらに、中国の地図によると、長坪谷の奥にはこの谷を馬蹄形に取り囲んで山稜が連なり、いくつもの5,000m峰が記載されているのだ。心躍る山域である。



スケッチ図 1



スケッチ図 2

(3) 四姑娘山付近の概念図

登山に地図は必需品である。海外の山だとて例外ではない。

中国には解放軍作成の詳細な地図がある。しかし、なかなか我々登山隊には解放してくれない。今回の登山においても、小雪宝頂方面へ入ることが不可能で、新しい目標を考える段階でこの地図を見せてもらった。そして、その地図をたよりに貢嘎山付近に決定した。(もっとも、その地図は縮尺の関係もあり、山の中に入ってからは、日本の地図のような利用の仕方はできないことはたしかだ)

四姑娘山付近に行こうと決めたのは、中国の地図を基にしてではない。日本からファックスで送ってもらった記録からである。

帰国後、この山域の概念図に当たって見たが、そのいくつかをここにまとめる。

① 【概念図1】

「『中国登山ハンドブック』ベースボール・マガジン社、69ページに掲載」

私の手元にある、最も初期の概念図である。これは、四姑娘山～大姑娘山の山名表示が現在と逆になっている。また、現在の四姑娘山の標高6,250m以外は、現在のものより高く表示されている。もっとも、中国で発行されているものには、それらの標高表示をしているものがあり(例、後出『概念図5』)、中国登山協会の大姑娘山の登頂証明書では、5,355mが使われている。

さらにこの概念図には、海子谷左岸の巴朗山峠につながる尾根が、現在の二姑娘から分かれ、大姑娘を経ているように描かれている。左岸の山々を考えるにあたり、ここを明らかにしたいものだと考えている。

② 【概念図2】

「『四姑娘山—1981—』同志社大学体育会山岳部、30ページに掲載」

四姑娘山の初登頂隊の報告書中のものである。これは、中国の5万分の1の地図がベースになっている。したがって、山の位置、標高ともそれに忠実に描かれている。特に、長坪谷については最奥まで描かれている。これは、第一次隊が登頂を断念した後、余った日数を利用して隊員が、思い思いの場所に向かっていくが、そのなかで、この谷の奥までトレッキングした隊員がいたことにもよろう。以降この山域の概念図は、これが参考になっているものとする。

しかし、私にとって残念なのは、海子谷左岸についてはカットされていることである。

③ 【概念図3】

「『ヒマラヤ145号』日本ヒマラヤ協会、19ページに掲載」

ヒマラヤ協会最初の、中国の山岳への偵察隊が描いたものであり、これも中国の地図がベースになっているようだ。ここでは、海子谷兩岸の尾根が描かれているものの、左岸についてはきわめて簡単である。これは、メンバーから言って左岸の山々には興味を示していないということであろう。

④ 【概念図4】

「『ヒマラヤ153号』日本ヒマラヤ協会、21ページに掲載」

前年の偵察に基づいて、公募したトレッキング隊の計画の中のものである。これも、前出の中国の地図がベースになっている。ここでは、四つの姑娘山を中心に、西の岩山プニューと大海子東の山の一部分が描かれているのが嬉しい。

今回の我々の登山においては、この概念図3と概念図4が大いに参考になった。

⑤ 【概念図5】

「『四淀娘山』四川美術出版社、1ページに掲載」

写真集の1ページ目に掲載されている示意图である。TOURIST MAPとあるように、登山を対象とした概念図ではないが、中国での標高表示などの例を示すものとしてここに取り上げた。

⑥ 【概念図6】

「『NEWSLETTER №82』アルパインツアースervice株式会社、17ページに掲載」

前述のように、この山域はトレッキングが盛んである。その老舗アルパインツアーではどんな概念図を使っているのかなと興味があったので、ここに一例を掲載した。これもやはり中国の地図がベースになっていることがわかる。

⑦ 【概念図 7】

『『ヒマラヤ 244号』日本ヒマラヤ協会、9 ページに掲載』

大姑娘・二姑娘付近概念図で、私が描いたものである。前述の概念図 3 と現地でも撮影した写真、現地でも受けた感じなどを基にしたもので、今考えると、大姑娘と二姑娘をもう少し離した方が良かったようである。

⑧ 【概念図 8】

「未発表」

四姑娘・4山の東側の山々についての概念図を描いてみた。中国の5万分の1地図が手元がないので、その不鮮明なコピーを基にした。山の位置は地図通りだと思われるが、標高についてはかなり？の部分があることをおことわりする。

これによると、海子谷左岸には5つの5,000 m峰があり、また5,000 mになんなんとする山も5つ程あることがわかる。近い将来、現地へ赴き、より詳しい概念図にしたいと考えている。

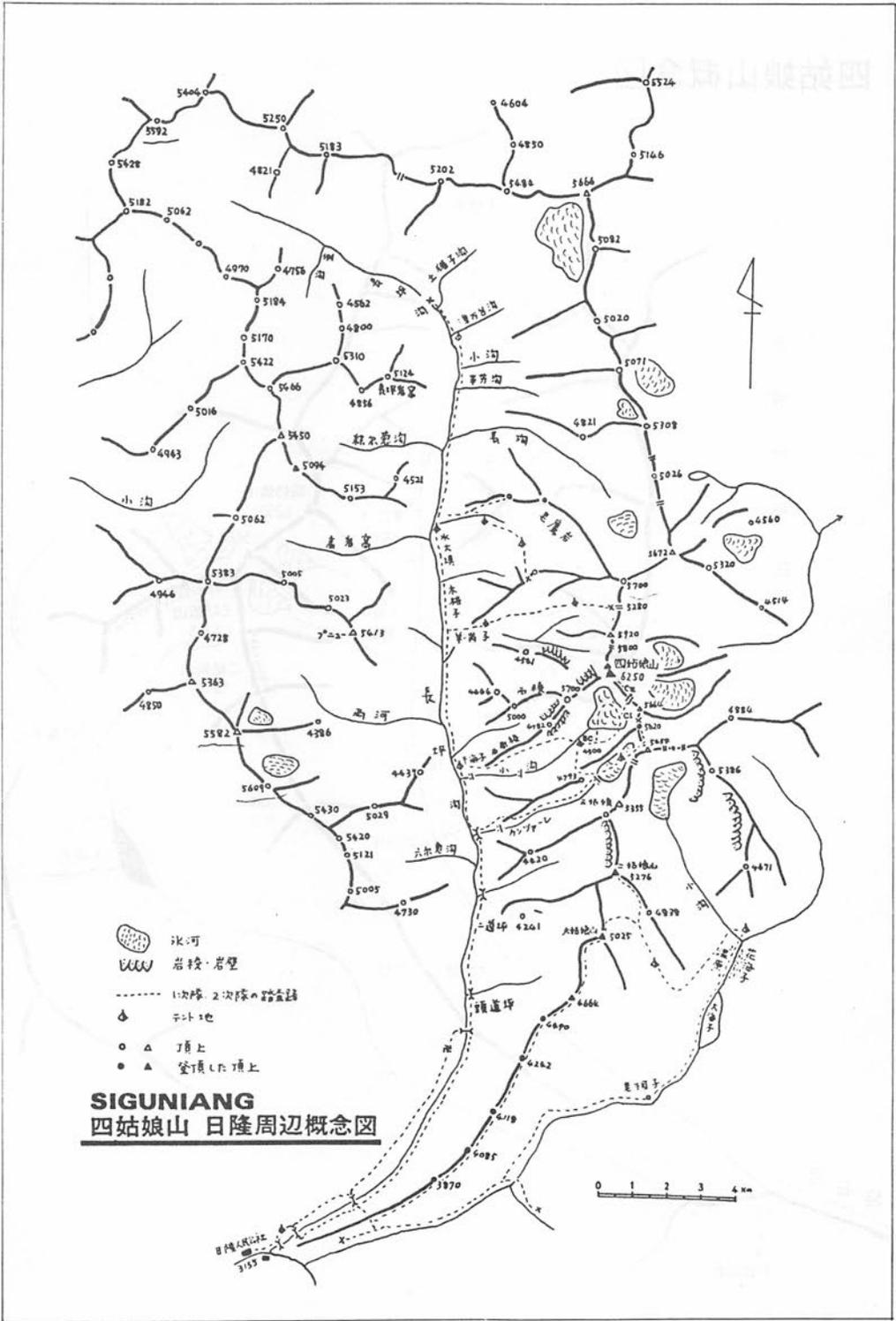
*

(4) 参考文献

ここでは、本稿(1)、(2)、(3)を書くにあたり参照した、手持ちの文献についてまとめる。原則として、記載されている発行日の古い順にまとめてあるが、同じ隊のものは一部入れ換えた。

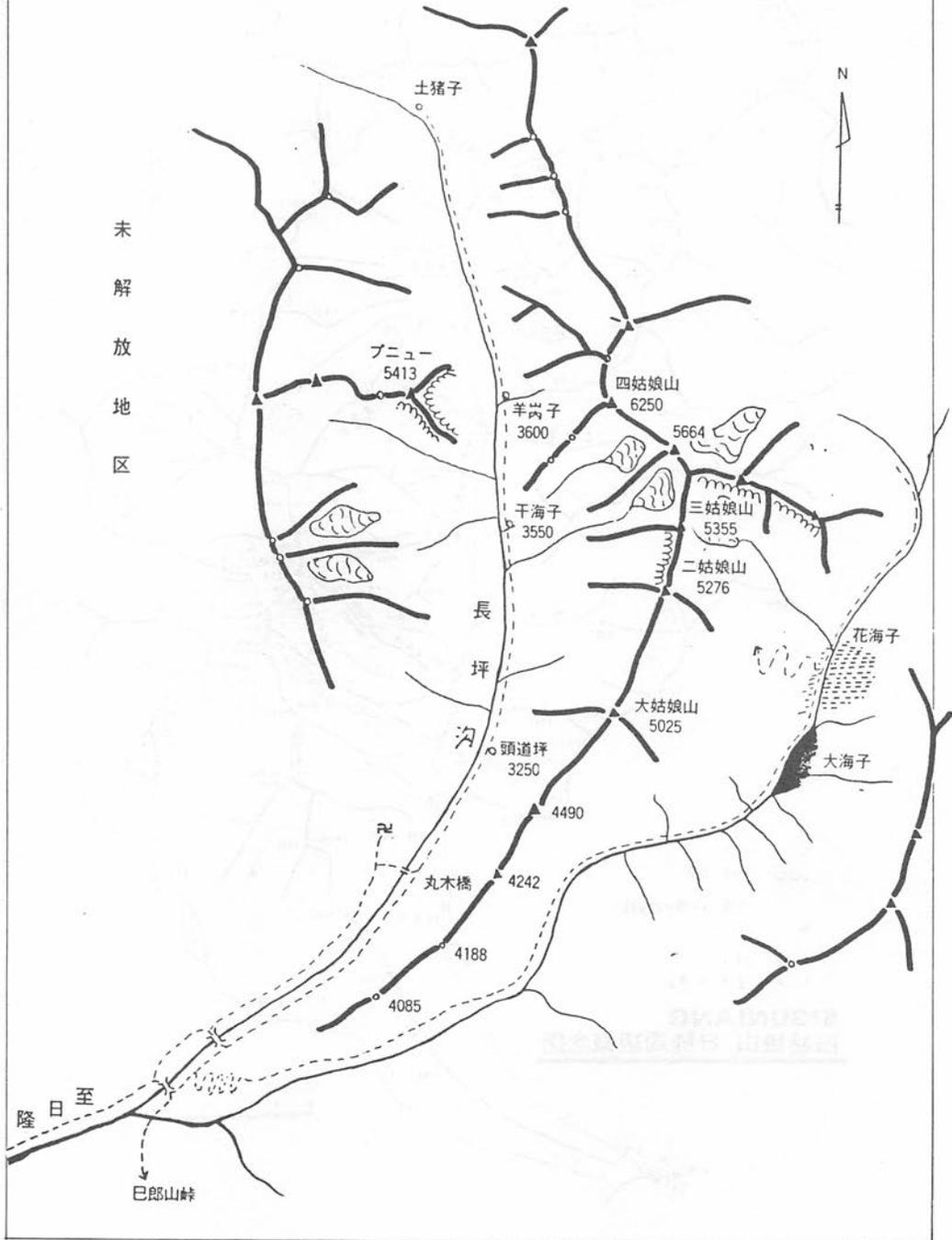
四 姑 娘 山 文 献 一 覧 表

№	書 名	発 行 社	発 行 日	備 考
1	中国登山ハンドブック	ベースボールマガジン社	1981年 12月 20日	中国の山の総ガイド
2	四 姑 娘 山 - 1981 -	同志社大学体育会山岳部	1982年 10月 24日	同志社隊の報告書
3	岳 人 412号	東京新聞出版局	1981年 10月 1日	同志社隊の記録
4	人民中国1982年7月号	人民中国雑誌社	1982年 7月 5日	四姑娘山の案内
5	ヒマラヤ №145	日本ヒマラヤ協会	1983年 12月 1日	踏査隊の記録
6	ヒマラヤ №150	日本ヒマラヤ協会	1984年 5月 1日	〃
7	ヒマラヤ №151	日本ヒマラヤ協会	1984年 6月 1日	〃
8	ヒマラヤ №153	日本ヒマラヤ協会	1984年 8月 1日	トレッキング隊計画
9	岩と雪 106号	山と溪谷社	1984年 12月 1日	セレスチャル・ピーク
10	ヒマラヤ №157	日本ヒマラヤ協会	1984年 12月 1日	トレッキング隊報告
11	ヒマラヤ №158	日本ヒマラヤ協会	1985年 1月 1日	〃
12	山と溪谷1988年1月号	山と溪谷社	1988年 1月 1日	Topics
13	四 姑 娘 山	四川美術出版社	1990年 2月	写真集
14	中国登山の手引	日本ヒマラヤ協会	1990年 3月 31日	中国登山の総合手引
15	Newsletter №82	アルパインツアー社	1991年 5月 10日	案内・募集
16	中国登山の手引第二版	日本ヒマラヤ協会	1992年 4月 22日	中国登山の総合手引
17	山岳年鑑 '92	山と溪谷社	1992年 8月 25日	拓殖大学隊の記録
18	Newsletter №100	アルパインツアー社	1992年 11月 10日	汚される四姑娘山
19	ヒマラヤ №254	日本ヒマラヤ協会	1993年 1月 1日	我々の隊の記録
20	岩と雪 156号	山と溪谷社	1993年 2月 1日	広島山の会隊の記録
21	雲表倶楽部OB会通信14号	雲表倶楽部 O B 会	1992年 12月 25日	〃

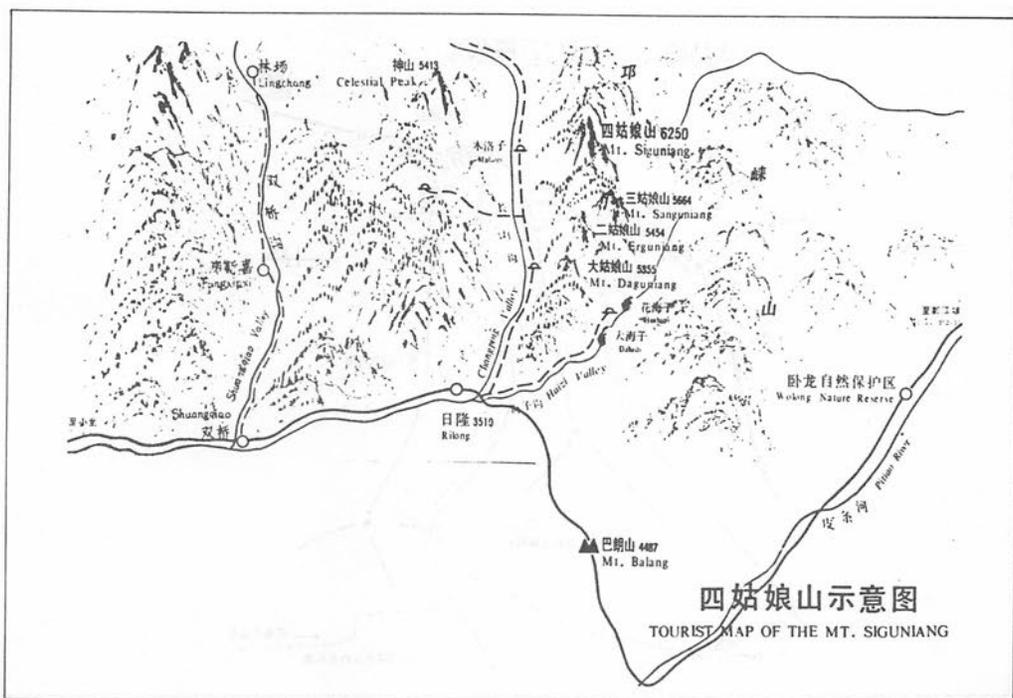


概念图 2

四姑娘山概念図



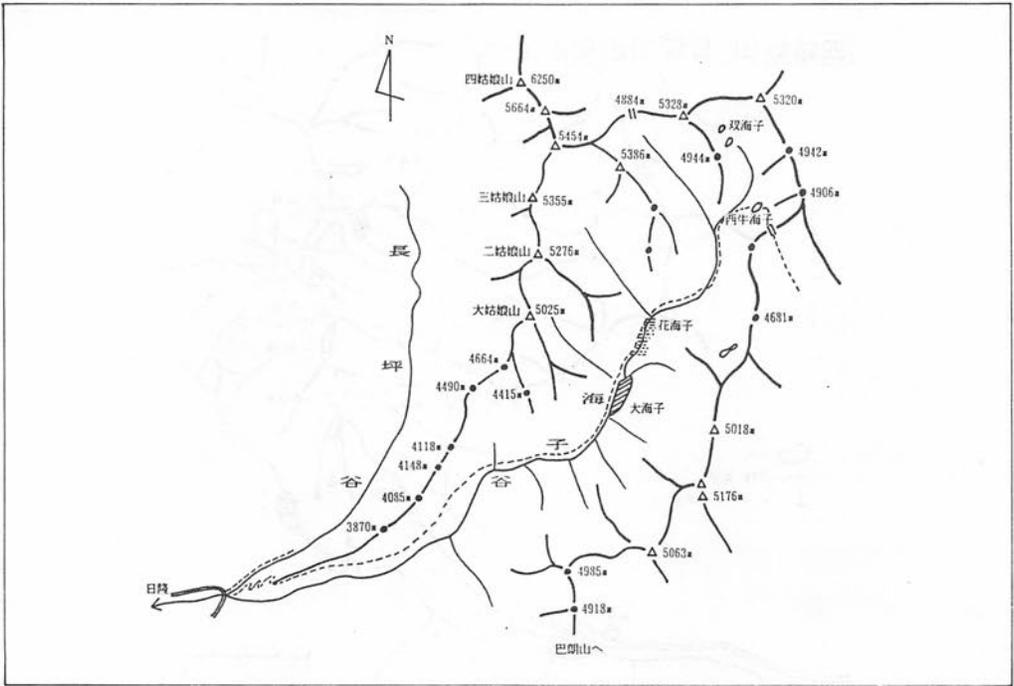
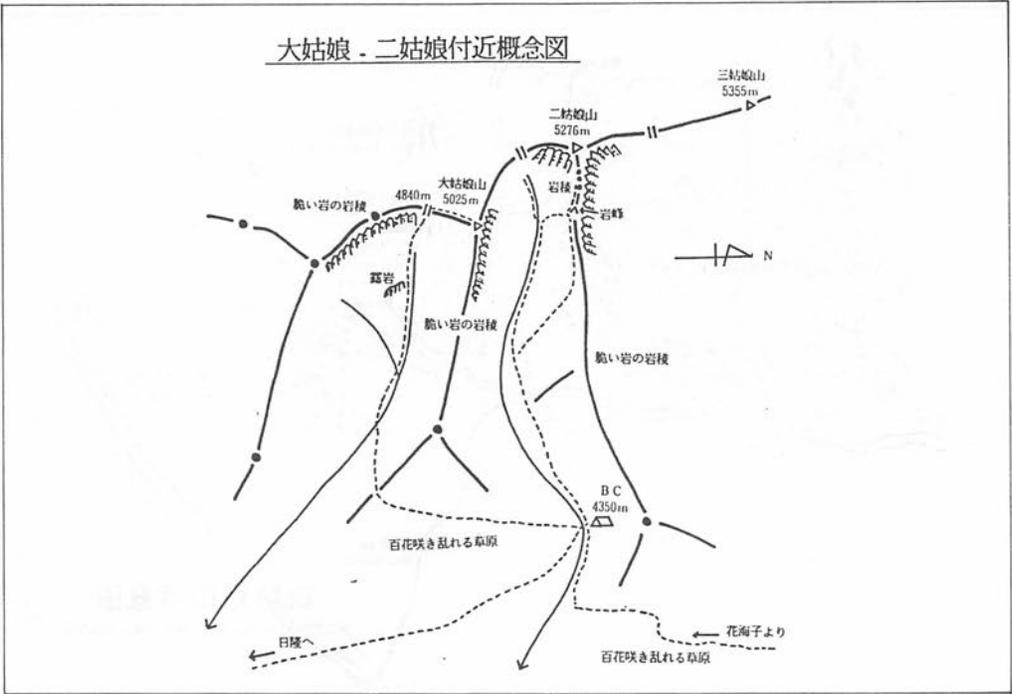
概念図 4



概念图 5



概念图 6



四姑娘の花々について

仕名野 完 治

中国四川省の山岳地帯の花は、各地を遠征してきた人達に聞いてみても格別に美しいと評価が高い。その原因を考えてみると、降雨量とヤク等との共生が考えられる。

アフガン、パキスタン、インド、ネパール等の山岳地帯にはこれ程多種多様の高山植物が密生しているところは少ないようである。それは気象条件によるところが大きであると思われる。年間の降雨量が少なく、乾燥地帯であれば、植物の植生に大きな影響を与える。

四姑娘山域は長江の源流であり、中国大陸の水瓶の一部である。亜高山地帯の斜面の殆どが草原であり、ヤクなどが草を食んでいる。斜面のいたるところはその糞だらけであり、植物の十分な肥料となっている。この自然のサイクルは見事である。そして、足の踏み場もないくらいに高山植物を密生させている。最奥のカルカまでは道がついているが、道を一步外れると持ち上げた足を何処に下ろそうかと戸惑うほどに様々な花が咲き乱れている。ヤクの糞を避けたりするため、しまいには花を踏み付けないように歩くことが面倒くさくなってきて、つつい花を踏み付けて歩くことになる。

どれだけ多くの花が咲き乱れているかという、1平方メートルに7~10種類、色は赤、黄、青、紫、白、橙黄、ピンク等と、あらゆる色の花々が咲き誇っている。まさに高山植物の宝庫である。

種類は、日本で見られる花と同類のものが多く存在している。特に多く見られるのは、日本ではポピュラーとはいえないが、薄雪草で、大小幾種類かの花が足の踏み場もないくらいに咲いている。ヨーロッパアルプスのエーデルワイスと似ているが、少し違うようだ。日本でもエーデルワイスによく似たハヤチネ薄雪草、ヒメ薄雪草、ヒナ薄雪草等があるが、学問的には別に分類されるものようだ。現地では太陽草と呼ばれていた。確かにその形は太陽を思わせる。他、白山や白馬等で良く見られるサクラ草、シオガマ、フウロ草、ウサギギク、タカネウスユキ草、タテヤマリンドウ、タカネナデシコ、オタカラコウ、トリカブト等が目についた。それ以外には、日本の花と同種の花が幾つかあったが、あまり一般的ではなく、名称を確認することはできなかった。珍しいといえば、日本の白馬尻等で見られるアサツキがたまに見受けられた。低山帯では、ヤナギラン、ササユリ的一种、野菊、シソ科の植物、エビネ等が生え、高度によって住み分けが成されていた。日本で良く見掛けるマツムシ草、ゼンテイカ、イワカガミ、イワギキョウ、ショウジョウバカマ、キンバイ、オダマキ、ダイコン草、アオノツガザクラ、ガンコウラン、チングルマ等は見付けることができなかった。

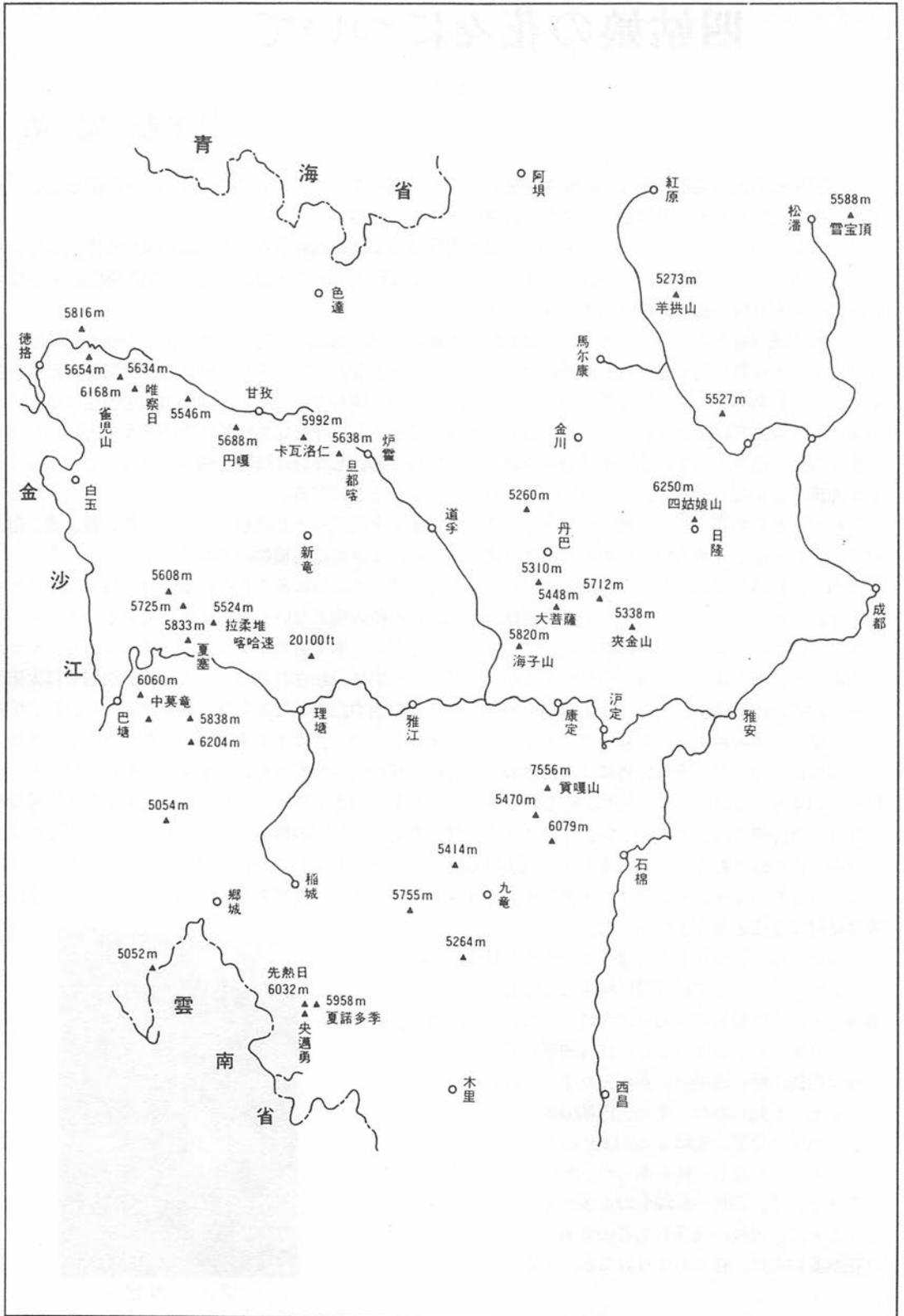
日本にはなく、珍しい物では、コマクサと似ており、コマクサと同じように砂礫帯に植生しているが、花は薄紫色で、その形も違うものが目についた。また、青いケシで知られるブルーポピーは砂礫帯に多く見られ（殊に巴朗山峠の道沿いに多かった）、少ないがイエローポピーも見られた。また、巴朗山峠では、高さ30~40 cm程の草で、先に5 cmほどの赤い布切れのような花をつけた珍しい物もあった。名は不明である。

全体として、色鮮やかなものが多かった、奇異に感じたことは、天候の関係もあるのであろうが、これだけ花が多いのに、蝶をあまり見なかったことである。



ブルーポピー

四川省内高峰位置图



第4部

資料



雪宝頂通信 No. 1

1992. 2. 20 酒井 国光

東京地区では、冬とは思えないような穏やかな日が続いておりますが、皆様にはお元気で活躍中のことと思います。

この度は、雪宝頂（小雪宝頂）隊に参加の意志をいただきありがとうございます。過日、お知らせいたしましたように、第一回の合宿を下記のごとく実施いたします。万障お繰り合わせの上ご参加下さい。

記

1. 期日 1992年2月29日（土）～3月1日（日）
2. 場所 茨城県・酒井宅／東京都・オリンピック記念青少年総合センター
3. 日程

2/29	19:00	隊員紹介・基本計画説明・雪宝頂付近の説明 役割分担・今後の予定など
	20:30	懇親会(昨年のスライド映写)
3/1	6:00	起床、朝食
	7:20	出発
	9:30	
		） 高所順応研究会参加(酒井もパネラーとして参加)
	17:00	
4. 2月29日参加の方へ
 - (1) 常磐線取手駅西口改札口にP. M. 6:30までに集合
(車で迎えに行きます)
(上野～取手間約40分、690円)
 - (2) それ以後の方は、各自バス(約25分、380円)
タクシー(約15分、約2300円)でおいで下さい。

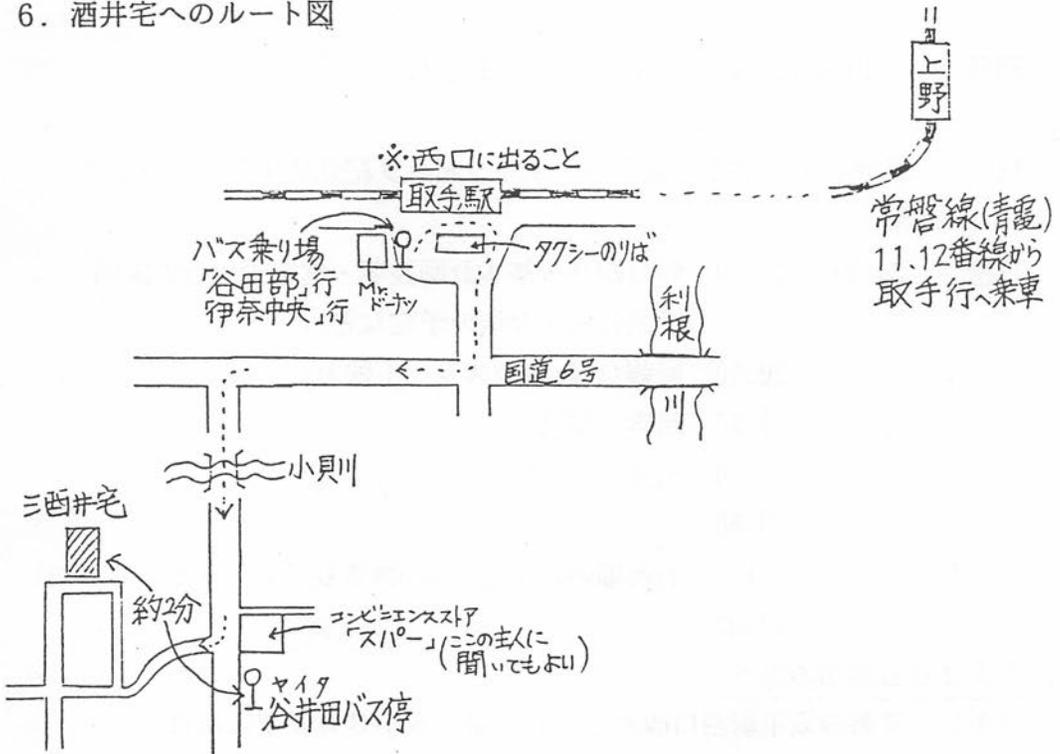
- (3) 寝袋、食事（飲物）はこちらで用意します。
- (4) 次の日の予定を考えて23時ごろには寝たいと思っています。
- (5) 高所順応研究会参加申し込みは、別紙で各自して下さい。

5. 3月1日のみ参加の方へ

- (1) 各自、東京都山岳連盟へ申し込みして下さい。
- (2) 各自、指定の場所へ集まって下さい。

上記4または5への参加の意志を28日までに酒井宅へお願いします。
 住所：茨城県筑波郡伊奈町谷井田1389-5
 電話：0297-58-7337

6. 酒井宅へのルート図



雪宝頂通信No. 2

1992. 4. 18

酒井国光

『雪宝頂』隊第二回合宿計画について

◆前略

第2回合宿を下記のように計画しました。ご都合もあろうかと思いますが、万障お繰り合わせの上ご参加下さい。

- 1. 期日 1992年5月3日～5月5日
*全日参加できない隊員は、1日でも2日でも結構ですので、都合をつけてご参加下さい。(車利用のみ可能)
- 2. 場所 富士山 (B. C. 5合目佐藤小屋付近)

- 3. 日程 5月3日(日) P. M. 2:00 佐藤小屋前集合

B. C. にて打ち合わせ、懇親、泊

1. 自己紹介
2. 係り分担、
3. 今後の予定など
4. 登山技術などについて
5. その他

- 5月4日(月) 技術についての打ち合わせ

7～8合目にて。B. C. 泊 *希望者は頂上泊

1. 雪上歩行について
2. ザイルを使用しての登下降
3. その他

- 5月5日(火) 朝解散・下山

*12時頃には新宿に着きたいと考えています。

4. 準備

共同装備

- | | |
|------------|-----------------|
| ・テント(8人用) | 酒井 |
| ・ツェルト | 頂上宿泊者希望者 |
| ・ザイル2本 | 酒井1、() |
| ・EPIガスヘッド2 | 酒井1、() |
| ・EPIガス4 | 大久保さん購入してきて下さい。 |
| ・ローソク大2 | 大久保さん購入してきて下さい。 |
| ・コッヘル(大)2 | 酒井1、() |
- * () の部分不足しています。都合のつく方、連絡下さい。

個人装備

- ・衣類は冬山用に準ずる。
 - ・シュラフ、マット、アイゼン、ピッケル、
 - ・食器、ホーク・スプーンなど
 - ・カラビナ3、ゼルブストバンド、捨て縄（シュリンゲ）3、
 - ・ヘッドライト、水筒（1～2ℓ）
 - ・その他
- *ユマール、下降器、ヘルメット、ハンマー、バイルは持っている人のみ。

5. 食糧の準備について

	朝	昼	晩
3	各自	各自済ませる	・酒井が準備します
4	・天野さんが準備	各自持参	・大久保さんが準備
5	・谷田川さんが準備	各自考える	

※ 別紙の案を参考にして、日頃の山行を考えて、6人分をご用意下さい。
費用は、当日分担しますので請求して下さい。
費用の目安は、一人一食300～500円で考えて下さい。

※ 懇親会用のアルコールは、各人の『実力』に合わせて、各人をご用意下さい。（多い分には困ることは少ないようです）

6. 今後の予定

① 5月30日（土） HAJ総会 13:00～
都合のつく方参加して下さい。ただし、総会終了後
HAJルームにて遅くまで酒宴を開いていますので、
遅く来ることも可能です。

② 7月4日（土） 雪宝頂隊（HAJ派遣3隊）家族会議、壮行会

※ 追記

現在の隊員は、酒井、仕名野、天野、大久保、谷田川（89年HAJシャラリ隊員）
の5名ですが、この他に岩田達雄さん（谷田川さん知人）が参加予定です。
あと2～3人ほしいですね。お誘い下さい。

※ 参加の確認を酒井まで電話して下さい。（4月中）

※ 月報『ヒマラヤ246号』に、書評を載せました。ぜひ、購入してあげて下さい。
『岳人5月号』に近況を載せてあります。ご覧下さい。

雪 宝 頂 通 信 No. 3

1992. 5. 22 酒井 国光

過日の、第2回富士山合宿ご苦勞様でした。その後、隊員各位にはトレーニング山行に励んでいることと思います。

さて、富士山でも話ができました、第3回合宿を下記のように実施いたします。万障お繰り合わせの上ご参加下さい。

1. 期日 1992年5月30日(土) p. m. 17:00~
2. 場所 東京高田馬場・HAJルーム
3. 内容
 - ① 隊員の確認、紹介
8人目の隊員として、谷田川隊員の紹介で、若い女性加わる予定です。
 - ② 各係りの計画について
各係りとも、素案の素案でいいので考えておいて下さい。
【富士山で話し合った係り】

・食糧…大久保、天野	・記録…谷田川	・医療…岩田
・装備…小太刀、酒井	・渉外…天野	・気象…仕名野
 - ③ 今後の日程
※7月4日(土)の壮行会案内メンバー表、ご記入の上持参して下さい。
 - ④ その他
 - ⑤ 懇親会
※なお、当日HAJ総会があります。都合のつく方ご出席下さい。
またその後、HAJ派遣3隊のスノーバー作りがあり、夜、ルームはその人たちの宿泊所となります。混雑が予想されますので、われわれは10時過ぎ解散し、可能な者は帰宅していただきます。(もちろん、ルーム宿泊も可能です)

※ 本日22日、HAJ山森専務理事と会い、雪宝頂隊について種々検討しました。
その結果8月1日出発についての問題点が出ました。夏休み中であり、1日は大団体が飛行機に乗る予定です。我々の出発は可能なのですが、その場合第1日目北京泊まりとになってしまいます。そうすると、単純に考えて8日間の登山期間が7日間になります。そこで隊員の皆さんに相談いたします。

*期間を1~2日間早められないでしょうか。

つまり、7月30日または31日出発、8月19日または20日帰国

このことにつきまして、この案内が届きしだい早急に検討し電話を下さい。

酒井宅

往復の飛行機については、隊員8名の団体扱いで行動しますので、出発・帰国とも同一行動です。したがって、全員の同意のもとに行動決定します。一人でも不都合の人がいましたら、当初の予定で1日出発としますのでご了承下さい。

記録係・谷田川 武

各地から梅雨入りの報が聞かれるようになりましたが、お元気のことと思います。さて、今回は富士合宿と5. 30日合宿で話され、決定したことについてお知らせします。



A. 富士合宿概要

○日時：5月3日～5日

3日＝午後、5合目佐藤小屋前集合、自己紹介、ミーティング、懇親会（幕営）

4日＝午前～昼過ぎ、7合目付近にて技術訓練（確保、ユマール・8環での登下降）、雪上歩行

大久保、小太刀、谷田川は8合目往復（敬称略）

懇親会（幕営）

5日＝朝、5合目にて解散

○参加者：酒井、岩田、仕名野、天野、小太刀、大久保、谷田川

仕名野は4日午後下山、帰宅

*今回は風が強く、滑落現場、滑落による死亡者を目撃するなど、富士山の風の怖さを改めて感じさせられる山行であった。亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたい。

B. 富士合宿ミーティング内容

○ヒマラヤ協会と遠征の概要について（酒井隊長より）

基本方針＝一人では実現できない遠征であるために参加したことを基本とする。一般の山岳会などとは違って、遠征のために集

まってきたメンバーによって隊が構成されるため、相互を認め合うことが必要である。そして、遠征（登山）の成否はメンバーの能力の総和によって左右される。このことを良く理解しておいてほしい。

遠征関連＝成都までの経路はまだ未定である。北京でなく、上海経由の場合もある。

成田を出てから成田に帰ってくるまでの費用は全て個人負担金に入っている。費用がオーバーしたからといって、徴収はしない。ヒマラヤ協会は一遠征隊単独決算ではなく、その年度の遠征隊全体での決算をする。ただし、病気や事故などで、現地の医療機関などを使用した場合はその隊員の個人負担となる。このため、各自保険に入っておいてほしい。

万が一、遭難などがあった場合、隊としてでき得る限りの対処をするが、経済的負担はできない。

中国での費用の概況を知ってほしい。

○目標の山の決定

雪宝頂と小雪宝頂について（酒井隊長より）

雪宝頂＝ルートとなるルンゼや岩稜が落石が多く、危険度が高い。

2～3回往復をして、ルート工作、フィクス工作をしっかりとやる必要がある。今回の人数では時間的にもやや難がある。

小雪宝頂＝B・Cより上部は殆ど雪で、傾斜のきつい所も少ないようなので、フィクス工作の必要は少なくていいと思う。危ない箇所でも確保で登下降できると思うので、時間的にも問題が少ないと思う。

*第1回打ち合わせでは小雪宝頂ということで話が進んでいる。協議の結果、特に反対意見はなく、

小雪宝頂（5540m）に決定

*小雪宝頂は昨年夏、さがみ家族山の会が初登頂、H A J事務所に1冊報告書があります。

○今後の日程について（酒井隊長より）

5月30日 HAJ総会があるが、できれば参加を、その後第3回合宿を実施したい。→協議の上、17時 HAJルームにてと決定。

7月4日 合同家族会と壮行会

家族会＝15時～17時、場所は未定。誓約書に署名した人に参加してほしい。家族がどうしても出席できない場合は事務局と相談すること。

壮行会＝19時～21時、池袋東方会館。家族は招待、参加者を多めに集めてほしい。案内状発送リストを事務局へ各自郵送すること。

○準備の概要について（酒井隊長より）

食料＝クラウン隊を中心に寄贈品が多くある。雪宝頂隊もそれを分けてもらって考える。購入はできる限り少なくする。

装備＝共同装備はほぼ全部、成都にデポしてある。日本から持っていく物は殆ど無いと思う。このため、アナカン（事前に隊荷を送ること）は未定だが、おそらく無しになると思う。

燃料についてはB・Cではガソリン、照明用とC1ではEPIガスを使用する。

医療＝酸素はO₂パックとボンベとを持参する。

○役割分担の決定

食料＝大久保・天野 装備＝小太刀・酒井 医療＝岩田・（堀）

渉外（ゴミ対策を含む）＝天野 気象＝仕名野 記録＝谷田川

○登山技術などについて（酒井隊長より）

アムネマチン隊の資料が配布され、資料の図を使って技術の基礎などが説明される。各自、価値観、方法などが異なるため、ある程度の共通性を有していく必要がある。各自、資料を良く見ておいてほしい。

C. 富士合宿技術訓練

○確保法＝スタンディング・アックス・ビレーを練習する。遠征時もこの確保法を中心に行う。

○登下降法＝ユマール、8環及びタコ足の使用を練習する。遠征時もタコ足をしっかりと使用する。

*その他、酒井隊長の職場の知人やロシアからのゲストを迎えて、良く食べ、良く飲んだ合宿であった。初めての顔合わせであったが、それぞれを少なからず理解することができたと思います。楽しい遠征に成らんことを。

コラムその1

成都の街と味

成都（CHENGDU）は四川省のほぼ中央、長江上流の金沙江、その支流の岷江、沱江、嘉陵江の4本の川が流れる四川盆地の北東部に位置する大都市。温暖な気候、肥沃な土地、多量の雨に恵まれ、巴、蜀と呼ばれた春秋時代より、2000年余の長きにわたり、天府の都として栄えてきた。現在も四川省の省都であり、薄曇りの空の下、しっとりとした大地に、近代的なビルに混じって、茅葺きの木造家屋と緑、そして竹藪などが散在している。杜甫ゆかりの杜甫草堂、三国志ゆかりの武侯祠などに代表される歴史と、人口500万という数字に象徴される現在とがおり混ざっている。中心街の歩道には掛け軸売りなどが並ぶ。

四川はいうまでもなく食の国、名物が多い。何ととっても、日本人に馴染み深いのは麻婆豆腐、これは陳家のお婆さんが、昔、材木運びの労働者向けに作り出した庶民料理で、我々も元祖陳家麻婆豆腐店にてその味を味会うことは確実。これが旨い。小吃と呼ばれるスナック類にも名物がある。珍珠元子はもち米をまぶした蒸し団子で、肉あんや甘い胡麻あんもある。究極の辛さで有名な担担麺には辣油と唐辛子とがたっぷり入っている。極め付けは何ととっても火鍋だ。シャラリ隊の報告書から抜粋すると、「特に火鍋にはびっくりした。各テーブルにはトイレットペーパーが置いてあり、鍋にはラー油と香辛料のような物が煮えたぎっている。好みでうなぎ、どじょう、きのこ、野菜などを入れて一度煮立ちしたらニンニク油のタレをつけて食べる。最初はビビったが、一口食べたなら案の定、口の中は火事だった。あわててビールで鎮め、意を決して2回3回と挑戦するうちに順応できた。土用のうなぎよりはるかに効力がありそうだ。それにしてもこんな過激な料理は初めてだ。」多分、我々もこの料理に挑戦することになるでしょう。胃薬の用意を忘れずに。



D. 5月30日合宿概要

○日時：5月30日、17時より HAJルームにて

酒井隊長より山域、ルート、日程、登攀などについて概況説明

係より装備、記録についての説明

富士合宿の食費決算

その他、総会后懇親会

○参加者：酒井、岩田、仕名野、天野、小太刀、大久保、谷田川

E. 5月30日ミーティング内容

○出発と日程について（酒井隊長より）

7月30日出発に変更、その日のうちに成都まで入る。

成田：10時頃発→ANA→北京→CAAC→成都：21時頃着

その後の日程は

2日目（7/31）：成都滞在—デポ品確認・パッキング、食料
購入、歓迎会

3日目（8/1）：成都——松藩（招待所泊）

4日目（8/2）：松藩——大姓—麻病村（幕営）

5日目（8/3）：麻病村滞在—高所順応・休養

6日目（8/4）：麻病村—B・C（4100mの予定）

7日目（8/5）

）：登山期間8日間、班別行動、C1（4800
mの予定）

14日目（8/12）

15日目（8/13）：B・C—麻病村

16日目（8/14）：麻病村—大姓——松藩

*道路状況によっては成都をめざす。

17日目（8/15）：松藩——成都

18日目（8/16）：成都滞在—デポ品整理、観光

19日目 (8/17) : “ - 観光、答礼会

*状況によっては登山期間を1日延ばす。

20日目 (8/18) : 成都 - C A A C - 北京

万里の長城か故宮観光、夕食会

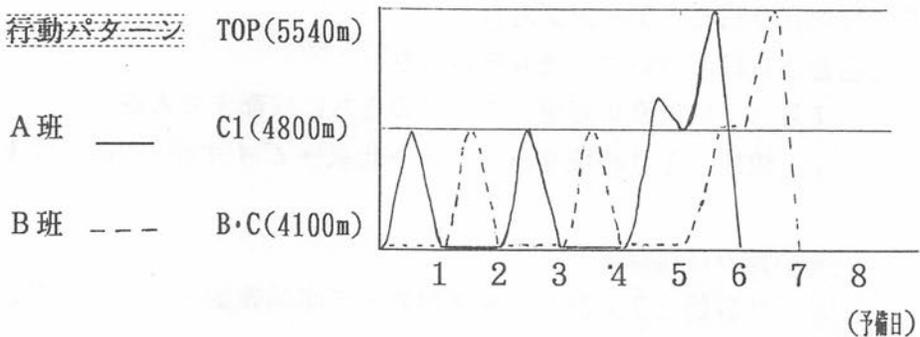
21日目 (8/19) : 北京 - 成田

○山域及び登攀について (酒井隊長より)

山域及びルートについて地図が配布され、概要が説明される。二雪宝頂と小雪宝頂と不明確な点がある。

昨年のがみ家族山の会はアルパインスタイルに登っているが、我々は高所順応をじっくりと行い、ひとりでも多くの登頂を目指す。

2班に分け、1日ずらして行動し、1日行動したら、1日休養とする。



○隊荷について (酒井隊長より)

先の行動パターンで考えて、C1は4, 5人用テント1張りで一人1泊ですむ。

共同装備はデポ品で賄える。日本から持っていくのは個人装備と食料が良い。食料は8人×10日(幕営)で80日分、1日1kgとして80kg。これ+アルコールが10kg。個人装備は8人×15kgで、120kg。これで計算すると、総量210kg。このため、別送(アナカン)はせず、全て出発日持参する(ひとり預け20kg、機内5kg)。

食料については、隊員の平均年齢が高いので、米は少なめにし、うどん、ラーメンなど、消化の良いものを多めにすると思う。来週、ヌン隊とギャー隊とが梱包を終えるので、残った食料を見て、係で原案を考えてほしい。参考として、昨年の雪宝頂隊の資料配布。7月4日には梱包し、ABCで成田まで送っておく。

○記録について（谷田川より）

記録及び報告書についての基本方針、素案提案（別紙プリント）。

○装備について（小太刀、酒井隊長より）

詳細は別紙プリント、成都デポ一覧表参。

ザイル9mm2本、フィクスロープは10本。

B・Cはメステント、男子2張り、女子1張り、中国隊2張り。

C1は4、5人用1張り。

無線3台（大久保、谷田川）。高度計2台（酒井、谷田川）。

ラジオ／テレコ1台（大久保）。

酸素はアックスマン1台、O₂パック4台をB・Cへ。

個装ではカラビナを各自3個。服装は日本の5月の山に準じる。

食器はデポ品を使用。

コラムその2

チベット仏教

チベット仏教は7世紀、インドから入ってきた大乘仏教の一派で、瞑想を重視する密教である。ラマ教というのは俗称で、ラマは本来は高僧を意味する言葉。チベットにはもともと呪術的な民間信仰のボン教があったが、7世紀吐蕃王国（ヤルルン王国）の王となったソンツェンガンポの仏教保護により発展し、信者はモンゴル、ネパールにまで広がっている。四大宗派の中で最大のものが観音菩薩の化身とされるダライラマを擁するゲールグ派（黄教）で、開祖は15世紀の高僧ツォンカパ。その他ボン教に最も近いニンマ教（紅教）、元の保護を受けたサキャ教、カギユ教などがある。六字呪文といわれるその呪文は『オムマニペメフン』。その呪文は人々を極楽に導くものとされ、日本の六字名号『南無阿弥陀仏』と通じるものとされる。現在でも、その呪文が書かれた布・タルチョーが多く風に棚引き、マニ車がくるくると回されている。

記録係・谷田川 武

梅雨が明けて、炎天の毎日が続いていますが、お元気でしょうか。さて、いよいよ出発が間近に迫ってきました。そこで、今回は過日の家族会での話や最終確認事項についてお知らせします。



A. 食料梱包

- 日時：6月21日 10時～ HAJルームにて
女子隊のレーションなどの余りを使用し、小プラパール3個に朝、昼、夜別（医薬品も含む）に梱包。各16Kg程度。
生鮮食品は現地にて購入する。
終了後、簡単な打ち合わせ、確認を行う。
- 参加者：岩田、天野、小太刀、大久保、谷田川

B. 合同家族会

- 日時：7月4日 15時～ 大正セントラルホテルにて
全体会
隊員および家族の紹介
終了後、雪宝頂隊での打ち合わせ
- 参加者：全隊員および家族代表者
- 全体会内容：
 - ヒマラヤ協会について（山森氏）
 - ヒマラヤ登山の特殊性について（尾形氏）
 - 各隊の構成と実施概要について（各隊隊長）
 - 誓約書と事故発生時の対応について（山森氏）

○隊打ち合わせ内容

酒井隊長より各家族に対して酸素を持参することや登山概要の補足などの説明

各係関係

装備＝成都にあるコンロは全部処分してしまったそうなので、新たにコンロを2台購入していく→コールマンピーク1購入（小太刀）

無線は協会にあるトランシーバーを使用する→チェックをする（大久保）

バイルは間に合うので持っていく必要はない。

トランシーバー用のアルカリ電池は共同で用意するが、ヘッドランプ用の電池は各自持参してほしい。

カラビナとシュリングを各自3個ずつ持参してほしい。

医療＝係よりチェック表、携帯医薬品リスト、登山の医学のプリントが配布される。各自、目を通しておいてほしいとのこと。

気象＝係よりどこまで用意し、記録したらいいかの質問が出され、隊長より朝、昼、晩（夕方）の天候と温度程度で、適宜判断してもらえばいいとの返答がされる。

その他＝ラジカセを2台持参するので、各自好きなテープを2本ぐらい持参してほしい（大久保より）。

出発前夜はどうするのか、荷物（プラパール）の輸送はどうするのかの質問が出されるが、この2点については細かい点を詰めていないので、山森氏と話を詰めた上、隊長より連絡を流すこととなる。恐らく、前夜、ルームに集まる必要は無く、当日成田集合になると思うとのこと。

C. 合同壮行会

○日時：7月4日 19時～ 東方会館にて
多数の出席者があり、盛り上がる。

D. 最終確認事項

各係と連絡をとった点、私の方で気が付いた点を流します。

○プラパールについて

当日集合が早いこと、ルームに集まれるメンバーが少ないことから、事前にABCで成田に輸送することとしました（手配は大久保）。

○アルコールについて

ルームに無いとのことですので、各自、できましたら、水筒にウイスキーを入れてきてください。成田で日本酒のパックを、中国でビールも購入しますが。

○持ち物について

次のものを忘れないようにしてください。

体温計、サングラス、日焼け止め、バンドエイドなど使用度の高い医薬品、軍手、カラビナ・シュリング各3、ヘッドランプ用予備電池、カセットテープなど

○ワッペンについて

私の卒業生にスポーツウェア関係に就職している生徒がおり、過日、就職の求人で来校したため、聞いたところ、思ったより安くできるとのことなので、独断ながら、一人2枚作成を頼みました。ただ、注文した時が遅かったので、出発前日着で送付するか、成田で渡すかになってしまいます。利用できない人も出ると思いますが、記念としてください。なお、1500円をカンパ願えればと思います。独断で申訳ありませんが、ご了承ください。

○集合について

酒井隊長よりすでに連絡がっていますが、もう一度確認します。

8時 成田空港 南ウィング

NH-905便 全日空カウンター前

空港に入る際、登山計画書を見せる必要があるかも知れませんが、コピーなどを直ぐ出せるように用意してきてください。

機内持ち込み以外の荷物を12kgしてきてください。

*何か不明の点がありましたら、出発まで余裕がありませんので、直接酒井隊長の所へ問い合わせをしてください。それでは30日に。

1992. 9. 7 記録係・谷田川 武

早いもので、中国より帰国して20日程が経ちますが、お元気でしょうか。色々あった遠征だけに、味わい深い思い出が数多く残ったと思います。記録が新しいうちに、報告書を作成し、発行したいと思います。以前提案しましたように年内発行を目指したいと思いますので、協力をお願いします。そこで、今回は報告書についての係り案を提示したいと思います。第3回打ち合わせで配布したプリントも参考にしてください。



A. 報告書題名について

○係りで考えた案は次のようです。

『美しき谷の姉妹峰（四姑娘）への旅—彷徨える登山隊の記録』

*他にいい案がありましたら、下記Dの集まりまでに考えておいてください。集まりで協議の上、決定したいと思います。

B. 報告書内容について（目次案）

○口絵写真と行程図

カラー・・・1P

モノクロ・・・6P

地図・・・1P

○挨拶

酒井隊長・・・1P

高連絡官・・・1P

○第1部 登山報告（ここよりは通しのページ数）

登山隊の概要

1

行動概要

1

天府を西南、西北へ（出発、ジープキャラバン）

谷田川

3

花咲く牧場、湖を通過（ベースキャンプへ）	？	6
滝上のガレ場へ（太姑娘、二姑娘ルート偵察）	酒 井	8
花咲く道のトラバース（太姑娘ルート偵察）	谷田川	9
ガレ場をコルへ、そして頂きへ（太姑娘登頂）	岩 田	10
鋭峰へ道を求めて（二姑娘ルート工作）	大久保	12
雨降る中無念の荷下げに（二姑娘ルート回収）	小太刀	14
濡れ鼠となって（太姑娘登頂）	天 野	15
二度目の頂きへ（ “ ” ）	仕名野	16
ベースキャンプあれこれ（ベース滞在）	？	17
日隆あれこれ（日隆滞在）	天 野	18
晴れゆく谷に思いを残して（ベースキャンプ撤収）	？	19
天府、そして悠久の都へ（ジープキャラバン、帰国）	谷田川	20

隊員の横顔 24

酒 井	（谷田川）
岩 田	（酒 井）
仕名野	（岩 田）
天 野	（仕名野）
小太刀	（天 野）
大久保	（小太刀）
谷田川	（大久保）
高、陳、呉	（谷田川）

* （ ）の人が前の人を紹介を書いていただけだと思います。住所、勤務先、登山歴などは係りでまとめます。

○第2部 隊務報告

事務局日誌（準備日程）	酒 井	31
総括・渉外	”	32
登攀	”	33
装備	小太刀	34
食料	大久保	36
医療	岩 田	38
気象	仕名野	40

記録	谷田川	41
環境	天野	42
○第3部 随想と考察		
随想		45
*各自2ページ、写真(顔写真外)を入れる。		
考察		
四姑娘と周辺の山岳について	酒井	59
小金県と日隆について	谷田川	62
(四姑娘の花々について)	仕名野	64)
*他に何か書けるようなものがありましたらお願いします。		
○第4部 資料		
隊通信		67
四姑娘登山小史及び和文参考資料一覧		85
四川省高峰位置図		86
○編集後記	谷田川	87

*適宜モノクロ写真、地図、コラムなどを入れます。

*係りが考えた案は上記のようです。何かありましたら、やはりDの集まりのときまでに考えておいてください。話をした上で、原稿用紙を渡したいと思います。参加できない方には郵送します。

*報告書に使ったら良いと思われる写真を各自10枚選んで、集まりの時に持参するか、郵送してください。

C. 写真焼き増しについて

○遠征中の酒井隊長提案のように、他隊員が撮っている物がありましたら、焼き増しをしてそれぞれ郵送するか、集まりのときに持参してください。

D. スライド上映及び報告書作成準備集会

○10月3日(土) 19時～ HAJルーム

少し豪華に杯を重ねながらやりたいと思いますので、会費2000円にしたいと思います。いろいろと忙しい時期だとは思いますが、宜しく。

お元気でしょうか。早速ですが、以下の2点について連絡致します。

① 1. 報告書発刊について

*発刊について

報告書の原稿全て揃いました。期日を厳守して下さった方は協力ありがとうございました。最後の原稿提出がこの2月に食い込んだのと、指定した原稿字数(47×42)でないものもあって、編集にだいぶ時間が掛かってしまいました。このため、当初の予定よりだいぶ遅れて、3月20日過ぎ完成の予定です。できましたら、また連絡しますが、取り敢えずは、2の会の時に1冊ずつ持っていく形になると思います。配布については後日連絡します。

*編集について

皆さんの意見を聞いたところ、多少費用が高くなっても、1Pでもカラー写真をいれたいとの意見が多かったので、カラーページを入れることとしました。印刷所との打ち合わせで、1Pよりも2Pにした方が経済的だということで、口絵として2P入れることとしました。

我々の思い出ということを第1に考え、資料として“通信”をそのまま載せる他、適所に白黒写真も多く入れるなどしました。

また、四姑娘の案内的内容を持たせることとしました。このため、四姑娘周辺の概論、四姑娘山域の概論、登山史などでかなりのページを占めるようになりました。

皆さんの原稿については、明らかな誤字、脱字、文章として繋がり悪い箇所などはこちらで訂正させてもらいました。また、編集の割振りの関係で、原稿を一部削除、逆に追加させてもらった箇所もあります。隊員の横顔については行数が同様になるように調整しましたが、ばらつきがあります。以上の点についてご了承ください。

校正は係りで責任を持ってやりますが、もし自分の原稿の校正をやりたい方がいましたら、できるだけ早くご連絡下さい。

当初の予定よりだいぶ原稿が増えましたので、総数で100P近くになります。係りとしても、かなり立派な報告書ができるものと期待してい

ます。楽しみにして置いて下さい。

*費用について

まだ確定していませんが、カラーページを入れるということで、割高になります。およそひとり45000円程度かかるものと考えておいて下さい。40冊以上希望された方は多少負担金が増えることをご了承下さい。正式な金額が決定次第お知らせし、2の会の時に徴収したいと思います。2の会と共に負担が大きいと思いますのが、ご了承ください。なお、HAJの方へ40冊納入します。

2. 報告書発刊記念集会・山行について

* 昨年の集まりの際に決定をした線に沿って、以下のように進めたいと思います。もし、都合が悪くなった方や会そのものを考え直した方が良いなどの意見がありましたら、早急にご連絡ください。

3月26日～27日 京都にて

* 仕名野さんと連絡を取って、一応以下のように話を進めています。

3月26日 17時京都駅北口集合

仕名野さんの弟宅（空き家だそうです）にて飲み会、泊

3月27日 比良山系の武奈ヶ岳登山（悪点の場合は京都市内見学）

夕方、京都駅にて解散、せっかくの機会ですから、日程のある方はその後自由に京都周辺を回って下さい。人数が揃うようでしたら、一緒に計画し、回りたいと思います。

* 詳細は後日連絡をします。

それでは、3月末に。再見。

編 集 後 記

晴天の霹靂という言葉がありますが、今遠征は小雪宝頂から貢嶮方面へ、そして四姑娘へと、正にこの言葉を思わせるものがありました。

遠征前半はどうなるのかとはらはらする毎日でありましたが、今振り返ってみれば、その彷徨の日々も懐かしく思い出されます。そして、登山としてはやや消化不良の思いが残るものでありましたが、四姑娘という美しい名峰に接することができたことに誰もが大きな喜びを感じているものと思います。

未知の山域でもなく、大姑娘登頂という一般的な結果に終了したため、この報告書は第一に我々の思い出ということを考えて作成しました。第二には短期間に5,000m、6,000m峰に触れることのできる地域としての案内的性格を持たせるようにしました。そして、第三には遠征の実態、特に遠征の楽しさというものが伝わることを考え編集しました。この意図がどこまで実現できたかは疑問が残りますが、我々ひとりひとりの遠征に寄せた気持ちだけは十分に表現できたと思います。

蜀の都成都、史跡都江堰、パンダの居留地臥竜、緑美しい巴郎山、百花咲き乱れる高原、そして天に白く尽き立つ四姑娘——それらを結ぶ旅は素晴らしいものがあります。しかし、それだけに入域する者には、人々との関わりを含めて、節度ある行動が必要とされると思います。我々はできる限りの環境保護に努めたつもりではありますが、この点をこれからの自戒の意味も込めて強調しておきたいと思います。それがこの報告書に案内的性格を持たせた者の責任であると考えます。

今遠征にあたっては、ヒマラヤ協会の他の三隊の方々に、食料、医薬などでお世話いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。そして、残念なことに、初登頂を目前にして雪崩のためクラウンに永眠することになった二俣氏の冥福を心から祈りたいと思います。

最後に、今遠征に様々な形でご支援、ご協力をいただいた方々に心から厚くお礼を申し上げます。有り難うございました。
(記：谷田川 武)

美しき谷の姉妹峰

92小雪宝頂隊報告書

発行日	1993年3月20日
発行人	H A J '92 小雪宝頂登山隊
発行所	日本ヒマラヤ協会
〒169	東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル 506号
☎	03-3367-8521
編集者	谷田川 武
